て野象退治に關する特別の許可を受ける迄に運んで居た、故に余の歸園は同業者一同の非常な歡迎であつたのである、余の象狩！娯樂と云へば云へ、好奇心と云へば云へ、今や公衆の利益保護の爲にライフルを執りて起つのである余の壯樂亦必ずしも徒事ではなかつたのである、余は先年ムーア河畔に野象を追つて慘澹たる苦楚を嘗め、幾多の經驗と智識とを得た種子が今や結實の期に入つたのに對して心密に會心の笑を洩したのであつた。

間もなく余はジョホール國王から野象退治に關する特別許可を得ると同時に國王から象狩用の銃二挺をも讓受けた、併し此銃は十番口徑のライフル、彈丸は鋼鐵で黑色の火藥を使用するものである、二三十年前迄は半島の象狩用として權威を謳はれたのであるが、今や火器の進歩はこの樣な貫通力の乏しい、おまけに重くて携行に不便なる舊式のライフルを棄てゝもつと輕便で且つ精鋭なものを使用する樣になつて居る、尤も之を土人に持たしめるのは大さう都合が好い、彼等は新式の小口徑よりも多年手馴れた大口徑を喜ぶ計りか國王からの讓受と云ふ一事が痛く彼等を難有からしめるからである、余は象狩用の一挺を

有て居るが更に精鋭な一挺が要るので四五〇番コーダイト、ライフルを購入したのである、これで後日余が巨象數頭を射殺する樣になつて、被害園一同から余に對する感謝の爲めに改めて余に此銃を贈られたのである、永への好紀念！。

象狩の特別許可は受けた、銃の準備は調つた、然し未だ一の不足がある、开はトラッカーの事である、前述の如くトラッカーに其人を得ると得ないのとは直ちに結果の成敗に關する、余は茲に於て先年ムーア河畔の狩獵に卓越の手腕を認めた土人マサーを招聘したのである、斯くて一切は出來上つた、今は只管被害園の警報を待つのみとなつた。

二　トロ河畔の象狩——初めて野象を斃す

或日の午後新架坡から園に歸ると余を待つて居る一人の客がある、ジョホール河畔トロ、スンガイ南亞園からの急使で、余の顏を見るなり前夜同園に數頭の野象が侵入して甚だしく栽培樹を荒した、今尙附近の森林を徘徊して遠く去らないらしいと告げるのであつた、偖は好獵御座んなれと氣色食みつゝ早々獵裝

を調へ、四五〇番ライフルと十二番半ライフルの二挺を持つて、トラッカー、マサーを伴ひ南亞園の使者と共に土人の獨木舟を艤してリダン川からジョホール河に出で燬くが如く熱烈な日光をカヂャンの屋根に避けつゝ枚を銜んで南亞園に向つたのである、時に大正四年七月十日。

トロ、スンガイに舟を棄てゝ、栽培園の間を一哩半行くと南亞園の事務所である、到着したのは早や點燈の頃であつた、其夜は慘澹たる象害談を聽きつゝ、余は翌朝の戰捷を祈つて寢に就く、園員は野象の侵入を防ぐ爲めに或は篝火を焚き或は銅鑼や石油の空罐を打鳴しながら警備に行く、夜半轟然たる銃聲に假寢の夢を破られた時、更に一發又一發、遙かの彼方に銃聲の轟くのを聞く、問はでも知れた象群の出現である、起つて窓外を望むと黑闇々たる護謨林の彼方此方には篝火炎々として天を焦し、銅鑼や空罐を叩く音は爆々たる銃聲と和して光景轉々凄愴を催す、余は身戰場にあるの心地し更に又遠く賴朝が富士の裾野に卷狩をした建久の昔を偲ぶのであつた、天明の追擊を樂しみつゝ再び寢に就き、うと〳〵とする間もなく戸外の物音に眼を覺すと早や夜は明けて警備隊の勇士がゾロ〳〵引揚げて來るのである、徹宵の警戒に蒼ざめた顏、奔命に疲れた重き足を引き摺りながら歸り來る姿雄々しけれどまた悲愁を催すのである、晝間は烈々たる熱氣と鬪ひ、夜は變幻極りなき野象に備へて一睡もする事の出來ない大なる勞苦悲慘の狀、到底內地人の想像だも及ぶ處ではない、遮莫ける一戰に憎むべき敵の首を揚げて積る恨を晴してやらうと、余は心密に彼等を慰め、立つて東天を望むと空は白んで居るが未だ紅焰は見えない、冷かな曉風一陣颯々として余が征衣を拂ふのであつた。

三四　森村護謨園附近に於ける余の最初の象

警備隊の談に依ると拂曉近く象群は柵を破つて侵入し來つて、護謨樹を引拔き始めたので、隊は數回の一齊射擊を試みたが圖々しい象群は一向に應ずる色もなく悠々として狼籍を繼續し徐々に叢林の方向に去つた、未だ遠くは行くまいとの事である、余は他園の被害を聞いて喜ぶのは禮儀に悖るが、護謨園の一角に溫味尙去らざる足跡があると聞いては微笑せずには居られなかつた。余とマサーとアワンの三名は早速身を淸め且つ充分に腹を拵へた後、一事務員に案内せられて野象狼籍の現場に行つた、見ると大小の足跡は廣い範圍に散亂し多くの護謨樹は無殘にも引拔かれ貴重な黃金と莫大な勞力の凝結たる栽培地の一角は目も當てられない慘狀を呈して居る、マサーが全身の精力を双眼に集め爛々又慧々一種凄愴な光りを放ちながら足跡を點檢して居る態度は獵場の獵犬と變りがない、我等は間もなく象群は三頭で、最大なのは牝、次で大なのは牡、他の一頭は象兒らしいとの事を知つた、やがてマサーは最後の足跡と且つ退路の方向を判定したので、余は愈々之を追擊する事に決した、マサーは直ちに木柵外の最大な足跡の上に例の如く香を焚いて森の神に祈禱を捧げ又、余等一行の所

持品一切を煙で洗つた後マサーを先頭にアワンを殿として前進した時に午前八時。

柵外に出ると二日間象群が徘徊した今日は足跡が所在に散亂して熟れが新らしいのかを判別するのに困難であるが、熟練なマサーは單身右往左往密林に進入するかと思ふと雜草中に分け入り、小山を登るかと思ふと沼澤を踏破し遂に進路を發見したらしく、余を麾いて小山を越えて一直線に雜草中を通過し更に小密林を潛つて廣きララン地に出たのである。

今し余等が進める廣き草原の彼方、約十町の距離にこんもり茂つた密林がある、それを目標として草原の中頃に行つた時、マサーは余を顧みて彼の密林に象の氣分がするといふ、五歩に立停り、十歩に耳を傾け、一町又二町、目指す森林の二三町に接近したる頃、マサーの指す方を眺めると風なき森の一角に樹木の搖ぐのが見える、續いて枝を折る音さへも聞える、正しく象が居る、余は既に敵前に在り！と思つた刹那一種言ふ可らざる感動を覺えた、恰も戰場で攻擊部隊が敵の陣地を發見した時の如く、又學生が入學試驗の問題に接した時の如く、策戰計畫

は腦裡に電光の如く閃き、また雲の如く湧き出でゝ來る、元來野獸は總て自分が通過した方向には不斷の注意を拂ふのが常で、中にも怜悧な象族は最も深き注意をして居る、故に此儘跡を追ふて進むとすると敵に覺られる事は必定である、から進路を轉換する必要がある、余は風の方向を察して右方から迂廻して敵に接近するのに決した、かくて足音を忍ばせ、ララン草中を潛行して漸く森の緣に行つた、そこで更に少しく林中に忍び込んですでに敵前三十間の距離に近接する事が出來た。

息を殺して草木の隙間を窺ふと密林に隱れて敵の全身を認める事は出來ないが、その動く度毎に枝葉の間に灰色の巨體が微に見える、尙も凝視すると、見えた見えた、二つの長い鼻、一つは特に大きく、一つは小さい、大なのは牝象で小なのは象兒であらうこの二つの長き鼻が併列して前後左右に打振られて居る、奇觀！熱帶の狩獵家でなくては味ひ得られない壯觀であらう。

トラッカー、マサーの任務は茲に終つたのである、敵の牙城を如何にして拔くかは余の責任、卽ち狩獵家の任務である、トラッカーは其任務を完全に遂行して

今し余をして敵の壘下に立たしめたのである、敵の首を揚げるのは實に余の双腕にある、それにつけても先年ムーア河畔に於ける幾度かの失敗を回顧せずには居られない、而して此度こそはと成功を密に誓ひ且つ確信したのである、余は先づ地形を偵察しようと暫時靜止した、野象は依然として食事を繼續して居る、余は斯くも近距離に巨象の自然狀態を目擊したのは初めてゝある、何とも言ひ得ない快感を覺えるのである、フトふり返つてマサーとアサンを見ると彼等の顏には云ひ知れぬ一種不安の色が漂つて居る、余は彼等の士氣を鼓舞すべく今に見て居れ一發の下に斃すから＝と嘯くと彼等は淋しき笑を漏したものゝ彼等の顏には懸念の色が依然として搖來して居るのを認める、しかし余に取りても餘興でもなければ娛樂でも惡戲でもない、眞劍の勝負である、一歩過らんか怖るべき危險を覺悟せねばならぬ、殊に敵は象兒を伴つて居る、危險の度は一層激しい、亢まる鼓動を抑へつゝ地上に匐つて地形を偵察し風下より敵に肉薄しようと企てたが、悲しき哉、行手に一の難關が横つて居る、中間にある一の谷、差して深くはないが密林の蔓科植物が纏綿して居る、之を潛るには音の立つのを禁

じ得ない、されば土谷の緣を廻つて進むと、風上になるから嗅覺の鋭敏な敵の爲に發見せられるのは必定である、距離は僅々三十間、差迄遠くはない、目標は大い、素人は何故擊たぬと云ふであらう、然し急所は小さい、如何に精鋭の銃器とても、肝腎の照準點たる頭部が竹藪に隱れて認められないから何の施す術もない、心臟とても確認が出來ない、最初の一發で致命傷を與へなければ數彈を巨體に擊込んでも何の效目もないのは解つて居る、今や全く途方に暮れた、如何しようと佇む時、敵は樹間に巨頭を現して此方を眺めた、余は此の機を逸してはと銃を肩に當てる折、早くも彼は再び樹間に匿れて次第に巨體を後方に移動し初めたのである、余は逸る胸を押沈めて銃を下したが音は次第〳〵に遠ざかる、最早躊躇する時でないと決心して谷を渡ると既に敵影は密林の彼方に消えて居る、落膽！余は心の滅入る程に失望した、然し彼の移動したのは自然であつたかも知れない、強ち吾々を發見したとも限らない、すると未だ追及の餘地は充分ある、一小敗に力を落して大事を過るのは愚であると勇氣を回復して、他を激勵して再び追跡を繼續した、時に午前十時恰度敵前に一時間を徒費したのである。

跡を追ふて林を離れようとする時、アソンを巨樹に登らせて進路を偵察せしめると行手一哩許りに鬱蒼たる森林がある、足跡も其方向に在るから野象は恐らくは彼の密林に再び停止して居るだらうとの事、一同勇を鼓し、直ちにマサーを先頭として前進した、十一時頃目的の密林に着くとマサーは敏くも林中に象の氣色がすると告げた、森林の彼方、自然を樂む小鳥の囀りを聞く外四邊森々として死の如き靜寂である、時に風の林間に戰ぎ木の葉を動かす音が寂寞を破りて聞えるのも凄い、余等は極度に緊張した視覺と聽覺を森林に集注して窺ふと樹枝を折る響が幽かに聞える、敵を索り得た余等の血管には再び熱血が脈々として湧き返るのを覺える、余は逸る心を制しつゝ順序として地形を偵察すると此密林は淺き溪谷に莅んで樹木は高くは無いが齒朶類や蔦の類が密々としてびこつて居て一見進入の甚だ困難なことを知つた、よく見ると森の一方には象が尤も好むドリアン樹が十數本あるし、しかも果實は成熟して居る彼は必ず其處を尋ねるであらうと察し、靜かに齒朶の間を潛行し谷を渡つてドリアン樹下に對する最も適當の地點に待ち伏せして敵の來るのを伺ふ事にした。

余の計畫は外れた、必ず來ると信ずるドリアン樹下に待てど暮せど敵の姿は見えない、纔に淺い谷を距てた彼岸には枝を折る音が聞ゆるが彼は少しも移動しようとする氣色がない、斯くて時間が經過すると、日が西に傾くのを如何にせん五分、十分、二十分時間は徒らに經過するが敵が來る見込みのないのに業を煮やし斷然起つて密林の中に進入しようと決心した、齒朶は茂つて居る、蕨は茂つて居る、大小の樹木は幾條となき蔓科植物に纏ばられつゝ茂つて居る、野象に接近するには下草尠き巨木林を最良とすると云ふ原則に全然相反したる現象である、二名の土人は今し余が萬千の危險を冒して前進しようとするのを坐視するに忍びず眼配せして余を引止めようとするのである、しかし余の決心は最早や牢として翻す事が出來ない、土人は已むなく十數間の後方から尾して來た、密林は甚だ深くて到底一直線に進む事が出來ぬ、右に折れ左に曲り漸く狹い一の林空に出た時、象の樹枝を折る音は前方二三十間の近距離になつた土人等は余の境遇が益々危險に赴くのを認めて引戻さうと急でやつて來たが、此時枝折る音は刻一刻と此方に向つて接近するのである、驚きの眼を見張り不審の耳を

傾ける時は早くも十五六間の近くに迫つた、草木に隱れて敵の姿は見えないが草根を踏む音、樹枝を折る響は愈々明瞭に聞えるのである、余は近寄らば一擊の下に斃さうと堅く決心して二名の土人を左側の後方に配置し銃を構へて敵を待つのであつた、軈て象獨特の太き鼻息は益々明瞭になる、その距離は十間に縮み更に七間になつて來る、余は一心に叢林の前方を注視する計り、身體は動かない事石の如くであつた。

間もなく五六間の近距離に小山の如き灰色の巨體が現はれた、しかし未だ射擊すべき時機を得ない、开は敵が肝腎の頭部を樹間に隱して見せない事である、距離は四間となり、三間となつた、まだ頭部は見えない、處が急に齒朶の上、樹枝の下、今度は彼の巨頭が眞正面に現はれた、その長い鼻、その黃味を帶びたる白色の牙、その小さくて愛らしい眼、その顏面の皺迄が判然として認め得る樣になつたのである、射擊の絕好機會！恐らく今を措て他に機會はない、余は銃尻を肩につけた、照準は象の額！引金に觸れた指が將に動かうとする刹那……彼の時早く此の時遲く十二番の半ライフルを持つて左側の後方に在つたアワンは餘りの

接近に我慢が仕切れない、轟然！最初の一發を放つた、嗚呼何たる失態ぞ、最も大切な最初の一發は照準の不正確な土人の爲に過られたのである、この樣な事のあるのを慮つて日頃土人に堅く戒めて置いたのに、嗚呼折角の苦心も水泡に歸するのであるか、しかし今やこの機會に臨んで兎や角土人を責める時ではない、余も動搖せる目標に向つて直に第一彈を放ち次で第二彈を送つたのである、處が敵は其場に斃れるかと思ひきや大音響を立てゝ後方を振り向き樣密林の中に遁走し去つた、密生せる草木は彼が巨體の突破に對して何等の抵抗力もない、彼は恰も平地を行く樣に逃走する、追擊！余とアワンは象の流血に滑りながら追擊に移つた、アワンは山野の跋渉に馴れて居るので速度は迅い、彼は更に二三發射擊を試みた、余も亦更に數發を浴せた、しかし巨象に對しての盲目擊は殆ど無意味である、余が急速力に追尾して漸くアワンに追ひつく頃は、流石の野象も數彈の痛手に弱つたらしく十數間走つては停止し射擊されては又走るのである、余は極力アワンの輕擧盲動を制して追擊を續行すると、その內象は七八間前方の林空に右の側面を露はし長鼻を垂れて立ち止つた、然し兩の耳朶は依然と

して前後に動いて居る、余は最後の狙擊を試みた、照準は彼の米噛！遂に彼甲彈は腦髓に命中したのである、急處に命中彈を受けた巨象は先づ後肢を折り前肢を延ばし恰も犬がチン〳〵する樣な姿勢になり、軈て前肢を折つて右側面を下に全く横に倒れたのである、長鼻は苦痛を訴ふるものゝ如く渦卷のやうに卷いて居る、あゝ巨象！森の權威として無敵を誇つて居た大象も進化した智力と武器とに敵しないで遂に人間の爲めに征服されてしまつた。

マサーは青葉の一枝を折つて祈禱を捧げた巨象の冥福を祈るのである、これは程よい牡象であつた、余等が先刻追跡した牝象と兒象とは何處にか行方を晦ましてしまつた。

余等は凱歌を奏した後、先づ三四哩距つて居る南亞園事務所に引揚げたのである、後にその頭部は剝製となりて東京に送られたのである。

三　象を索めて森林に道を失ふ

トロ河畔に余が象の第一頭を斃してからは暫くの間野象はジョホール河畔

馬來半島に於ける余の猛獸狩

四四　數ヶ月後に於ける巣骨の散亂

の栽培園に姿を現はさない、當時土人の談に據るとジョホール國東海岸の附近セデリ地方は古來野象の巣窟と云はれて居て近頃も其出沒甚だしいとの事であつた、そこで余はマサー外土人一名を隨へて先づテモン河の南洋護謨園から山に這入り廣く足跡を索めたが一も新しいのが見付からないので知らず識らず奥へ〳〵と進んだのである、余等は地理の不明なセデリ地方に行動するのに纔に不完全なる地圖一葉を頼みにしたので不便殊の外に甚だしい、偶々土人に就て地理を質しても言語が曖昧で要領を得な

い、却て之れが爲めに飛んでもない危險に遭つた事さへある、或日の事二時間程の村落に行かうとして土人に敎へらるゝ儘に一の密林を横斷しようとした、野獸の足跡の樣な小路を辿つて山林を眞一文字に進んだが何時かな村落に到着しない、二時間は愚か三時間、四時間經つても晝尙闇き密林續きで一の林空さへも認め得られない、時計を見ると早や五時、日沒を目前に控えて心のみは逸るが足が重くて途は捗らない、次第に心細さが增す計りで今更引返す由もない、今少し行けば村落もあるかと頼りなき頼りを頼んで進ども〳〵密林は、いよ〳〵入つて愈々深く、間もなく蒼然たる暮色は恰も魔の手の如くに襲ふて來て、さなきだに陰欝な森林に一層の凄味を加へて來た、一行は殆んど泣き出さん計りである、かくなつては叫ぶも駄目、人跡未到の深林に誰が救ひに來るであらう、日は全く暮れた。月なき森林の夜は黑闇々として文目も分かぬ眞の闇である、一行は唯茫然として爲すべき術を知らない、遠く犬でも吠えるのを聞けばそこに村落の方向が分るのであるが唯名もなき怪鳥が徒らに樹間に奇聲を發するのでは仕方がない、余は詮術なき儘に樹上に登つて猛獸を避けて一夜をこゝに明さう

かと思つたが、大蛇毒蛇の襲來を如何にせん、余等は歩むともなしに歩を移したが、ふと見ると彼方に一小面が展開して居るらしい、手探りに撿べて見ると確かに廢棄されたガンビア畑の跡、余等は之を見てやつとの事で蘇生の思ひをなしたのである、畑の附近には吃度何等かの小屋がある筈、丈と延びたる雜草の中を狂氣の樣になり右往左往した結果漸く此處に朽果た一軒の小屋を發見した。地獄に佛の思ひで内に入つて見れば屋根は墮ち壁は破れ、床は壞け、とても人の住むのに堪へない廢屋であるが森林に日を失ひ路に迷つた吾々には金城である鐵壁である、時に午後九時、早速枯木を集め焚火をして猛獸除けに充てた、三人はガンビア焚きの土竈の中に這入り纔に携帶のビスケットで飢を凌ぎ、交々歩哨に立つて猛獸の來るのを嚴に警戒をしつゝ一夜を徹した、夜半は程遠からぬ林中に數回虎が咆哮するを聞いて竦然として心膽を寒からしめたのである。余等は幾多の勞苦を重ね八日間に亙りて搜探したが遂に一頭の象をも得ず、落膽の首を垂れつゝコタテンギを經て余の農園の對岸パンチョールに歸着したのである。

四　パパン河畔の象狩

セデリ地方から手を空くしてパンチョールに歸ると、二日前に三井護謨園から野象出現の報があつたとの事である、余は八日間の搜索に隨分疲勞して居つた計りでなく着の身着の儘で衣服の不潔さ臭氣紛々として自分乍ら鼻持ちならず思つたが、野象の出現を聞いては躊躇すべきでない、着替に歸宅する時間さへ惜しんで、直ちに下航する汽船に搭じ、ジョホール河を下りてタンジョン、スラに汽船を捨て、更に小舟を艤してパパン河の上流四哩の地點、三井護謨園に到つた、時に午後二時、同護謨園は流石に三井家の經營である、五千エーカーの開墾地は遺憾なく整理せられて居る、殊に支配人K氏は溫厚の紳士で余等を非常に歡迎して呉れた、直に事務員の案内で東方三哩の象害地に行つて見ると、柵に添ふた護謨樹約千本は無殘にも引き拔かれ巨大の足跡は彼方此方に印されて居る、委細に點檢すると親象二頭、兒象二頭からの一群らしい、併し足跡は何れも既に二日を經過して居るので追ふに由なく、その夜は支配人の住宅で手厚き歡待を

受けつゝ久しぶりに美食を味ひ暖き寢臺に安かな夢を貪つた、翌日各方面からの報告を徵したが前夜の出現を報ずるのはなかつた、已むなく二三の事務員と共に附近の密林に這入り一二の小屋(バンサル)に行つて偵察したが象群は既に去つて影を見せない、こゝに於て余は左の如き判斷を下した、卽ちこの象群は必ずセデリ地方に歸還するものであるからババン川の上流チエマラン地方を通過するに相違ない、而して彼の道程から推察すると同地方を通過するのは正に今夜頃であらうと、余はこの判斷を下すと共に、夕刻支那人の小舟に乘つて更にババン川を溯行し、夜の十二時頃チエマラン港脚に到着し、舟中に假寢して天の明けるのを待つた、この港脚と云ふのは支那人の小部落で親方が此處に住んで配下の三四名を附近の小屋(バンサル)に分派してガンビア胡椒などを栽培させ、收穫物を港脚に集めて中央市場に送る處である、馬來半嶋中到る處に、河水の便がある地味の豐穰な地に港脚を設けて居る、バンサルは意外な山奥にある事もある。

拂曉食事を了つて舟中を飛出し港脚の親方を訪ふて象の形勢を質すと、一ケ

月程前に十數頭の象群が部落の附近に來て酷く耕作物を荒したるが以來絶えて來ないとの話、聊か落膽はしたが兎に角二哩程奥のバンサルに行つて偵察しようと徑路を辿つて出發した、途上ガンビヤを搾いで居る一支那人に會つて象に就て尋ねると行く手一哩程の處に徑路を横ぎつた新しい足跡があるとの事、余は雀躍して喜び、大急ぎで行つて足跡を檢べると成る程新しい、速刻追跡しようとすると何故かマサーも他の土人もどうも前進を喜ばない、余は不審に思つて理由を尋ねた、マサーが前進を喜ばない理由は斯うである、二週間前余と共に象狩の途上猛虎に遭逢して危くも九死に一生を得たのは此處から四哩とは隔たぬ所である、それに今し通過した路面に新しい虎の足跡を見たとの事である、余とても氣味が惡いとは思つた、然し事こゝに至つては躊躇すべきでない、虎は怖ろしき猛獸に相違ないが之に膽を奪はれては森林に野象を狩ることは出來ない、ましてセデリ地方に慘憺の思ひをして漸く此處に足跡を得たのではないか。余は極力彼等を促してつゐに追跡斷行に決した、マサーも余に激勵されて決心したらしく忽ち全精力を双瞳に集中し追跡して密林に分け入つた、間もな

く一つの竹籔が酷く荒されて居るのに出會つた、その狀態から察すると敵はいよ〳〵遠く去らないらしい、叢林を拔け沼澤を渡る途上、數ヶ所で象の遊んだと覺える跡を發見する、勇みの足も輕く山蛭が吸ひ付くのも意とならず、やつと小川を徒渉して小丘に登らうとすると、先頭のマサーは急に立ちとまつた、耳を澄ますと行く手に當つてミシリ〳〵と異樣の音響、余の皷動は、はずんだ、象！。

余等は音する方に一心に近かうとしたが、此邊一面は人丈に延びたる齒朶蕨の類が繁茂して居る雜木林なので、歩行難澁言語に絶するものがある、今し象が通過した跡だけ草木が開けて一の徑路が出來て居るが、地形と風の方向を考へると進むことが出來ない、已むなく少しく後退し左方を迂廻して樹枝折る音を目當に接近することにした、携帶の天幕や食料品の一切を外して一地點に置いて出來る限りの輕裝となつて前進した、かくして漸く象を距つる二十間位の距離に接近した、こゝでは枝を折る音は明瞭に聞えるが其姿は草木に隱れて少しも見えない、併しこれ以上の接近は甚だ危險である、如何にかして姿を見やうとするがこれも叶はない、もう少し左方を進むと草も淺く萬事都合はよいが風上

となるので已むを得ぬ、余は策盡きて暫し、じつとして居たがこゝに一つ不思議があるそれは象の足跡と雜草の高さとを比較して象の姿が露はれないことである、或は彼は大地に坐して居るのではないか、果して敵は坐つて居る、身に迫る危險を知らないで悠々〳〵と坐りながら長鼻を利して附近の蔓や樹皮を料理して居る、余は彼の立ち上るのを待つた、當時これ以外の策は全くなかつたのである。

待つ事一時間、更に二時間、一向起き上りさうもない、焦る心を抑へながら尙待つこと三十分、時しも四邊は急に薄暗くなつて來た、今の今まで一天拭ふ樣であつた大空には濃藍色の密雲が漠々として漲つて居る、荒凉凄愴の感を禁じ得ない、象は未だ起たぬ、余は焦りに焦つて、斷然接近しようと企てた、この刹那肺然たる豪雨は木の葉を散らし樹枝を打ちつゝ勢ひすごく降つて來た、接近の好機！この機を措て他に求むる事が何時出來る？、雨の音に紛れて接近を試みた、余が齒朶の中に第一歩を運んだ時象も豪雨に居堪らなかつたか巨體をぬつと雜草の上に露して移動しかけた射擊と思つたが彼は余と反對の方向に歩を移す爲めに照準點を得ることが出來ない、余は已むなく靜かに彼の尾に附して行くので

ある、稍ありて、象は再び停止して食を漁りはじめた、豪雨は肺然として降つて居る、巨象は悠然として未だ止つて居る、余は銃を構へながら雨聲を利用して前進する、土人二名は二三間の後方から隨ひて來る、余と象の距離は約十間となつた、しかし草木に妨げられて未だ頭部を認める事が出來ない、更に接近した、僅に八間の距離！此時余の心中象を措て何物もない只彼の頭部を認むる事と射擊の爲めの足場を得ることのみである、幸此處は今迄象の遊んだ跡で數間四方が蹂躙せられそれに四五本の巨木があつた、余がその一隅の三尺程高い蟻塚に登つた時、象は急に巨體をまはして余の方に向けた、曠き額、立派な牙、而して巨大なる兩耳をフワ〳〵と煽ぐ樣に動かして居る、好機！前額は理想的に照準に叶つて居る。こゝに於てか轟然一發!!續いて二發を放たうとする時、不思議？象の體は何處に沒したか見えない、襲來か、否、遁れたるか、否、余は信ずる彼は腦天を射たる一彈のもとに斃れたのであると、直ちに土人を樹上に登らしたはたして巨體は雜草の間に横はつて居る、次で余も樹上に登り樹上から頭部を目蒐けて更に二彈を發射しその絶息を確認した後これに接近した、屍を檢すると第一發は前

額部の中央から約二吋偏して居るが彈丸は腦髓を貫通して卽死せしめたのである、時に午後二時！雨全く霽れ日光は鬱蒼たる林間を洩れて淋しげに象屍を照して居る、恰も森の覇王の最後を弔する如くであつた。肩迄の高さ八尺、牙の長さ三尺、年齡三十を過ぎた牡象であつた。

マサーが樹枝を取つて冥福を祈つた後、余等は其日一旦三井園に凱旋した。翌朝未明から同園事務員數十名と諸般の準備をして現場に到り、牙と四肢及生肉の若干を持つて歸つた、牙は同園の紀念に保存せられ余は前肢の一を紀念に、生肉は新架坡に送附して多くの知人に分配した、象は草食動物なので肉は牛豚に比べて大した差なく存外美味な者である。

五　パンテー山麓の象狩

先年ムーア河畔に於ける苦き經驗は遂に余をして二頭の野象を斃さしめた、象と人の活鬪！先人に依つて幾多の巨象が征服されたるのを思ふと余とてもこれを征服し得ない筈はないが、又幾多の先人が象の爲めに危害を加へられた

のを思ふと余とても危害を被らないとは限らない、人間は敵の陣地深く乘込んで踏み馴れぬ舞臺上に立つのに反し象は住み馴れた得意の舞臺である、地の利に於て人間に七分の弱味がある、數間の近距離に於ける決鬪の場合を考へると人が若し象を斃さなかつたら象が人を斃すであらう、若し其處に巨木林があるとする、象が人間に逆襲を試みようとしても太い頸と巨大な圖體とは巨木に妨げられて行動の自由を得ないのに反し人間は動作の輕快を得る、從つて象が一の巨木を迂廻しようとする時、人間は幾多の射擊の機會を捉へ得るのである、象狩の原則として巨木林を撰ばねばならぬのはその故である。若し其處に雜木林があるとする、土地は濕潤な上に齒朶、蕨等が繁茂してさらに樹枝と樹枝との間には蔓科の植物が纏綿して居る、人は一條の蔓を排するのにも一本の齒朶を避けるのにも多少の努力を要するのに反し、象の長鼻が一たび到れば雜木も蔓も雜草も何物も原形すら留めない、さらに巨足の踏む處濕地も水溜も何等の障碍とはならない、それで巨木林は人に利にして象に不利、雜木林は象に利にして人に不利なのは明かである。余が今迄し象狩に立つた舞臺は總て人に不利な

雜木林であつたが幸にも余の天祐はよくその二頭を射止める事が出來た。象狩に對する余の信念は愈々鞏固になつた、不拔の確信を生じた、しかし勝つて兜の緒を締めるのは兵家の習、僅々二回の征象を以つて敢て功を誇ることは出來ない、唯余が‖異國の先人に倣つて果して能く野象を征服し得るや否や‖の疑問と不安とが、聊か解け除かれて――余に公算ありの確信を得るに至つたのである、之と同時に余はこの確信を以てジョホール河畔我が同胞の大敵たる野象を掃蕩せねば已まぬと決心した。かくて余の象狩に漸く膏の乘らうとする時又一つの恨事に際會した、それは片腕とも頼むトラッカー、マサーが約束の期滿ちて歸鄕したことである、已むなく代人を求めようとジョホール河上流三十哩のコタテンギ町から程遠からぬ一小部落に、土人、ベンゴを訪ふことにした、嘗て余は彼に一回會つたが其時彼が屢々國王の象狩に隨つたと云ふので態度の甚だ傲慢であつたことを記憶する、處が余が最近に野象二頭を斃したのを聞いたものか以前とは、打て變つて今度は些か傲慢の樣子もなく始終慇懃の態度を持して迎接するのであつた、彼は年五十路の上を越え頭髮は半ば霜を戴いて居るが

鍛錬した巨軀は頑丈で筋骨は逞しく性亦朴直愛すべき好翁である、既に多少の經驗もあり附近の地理にも精通して居ると云ふから密林の友として先づ採るに足ると思つて、彼の友達ジユマルと共に雇入の約束をし兩三日中に余の農園に來る事を命じて分れた。

歸途老村長マホマツを訪ふて象の消息を尋ねると、二日前に一頭の巨象が村落附近を徘徊して耕作物を痛く荒して去つたと云ふことである、尙程遠からぬマワイ園＝日本人經營＝にも出沒したらしいと附加したので、喜び勇んで早速村長の邸を辭してマワイ園を訪ふた、監督の某は＝出ましたよ象が＝と語るさへ氣色食んで、二日前單獨の巨象が外柵を破壞しようとするので園員の二三名が一齊射擊を以て威嚇すると象は直ちに密林深く姿を沒したと云つた。歸途更に速水園を訪ふと支配人H氏は前夜巨象が柵を破つて侵入し園の一隅を通過して北方に去つたと語る。余は是に由て象の行進方向を察すると彼はジョホール河に沿ふて南から北へ來たのに相違ない、一兩日前にマワイ園から速水園を經由して更に北行したと云ふと今頃は吃度北方六哩のロコ村附近を徘徊

して居るであらうと判斷した、ロコ村附近には米田が多く今や象の好物たる稻の穗は成熟して居る、茲に於て余は之を追躡しようと決し再びトラツカー、ベンコを訪ふて次第を告げ明日を約して歸途に就いたのである。

歸途余は、ふと、トラツカーベンコの事に思及んで一種の不安を感ずるのであつた、彼果して密林中に巨獸と鬪ふ獵友として賴むに足るであらうか、その性質、その技能、總て未だ疑問である、然し余は彼等に射擊の功妙を望むのでない、又彼等の勢力を藉つて萬一に備へ樣と爲るのでもない、余は射擊に於ても、勇氣に於ても他人の加勢を受けるの必要を寸毫も認めて居ない、併し馬來の密林に於て巨獸と鬪ふのには是非とも上下が心を一にする必要がある、萬一にも相互に不快の感を抱く樣な事があつては目的を達し得ない計りでなく却つて一大危險が身に迫つて來る事を豫想せねばならぬ、それに付けてもベンコ等が足跡追躡の任務を丁つて象に對する最後の攻擊が余の責任に移つた後、能く余を信賴して沈着の態度を持し得るであらふか、强敵に對する攻擊には狩獵と戰場とを問はず行動の統一が最も必要である、從來の如く余の命令を待たずに發砲でもし

四五　打斃されたる巨象

て目標を動搖せしむる樣な事があつては忽ち一大苦戰に陷入り、縱令結果に於ては成功してもその成功は決して誇る價のないものになる、余の憂ふるのは彼等土人の輕舉である、狼狽である、盲動である。

翌日余は數日の連戰を覺悟して天幕、食料、着替等を準備してコタテンギに向つた、途上豫て同行の希望があつた秋田園の支配人N氏を訪ふた。氏は剛毅沈勇の好青年である、その日はコタテンギに一泊し、明くれば九月二十七日、早朝諸般の準備を調へ、N氏同伴土人二名を隨へて露を拂ひつゝ北

方六哩のロコ村に向つた。前方を望むと淡き朝霧の薄衣を纏ふブキバンテーの連峰が延々として、さながら吾々の行を迎へるのに似て居る、朝風颯々寒きまでに涼しい、紅や青や紫の、名も知れぬ草花が露深き青葉の野邊に艶を競つて居る、道路は手車さへ通ふので差して險惡ではないが野道のことゝて凹凸繁く泥濘さへ混つて居る、行路捗らず九時を過ぎ十時となると、熱帶の常としてこの頃から日光は急に威力を加へて來る、しかも今日に限つて炎熱殊更に烈しく時々眩暈を覺え卒倒するかと思ふことさへあるが、初識の土人を伴つて居る事として强いて虛勢を張て居る苦しさ、然しこの樣な虛勢は無益に似て決して無益でない、弱味を露はさないのが土人を畏服せしむる第一の要件なのである。

途上生々しき大虎の足跡を發見するかと思ふうち半野獸的の水牛群に出會して甚だ氣味が惡かつた、午後二時頃ロコ村へ到着した。此村落は馬來聯邦ネグリスミラン州より四五十年前に移住して來た土人に依つて造られた村で人家は二三十軒主に米田を耕作して居る、米田とは云ふものゝ到底日本內地の樣に整理せられて居ない、殆ど自然の濕地に近く、稻穗の高さは人丈を沒する程で

ある、余は先づ村長を訪問して來意を告げると彼は大に喜んで紅茶を饗し其他何呉れとなく饗なすのであつた、村の若者等は村長の命令に依つて八方に走つて象害の有無を偵察する、余等は疲れた足を勞はりつゝ吉報の來るのを待て居る、其時一人の者は息せき來つて前夜單獨の巨象が現はれて米田を痛く荒したと告げる、余は想像の外れなかつたのを誇り且つ喜びながら、直ちに村長の案内で象害の現場に行く、途中或る軒下に水牛の後肢が繃帶されてあるのを認めたのでその理由を聞くと、數日前猛虎の襲撃を受けて後肢を嚙まれたのであると云ふ、虎も水牛の角の怖ろしい事を知つて居るのか、大きな水牛に對しては決して正面からは攻撃しない樣である、村落を離れ水深く腰に達する水流を徒渉し米田の間を二三町進むと果して巨大な足跡があつた、成熟した稻の穗は散々に食ひ荒され巨蹟に蹂躙された米田は二三町歩の廣さに亙つて居る、村長はさも怨めしげに被害の跡を眺め、＝トワン(旦那の義)仇を討て下さい＝と哀訴するのも憐れげに見ゆるのであつた。

余等は仔細に足跡を檢べて未だ遠く去らない事を判斷し吃度仇を討ち取つ

て見せると告げて直ちに追跡を開始しようとした、然し時既に午後三時である日沒迄に追及する事は到底覺束ない、又象とても斯く莫大の食物を米田に殘して遠くは去るまい、今夜も此附近に出沒するのは必定であるから明朝追擊しても遲くはないと斷定し、其夜は唯ある土人の宅に戻り、持參の米を炊き罐詰を開いて村の土人共諸共晩食をすますなり余は翌日の祝福を祈りつゝアンペラの上で寢に就いた。

明くれば二十八日拂曉眠から覺ると村長よりの急報があつた。曰く＝只今斥候の注進に據ると昨夜又も象害があつたと、＝余は滿腔の喜悅を感じた、今日は日沒迄に吃度追及することが出來ると思つた、それで重量のあるものは一切村長の宅に留めて置き出來得る限りの輕裝となつて恃みのライフル銃を唯一の賴りに出動したのであつた。

先づ象害の現場に就て進路を定め型の如く足跡に香を焚きて祝福を祈り、成功を誓つて村長等と別れを告げ、余等は愈々追跡に移つた、稻田を離れて濕地林に入ると隨分この附近を徘徊したものと見えて足跡は縱横無盡に印されて居

る、一見何れが新らしいのやら判別がつき難い、しかしベンコとても流石にトラッカーである、能く進路を過らずに濕地林を拔けて大森林の徑路に出で先頭に立つて物をも言はずズン〳〵進んで行くのは滿更でもない、行く事三哩餘、途中象の物を食べた跡も遊んだ形跡もない、若しや昨夜限に米田を見すて丶遠く去つたのではないか、余は先年ムーア地方で一日に二十哩を追擊しても尙ほ及ばなかつた辛い經驗がある、若し象が他に移動するとなればその速力は到底吾々の追及し得る處ではない、心配は心配を生んで、しばし沈默に沈んだ時、足跡は突然左折して密林の中に這入つた、次で小丘に上つて居る。之を見て余は愁眉を開き象はまだ必ず遠く去らないと斷定したのである、小丘の附近では竹と云はず木と云はず食ひ散らした跡が歷々として居る計でなく何れも甚だ新らしい、愈々靜肅行進の必要を感じた、後方に友人の靴音高く聞ゆるのも氣にかゝる、余の靴は護謨底で土人は跣足であるが聽覺の鋭敏な野獸に接近するのには是非とも此位の注意は必要である、行くこと二哩一の清流に出たので、こゝに渴を癒し暫時休憩した、時に正午。此邊より足跡はソロ〳〵曲線を描きはじめて居る、

益々有望なのを喜んで追跡を繼續して居る中象糞が山盛りになつて居るのを發見した、巨獸の排泄物さすがに偉大である、余は今更の如く驚き且つ呆れつゝ直ちに糞の中に手を入れて新舊を檢べて見るとまだ暖味が去らない、愈々敵は近しと余は勇氣の百倍するを感じた、午後一時頃再び象糞を發見した、之を檢べると一層の暖味があつて殆んど湯氣の立昇る樣なので、一同愈々〳〵雀躍し同時に愼密に警戒を加へつゝ進んだのである、兎もするとトラッカー、ベンコの態度が輕卒なのに慊らず屢々余は彼に代りて先頭に立つて最も靜々と徐行を敢てした、雜草が纏繞して步行の困難な事夥しい、徐行を二三十分すると、行く手近くに、樹木を倒す響、樹枝を折る音が斷續して聞える、余は覺えず銃把を握り締めた。

茲に於てトラッカー、ベンコの任務は了つたのである、今後は余の獨舞臺である、敵を斃すか敵に斃されるか一に懸つて余の手腕にある、然らばこの決鬪の舞臺はと見ると青々たる雜草と雜木が滿ち〳〵て居る、只縱に象の通過したる跡丈が一路を爲して他は一步も踏み入ることを許さない、象との距離は早や三十間餘、この樣な場所は人間には極めて不利不便である、回道は數間先で屈曲し其地

點に行けば象を發見する事は出來ようが、また萬一攻擊を受ければ全く死地に陷るのである、已むなく樹に登りて偵察しようと百間許退いたが叢林何處も深く如何ともする事が出來ない、再び元の地點に引き返して象の移動を待つ事にした、時間は容赦なく進んで行く、象は相變らず平然として枝を折り蔓を引き時々フーッ〳〵とたかき鼻息を發して居る計り、處が天祐〳〵天は俄かに搔き曇り黑雲空に漲るよと見る間に急に雨は大砂の如く降つて來た、電光閃き雷鳴轟き、天恰も象と人間との決鬪を司會するごとく光景一層の凄愴を極めた、折柄象は移動を初めた豪雨は尙一層猛烈となつた雷鳴は益々激烈となつた、我等は已むなく銃の保護の爲めに一時枝葉を以て屋根を葺き雨宿をしたのである、その內稍小雨となつたので彼の怪物を逸してはと更に巨跡を追ふ事にしたが此附近には最早敵の影だに無い、我等は心も心ならず小丘を越え小流を涉り軈てラン草の繁茂せる高地に出でたる時、一土人の彼方に〳〵と指す方を眺めると丈餘に延びたラン草原を透してこんもり繁つた森がある、その一角の梢がユラ〳〵と動搖して居る、余は濡れ鼠になつて居るので動作が意の如くならない

がそれをも厭はず地形の偵察を試みると、かうである。右手の方ラン草原の端から森の緣を傳ふて行けば風下なので都合はよいが道が遠い、左手より進めば距離は近いが風上になりて敵に覺られる恐れがある、今から敵に移動されると時は既に三時半、追擊は益々困難になる、余は斷然直行進を得策と認めラン草中に點在する人丈程の小樹を楯に身を隱蔽しつゝ折柄の雨音を利用して潛行した、一同も後から續いて來た、約二十間の距離に達した時、樹影に身を隱して敵狀を眺めると、見える、見える、灰色の巨體と大なる頭部！背後に居つたベンコは余を促してテンバン〳〵（射擊の義）と底力强く囁く、併し、未だ余の理想的射擊距離でないので固く之を制し更に接近し約十間の近距離に進んだ。又も一小樹に隱れて敵狀を窺ふと丁度斜に右側面を余の方に向けて危害の身に迫るのを知らずに一心に食を漁つて居る、その巨大な耳、その愛らしい眼、その美事な牙は歷然として雜草の上に露出して居る、時は好機！余は靜かに彼の米噛を狙つた、やがて轟然たる銃聲が林間にひゞく時巨體は地響打つて揑つと倒れたのである、續いて後方よりも彈雨を浴びせた、象は苦しげに跪いて再び立ち直らうと

牛野老の牡　六四

企てたが筋肉馳緩して復た起つことが出來ない、余は更に接近して止めの一發を放つたが早や巨體の何處にも微動すら認むる事が出來なかつたのである。身長八尺五寸前肢の蹠裏徑一尺五寸、根元の太き牙は長さ三尺八寸、牡象であつて齡は四十を越すと覺える。

幸にも巨象を斃したる我等は復々森林中を數時間彷徨して疲勞し切つて夜遲くコタテンギの町に着き土人二名はロコ村に行つた。翌朝余等は一臺の牛車を雇つて速見、マワイ兩園の事務員數名と共に印度苦力四五名を從へて出發した、途中ロコ村々長外土人等と會し、此處に牛車を捨てともに密林に分け入り辛じて象屍に到着した、先づ牙、四肢、次で生肉の多量を切り取り、一先コタテンギ町に戻り翌日之を新架坡に送附した、當日出帆の筈の日本郵船で生肉を日本内地に送らうとしたのに惜哉船は午前に去つて既に影だになかつたのである。余は前肢の一と牙とを今も紀念として保存して居る。

（動園遊の獸野）ンバヨ　十四

第六　野牛狩

一　馬來の野牛

茲に野牛といふのは馬來地方ではセラダンと云ふ牛族の一種で、この野牛が牛族中であり乍ら虎や豹や象や犀とも比肩すべき猛獸であるとは我邦内地人に知るものは尠なからう、余も南洋に渡來する迄は見た事がないのみか聞いたことさへなかつたのである、動物園で獸類に關する智識を得た吾々が象を柔順の動物と思ふ如く牛をヨリ一層柔順な動物と思つて居た、處が何ぞ知らん馬來半島にはかくも猛惡なる野牛が棲息して居ようとは。　印度阿弗利加にバッフアロー、亞米利加には、バイゾンと云ふ野牛がある、裸體の黑人種が駿馬に跨つて長槍を揮ひつゝ原野に野牛を狩るの繪畫は身親しく南洋に猛獸を獵るに至りて著しく余の注目する處となつた、彼等は一望千里の原野に群居するに引き變へこれは馬來半島からビルマ地方の鬱蒼たる密林中に棲息する、それで之を狩

る方法も亦同樣でない、危險の度は更に甚しいが其趣味も亦一層深いのである。

野牛の大部分は暗黑色であるが四肢の膝より下は黃白色、幼牛は暗褐色で中には栗毛に近いのもある、野牛の特徵とすべき點は前額が前に凸出して其周圍には茶褐色の毛が房々と生へて居る事と普通畜牛の如く頸下に垂下する皮及び隆肉は無く、背の中部から後方が急に二三寸低くなつて居る事である、此動物の美觀は其頭部殊に一對の角である、牡の老牛のその壯觀に至つては恐らく世界の如何なる動物も及ぶ處ではなからう、角は畜牛に比べると彎曲の度が甚しい又其長さも三尺に近く根本の太さが一尺七八寸に達するのも珍くはない、馬來半島の記錄に據るとネギリスミラン州で獲つた野牛の角は長三十四吋、根本の周圍二十吋を最大とする。野牛の肩迄の高さは六呎、鼻端より臀部迄の長さ十呎である、尤も牝牛は牡牛に比して遙かに劣つて居る、頭部も餘程貧弱で角の長さこそ相當のものもあるが其太さは著しく細い、故に狩獵家は象狩と同じく先づ老牡牛を撰ぶ。

野牛の狩獵法は象と同じく足跡を追躡するのである。野牛は極めて健脚な

爲めに四肢の發達が畜牛に比すると著しく頑丈であるが蹄は案外小さく且つ尖つて居る又後肢の蹄が前肢のよりも小さいので、往々足跡を判斷する時に一頭を二頭と誤斷する事がある、老年になると蹄の後部が磨滅し圓形になつて居る者もあるが、この樣なのを發見した時狩獵家の喜びは非常である、然し余は不幸にして未だ斯の圓形な種類には出會さなかつた。野牛は群集を好むものであるといふが密林繁き馬來半島では余の經驗によると普通の牛群は四五頭で多くも十數頭を出でない、一英人は三十頭から成る牛群が原野を徘徊するのを目擊したと云ふが恐らく稀有の事實であらう、野牛にも象と同じく單獨行動を執るものがある、その多くは牡且つ老年である、然し單獨牛は牛群に會すると直ちに群中に投ずるが時に據つては二日も三日も單獨行動を繼續する事がある、余の狩つた野牛は終日單獨行動を執つたものは僅かに一頭丈けで他は何時も途中から牛群に合併した、牛群となると足跡が錯綜して其追跡は非常に困難である、元來野牛は非常に臆病な動物なので牛群の休息する時は必ず一二頭監視の役目を勤めて居る、其爲めに之に接近す

四八　露營地より出發

るのは頗る困難を感ずる。

馬來に於ける猛獸中虎、豹、象、熊等は隨分人家にも近寄るが野牛、犀、獏となると決して人家附近には出沒しない、常に深山の沼澤地附近に隱れて居る、稻の實る頃時には人里近くに來る事もあるが犀は極めて稀である、余の農園附近のテモン川畔に大きな濕地があつて、或土人が同地で野牛の足跡を見たと言つた、そこで余は土人仲間に若し余を野牛の足跡に導く者があるならば相當の賞を與へようと告げたが今尚何等の報告を齎して來ない。

ジョホール河畔にも數十年以前迄は

相當に棲息して居たが人煙の增加するのと共に次第に山奥へ逃げ去つた樣である、或日ブラカン河畔のS護謨園附近に足跡があると云ふ急報を得て、出て行つて見ると野牛に似た足跡はあるが早や二、三週間も經過した古いものでよく判らなかつた。ジョホール國中今尚多數に棲息して居るのは、どうしてもムーア河畔及エンダウ地方である。

野牛の常食は草と木の葉である若し原野が燒かれた跡に若葉が水々しく生え出る時、彼等は何處からともなく動物的天性に依つて集つて來て嗜食する、然し白晝にはこの樣な地物のない處には決して現はれて來ない、午前の十時頃から午後二時頃迄は深山の乾燥地に睡眠を貪り、日沒を待つて山野を徘徊して食を漁り天明近くなると又急いで密林深く入り込むのである。狩獵家の最も乘ずべき時機は卽ち其睡眠中である、又野牛は非常に水浴を好むものである、時には泥水中に仰向になつて背を泥に擦りつけて遊んで居る事がある、水浴場は大低は一定して居る、鬱蒼たる密林中の小流に沿つた水溜で土人は之をコバンと云つて居る、コバンは野牛計りでなく犀や獏も好むのであるが、余が今迄に出會

つたものは大概三四百坪の廣さで、數十の巨獸が踏み荒し揑ね返した有樣は恰も多數の家畜が狹い牧場を蹂躙したのと同一である、しかも泥濘膝を沒するに至つて殊に甚しい。余はコバンを見る每に幾多の見事な野獸が此狹い地域に密集して活動する壯觀を想像せずには居られない、從て野牛狩にはコバンの所在を探知するのが必要であるから是に使用するトラッカーは自からコバンの多數を熟知して居るものでなければならぬ。

二　狩獵法

數十年前迄は土人の野牛捕獲法は主として罠を用ひた、卽ち頑丈の籐蔓で造つた罠を野牛が河川を渡涉する地點に設くるのである、野牛は我國の猪鹿等と異なり通路は定つて居ないが、河川の渡涉點丈は畧ぼ一定して居る、一體に力量が極めて强いので餘程頑丈なる籐蔓を用ひ、また之に陷つたる場合は急速に處置をしなければ逃走する虞がある。往時は土人は首や角を尊重せずに主に食料を目的としたが、歐洲人の入込んで來るのに伴れ牛角の高價なのに勵まされて、我も〳〵と狩立てる樣になつた、尤も數十年前までは夥しく棲息して居たので火器を用ひないでも罠で隨分捕獲せられたが、今や亂獲の結果火器を以てするのでなかつたらば到底土人の手には入らない樣になつた。

三　危險なる野牛

野牛も猛獸である、一たび怒らんか、象に劣らぬ猛惡の性を發揮する、しかも象は頸が短いから急に方向轉換の出來ない隙に乘じて射擊が出來るが、野牛は象よりも遙かに働作敏活で從つて甚だ危險である、土人の談に據ると怒つた野牛は一躍能く四間を飛ぶとのことである、余は嘗て虎と野牛とが格鬪した跡を見たが、流石の猛虎も大野牛に對しては爪牙の威力が充分に出ないと見える。古來狩獵家で野牛の爲に生命を失つた者は尠くない、現に英人狩獵家で馬來地方に錚々の名のあつたサヤー大尉は旣に野牛數十頭を屠り、其熟練は自他共に許す處であつたが、最近バハン州で手負の野牛の爲めに脆くも殺害されたのである、當時大尉と同行した某土人の談を聞くと、大尉は野牛の角に引掛けらるゝと

約三十尺の高さに振り上げられ、其落下して來る處を更に角で突刺されて遂に悲愴の最期を遂げたのであると、尙最近印度でも一人の士官が野牛の角に殺されたと云ふ事を聞く、それ故土人の多くは野牛を象よりも怖るべき猛獸と稱して居る、それで余がムーア地方へ野牛狩に行かうとすると、知己の土人も白人も親切な忠告を與へて呉れた、余は親切な人々の忠告を斥けて迄も好んで危險を冒すのではないが、從來野牛狩は殆んど白人が獨占視する處なのを遺憾とし、余は射撃に於ても勇氣に於ても決して白人に劣るものでないと云ふ確信の下に敢て出獵を斷行したのである。

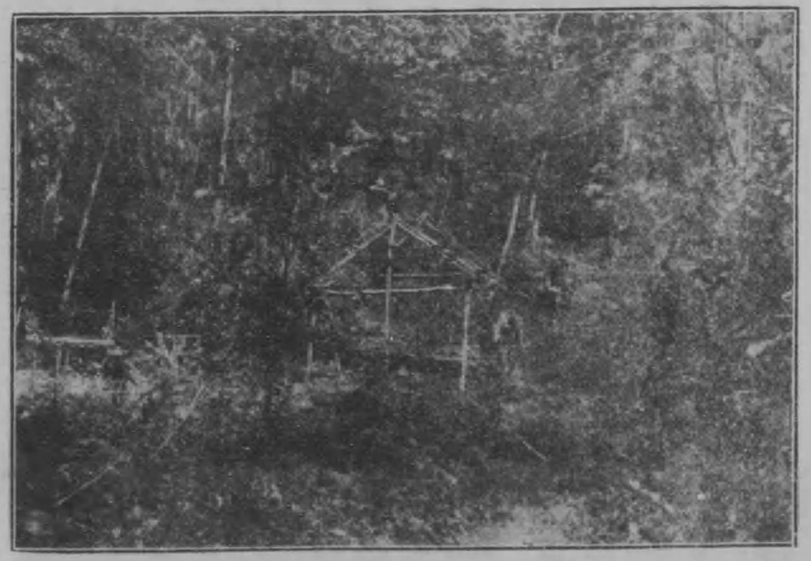
四　再度のムーア遠征

野牛の棲息地附近には野象も亦屢〻巡遊するものであるから象狩と云ひ野牛狩と云ひ特に日時を區劃して狩獵する必要はなく、孰か一方の足跡を發見した時其追跡を開始すればよいのである、余も象狩の途上に野牛を追つたことがあり、又野牛狩の途に象を狩つたこともある、茲に象と野牛との狩獵を區別するのは唯記述上の都合と云ふ迄である。

五　殘忍なる支那强盜團

余が再度のムーア遠征は大正四年十一月の初旬であつた。新架坡から海路に據てバンダーマハラニで小蒸汽船に乘替へてムーア河を遡ると乘合客中に警察官の一隊がある、ムーア警察署長インチタイプとブキケボン警察署長インチレーマンの二氏が武裝警官を二十名も引率して居る、余は二署長とは面識があるので、第一回遠征當時の舊情を謝すると非常に喜び特に彼等より午餐の饗應を受けたのであつたが、午餐といへば甚だ結構のやうであるが實は例の黑い手を剝き出してムシャ〳〵と手掴みでやる連中と食事を共にするのは聊か閉口であつた、卓上の談に依れば近頃ムーア河の上流に山賊猖獗屢々良民を殺害する、既に其百三十名を逮捕したもの〻尙終熄しないので斯くは隊を整へて討伐に向ふのであると隊員は皆新式の銃器を携帶し其中には二三名の支那人探偵も混つて居つた午後三時頃警察隊は被害の最も多いブキスランパンに下船

した、船は午後六時最終點たるブキケボンに着く、折柄の豪雨に辟易してブキケボン警察署に駈込み巡査部長に頼んで一室を借りる、フト土間を見れば一名の支那人が氣息奄々として頻死の境に彷徨して居る、それもその筈彼の双腕は剝ぎ取られ、兩足には重傷を負つて居るのである、部長の談に據ると、今朝ブキケボンより程遠からぬドリヤン、チヤンローで山賊に襲撃せられた際抵抗した爲め斯くは無殘な重傷を受けたのであると、山賊はいふまでもなく支那人である由來支那人は能く働くと同時に能く惡事をも働く、殊に其惡事の殘忍なる事殆んど他に類例を見ない、此程余の農園附近の支那人部落も數十名の强盜團に襲撃せられて多數の被害者を出した事があつた、馬來の如き未開地に於ては生命財産の防禦亦大に考慮を要する。



四九　ジョホール國王野牛、狩屋の跡

六　阿富汗斯坦の巡査＝警察署に盜人

翌朝忠僕マモに多數の土産物を持たして、トラツカー、マサーを迎へに遣つた、余は其留守中一巡査と面白き會話を試みた、巡査は馬來人に非ずして西の方遙かに遠き阿富汗斯坦人である、嘗ては印度軍隊に屬した事もある壯年者で目下馬來の國に奉職しながらも尙も自國を賞揚してジョホール國を罵つて居る、孰れかは亡國の民ならざる、阿富汗斯坦人より罵倒を蒙るジョホール國も、ジョホール國を罵る阿富汗斯坦人の國も共に國旗の色は褒せ國家の屋臺骨は傾いて居るのではないか、萬國地圖の色彩を知らずに罵り合て居る彼等こそ實に猿の尻笑いといふべきである、彼は曰ふ、自國の王樣はジョホール國王よりも容貌風采共に秀でゝ居ると、その自慢振りは小供のごとく罪がない、月給を問へば曰く

十二弗、妻ありやを問へば曰く無し、年齢を問へば曰く三十、三十にして何故に家を成さゞるやと問ふと曰く薄給で妻帶に堪へない、日本で使用して下さるなれば何時でも走つて行くと、斯くの如き巡査に生命財産を保護せらるゝ人民こそ迷惑の極である。

午後阿富汗斯坦巡査を東道役として對岸の濕地へ鳴獵に行き數羽を獲て歸る、鳴は我邦のに比して形稍大きくしかも味に於て異なる所がない、午後四時頃歸つて見るとマモはマサーを伴つて來て居る、余は好漢を愛するの餘り彼に溫き握手を與へたがマサーは最も不愛想の顏より幽かに笑を漏したに過ぎない、彼は斯くの如く不愛嬌である、併し彼は朴直で、しかも胸中には燃ゆるが如き熱誠を藏して居る、マサーはカンポンラックに赴いて明朝は數名の人夫を伴つて來る事を約して去つた、黃昏近くムーアからの汽船は前日余と同船した警察隊を送つて來た山賊の一群を引立てゝ……。

翌朝余の起床した時は昨夜の警察隊の一行は既に拂曉出帆の汽船で何處へか去り、例の阿富汗斯坦巡査のみ歩哨に立つて居た、同日は金曜日なので馬來の

禮拜日、余は水浴後參觀に出掛けようと服を改めてイザ靴を穿たうとするが靴が見當らない、昨夜たしかに置いた筈の場所に靴がない、如何に搜しても見當らない巡査部長に面談して搜索せしめたが依然として發見し得ぬ、僅かに一足の靴！代價に換算すれば幾何のものではないが獵用の靴として特に撰んだ護謨底靴なので狩獵の途上にある余の身に取つては極めて必要品である阿富汗斯坦巡査は余に耳語して曰く昨夜の警官中の何者かに盜まれたのでせうと、余もマモも同じ感を抱いて居つた、あゝ警察署でしかも巡査に窃取されるとはお釋迦さんでも御存じあるまい、巡査が盜人か、世にこの位の奇現象が他に又とあるであらうか。

七　野牛の搜索

其日の正午、マサーは前日の約の如く八名の人夫を連れて來た、舊知の村長も來た、軈て出動準備を調へて草深き野路を急ぎッイ村迄來た時、圖らずも先年此地方の狩獵に余を嚮導した土人マナムの婚禮に遭逢した、今しも多數の男女が

集つて鐘や太鼓を打鳴らしつゝ舞踏の眞最中である、村長は余を見て非常に喜び手を取つて内に招じ手製の菓子や紅茶を饗しながら余の爲に特に馬來獨特の戰舞踏なるものを催して呉れた、三四名の若者が木刀を揮つて舞踏する樣は恰も我劍舞に似て居るが餘りに活潑のものではない、今や國を賊せられ悠々として舞樂に興ずる亡國の民も昔ては斯の如き舞踏に尙武を誇つた時代があつたのであらう。余はミルクの若干を贈つて厚意を謝し、再び行を起して濕地中の難路を辿り午後五時ラック村に著き、建築中の掘立小屋を利用して天幕を張り假の據城と定めたのである、天幕の四圍は密々たる森林で蚊やサンドフライの夢結び難きを強いて余は寢床に就いた。

‖我内地の蜻に似て其形更に小さく而も蚊より刺戟多し‖が非常に多く、露營

拂曉天幕を出づれば冷やかなる曉風颯々として面を拂ひ、天高く氣澄みて恰も初秋の樣である、萬綠露を含んで生色滴らんとし、四邊寂として聲なく時に玉露の木の葉を滑りて落つる音が幽に寂寞を破つて居る、熱帶森林の曉も亦一入の情趣がある、亡國の山河に猛獸を狩る蓋し遠征の情切々たるものがある、暫く

してこなたに猿猴の叫びを聞くよと思へば、かなたに鳥の囀づるあり、やがて紅焔東に昇ると見る間に走るが如くに樹々の梢を照して來る。

土人の情報に據ると昨夜この附近に二頭の象が出現して痛く耕作物を荒したといふ、足跡を見るのに牝象と兒象らしい、それで追跡は斷念して、七時マサーを嚮導として野牛を索めんと進む、密林中の徑路を辿ること一時間、ツイ河を渡渉しその右岸の膝を沒する濕地を進むこと一時間半、漸く小丘の麓に達し此處に初めて野牛數頭の足跡を發見はしたが總て兒牛のみであつたので、これを見捨て一行は更に一哩を進んで漸く巨大なる牡野牛の足跡に遭逢した、而も汗は極めて新らしくまだ五六時間は經過しないと判斷した、そこで直に追跡に移り例に依りて例の如く有棘植物の密生する密林や羊齒の繁茂する叢林を進んだ、野牛は象と同じくどんな場所でも構ず踏破するが象よりも體軀が小いだけ通路の跡が小さい、從て吾々の行進に不便が多いのである、追跡二哩やつと竹や雜草の繁茂して居る小山に出でた、時に正午、恰度野牛の睡眠時間であつて小山が彼等の寢所に適して居る、敵は必定此中に在りと判斷したので警戒しつゝ進ん

だが一向それらしい者が見付からぬ、處が足跡は山腹の急斜面に通じて居る、人間には到底通じ難き急斜面を平氣で踏破して居るのには尠なからず驚いた、高地を登り詰めると竹屬の繁茂は一層の密度を加へて居る、マサーは余等を稍、後方に留め置き忍足で獨り竹藪の内を窺つた併し草木の爲に閉塞された空隙に彼が樹根を枕に臥した形跡が歴然として存してやはり發見する事は出來なかつたが最近の時間迄野牛の寢所であつた事は確認し得た、扨は四方全く

五〇　樹上の寢所

居るからである、思ふに吾々の足音を覺知して逃走したるものであらう、それにしても野牛は小心翼々たる動物であるから附近の叢林に潜伏して居るかも知れないと思ひ、更に小山を越え森林を潜り沼澤を渡り河川を過ぎ嚴密なる搜索を試みたが、依然として敵に會する事が出來ない。元來野牛が寢所を求めようとする時には進路は大體一直線でなく、曲線を描くのみならず時には圓形を描く事もある、然るに今日の足跡は飽迄直線的に進んで居る、これを以てすると寢所を求むるのでなく必ず遠く去つたのであらうと判斷した、時も已に午後の三時を過ぎて居る、一先づ追跡を中止して引揚げる事にした歸途楓の如き獏の新らしき足跡を發見した。

八　野牛と虎との格闘

翌日も野牛の追跡には失敗したが一の興味深き活劇の跡を發見した、扨は虎と野牛との格闘である、唯ある密林に於て猛獸の足跡が廣汎なる地域に亙つて入り亂れて居る、マサーは散亂せる、足跡を一々綿密に點檢して＝旦那面白いも

のがあります‖といふ、余も眼を張つて見るのに足跡の主は疑もなく虎と野牛である、比較的軟い地面であつた爲めに無數の足跡は恰も判子を押したごとく一々明瞭に印刻されて居る、虎の足跡が際立つて爪立つて居るから、虎と野牛が入り亂れて格闘した事は歴々として頷かれる、所在の樹根や草葉には血痕が點々し、轉びたる跡、地面を掻きたる跡、隋圓形を描ける廣き地域に亙つて激烈に演せられた格闘の後、尙格闘しつゝ彼方に進行して居る、余は虎牛孰れか一方の敗となり其殘骸があるだらうと思ひ格闘の跡を追ふて進んだが、六七町にして兩雄は右と左に別れて居た、想ふに虎が食を漁つて徘徊して居る中野牛を發見して襲撃したらしい、處が野牛が巨大の牡であつた爲に猛烈な反抗を試み此處に一場の格闘を開始したのであらう、斯くて虎は遁れんとする野牛を逃さじと組打ちながら六七町行つたが勝負が決しないので到底征服し難い事を悟つて虎から格闘を中止したものであらう。虎が象兒を襲撃し又は犀と獏の爭闘の如きも稀有ではない。

英人レスリー、ジー、ジャンノン氏は印度の竹林中で虎と虎の激烈な格闘を目

撃せしといふ、同氏は明月の夜樹上で虎の待撃を試むべく小牛を餌として樹下に繋いで置いた。夜半果して一頭の牡虎が忍んで來て小牛の背後に飛びついた、爪牙を以て其頭部を打ち壞いた後暫時其周圍に飛躍して居たが軈て靜まつたので機こそ好けれ！と狙撃しようとすると、突然他の一頭の牝虎が現はれ直ちに小牛の死屍を掠めようとした。此處に端なくも二虎の衝突を惹起した、牡虎は一聲高く吼えると見る間に猛然攻撃を開始すると、牝虎も直ちに應戰して搏つ響、引掻く音、唸りの聲、深夜の寂寞を破つて聞ゑる物凄さ、樹上に在つて眺めつゝも餘りの活劇に己を忘れて墜落しようとした事さへあつた、十分、二十分、格闘の勝敗容易に決せず、淋漓たる血痕は月光に照されて地上に印して居る、兎や角する中、牡虎の頭が牡虎の腹下に隱れたと見る間に牡虎は一聲高く唸を發した、牝虎の爲に脾腹を嚙まれたのであろう、一時共に引き離れたが牡虎は勇を皷して抵抗し再び格闘は開始された、然し間もなく咽喉に大裂傷を受けて斃れた、牝虎も數ヶ所の重傷に堪へず其場に昏倒したから時こそよしと、樹上より狙撃して止めを刺した、氏は後日人に語つて曰く、獸王たる虎と虎の眞劍の格闘は實に

凄愴の極である其時は何等の興味をも感じなかつたと。

九　野牛を追躡

偖余等は虎と格闘して遁れた野牛を追撃しようかと思つたが、爭闘後には遠く去るのが常であるから到底無效であらうと考へて中止した、それで余は更に進んでコバンより一哩を隔りたる古き土人の籐切場の跡に幕營地を定め、苦力には幕營準備をさして置き、余はマサー外二名を伴れて尙も野牛を搜索してコバンに到着した、此處は密林中の小流に沿ふ泥濘地で前夜も十四五頭の野牛が來て遊んだらしく二反歩程は甚しく揑ね返され、二三頭若くは四五頭宛諸方面に去つた跡がある、我等は一々仔細に點檢したが皆群獸で巨大にして追躡の價値があるのは一つもない、稍失望して尙も其附近を搜索すると、今度は計らずも單獨なる牡野牛の足跡を發見した、余は喜びの餘り直に追擊に着手したが此跡はコバンには到らずその側方僅に三四十間を通過して濕地林に通じて居る、我等は前日の如く非常な困難苦闘を嘗め、膝若くは股に達する泥濘中を山蛭に苦

められつゝも追躡する事二時間半程で漸く一つの小川に達した、水は淺いがこゝは泥濘殊に甚しく殆んど人の胸に達する、已むなく樹幹を倒して橋を急造し辛くも之を渡過したが、次で小山の斜面に沿ふて進むこと二時間餘、此足跡は殘念にも四五頭の群獸と合して居る、然し此邊から足跡は曲線を畫き近く停止を意味するので今更追躡を中止する譯にもならず續て前進し、更に小山を越え山腹を迂曲する頃敵は愈々近きを知つた、日頃の憾み今日こそと注意を倍加して進んだが、其處は如例密林繁茂十數間前方を透視し難い、蔓や籐こそ纏絡しては居ないが小枝が夥しく落下して居るので歩むごとにガサ〳〵と音がする、八方に苦心して我等は忍足に地を這ひながら進んだが尙且彼の臆病なる哨兵を欺くことが出來なかつたと見え、忽ち二十間程前方の一段繁茂して居る密叢の中からドヾ〳〵と地響が起ると思ふと樹枝を突破して大地を踏み挫く音、殘念！マサーは獸姿を見たと云ふが、余は何物も認め得なかつた、時に午後五時野牛がこの樣な時刻に横臥して居るのは珍らしいことである、余は齒噛みをなしつゝ天幕に戻つた、此夜は未だ宵の頃から幕地近くに猛虎の唸聲を聞き一入の悽愴

を感じ一同戰々競々として居たが、余は晝間の疲勞の爲め忽ち熟睡した。翌朝聞けば虎は終夜間近く咆哮を續け土人共は徹宵して火を燃し之を威嚇して居たとの事であつた。

一〇　山男に會ふ

翌日も先づコバンに向つた、途中獏二頭の足跡を發見したるのみで、目的地に行つて見たが野牛の跡はない、他に轉じて搜索中夜半に印せられたる野牛二頭の足跡を發見し、之を追ふべく相變らず困難なる密林や雜草林を進行中、午後森林の彼方より半裸體の土人五六名の來るのに會つた、最初は馬來人とのみ思つて居たが愈々接近して見れば、普通の馬來人とは風貌骨格共に非常の相異がある、その獰猛な顏は余をして山男！である事を直覺せしめた、然り果して山男であつた、土語ではオラン、ウタンと稱し古來深山にのみ住居し世界と隔絶し、猛獸毒蛇の外に生存競爭者を有しない自然的の人間である、卽ちワイルド、サカイ族で昔は喰人種と看做されて居た蠻人である、見る處、彼等の半數は小供で總て籐

の蔓を肩に掛けて居る、馬來の部落に至つて物品交換を以て食料品を求めるのであらう、彼等の先祖はボルネオ島の蠻族ダイヤと相並んで最も未開で最も獰猛な蠻人と稱せられて居たが、今や文明の空氣は密林の梢を漏れて瀰漫し、彼等の伴つて居る小供の身體には馬來の帽子や衣服が纏ふてある、馬來部落附近のサカイは幾分馬來語を解して居るが、馬來人はサカイに對する事恰も白人が土人に對する如く、ステンガ、ビナタン（半野獸）と稱して輕侮し決して席を同じくしない、下には下のあるものよと、余は心密かに嗤笑を禁じ得なかつた、土人の通譯にて蠻人と會話したが彼等の語る處に據ると、今より半時間前一哩許奥で五、六頭から成る象群の通過するのを見たと、余等は意外の吉報を喜び直ちに蠻人の指す方向に急行した。

急行一哩半稍展開せる草原に出た、昔の開墾地の跡で今は丈高き雜草と小樹の密生せるブルーカー林、後方は斜面を以て小山に連接してゐる、一土人に傍の一樹に登りて四方を展望せしめると、忽ちガジヤ〳〵（象）と叫ぶ、余も樹に攀て指示する方を望むと如何にも象だ！而も六頭より成る象群である、遙か彼方の小

山の上を雜草中に半身を沒しながら一列縱隊となつて今や森林に進入せんとする處である、鼻を打振るあり、耳を動かせるあり後方を振向くあり、脊丈の低きは兒象であらう、中にも一際目立つて巨大な象が居る、それに尙牙の目立ちて見えないのは牝象であらう、牝象が象兒を伴ひ餌を身なるを忘れて茫然たる事久しかつたのであつた。

一五　新らしき野牛の足跡を發見す

漁つて歸る處であらう、自然の山野に自然の象群の通過を觀る、何たる壯觀ぞ何たる偉觀ぞ、余は狩獵の

翌日も不成功に終り、翌々日は第二回の金曜日を迎ふるのであつた、顧れば遠征一週間、野に寢ね、山に臥し炎熱を冒して森林を縫ひ、泥濘を忍びて沼澤を跋渉し野牛を索めて而も未だ一頭をも獲ない、食事意に滿たず、睡眠安かならず、梳風沐雨こゝに七日間、身體疲れて綿の如く、如何に勵めども氣力は之に伴はない、先年此地に野象を索めて獲ず、今又一頭をも獲ずとあつては口惜しの限りである、余は余の薄倖とムーア河の無情を恨むのであつた、さればとて此儘止むべきでないから强ひて勇を鼓し土人三名を隨へて出動する事にした、折しも唯あるコバンに到れば、天運！野牛の足跡は歷々として殘つて居る、而も今拂曉に印されたる單獨の老野牛！コバンの片側を通過して小流で水を飲んだらしい、一同の勇氣頓に加はつたのである。

一一　遂に野牛を射止む

足跡は最初密林中の濕地を通過し更に一の小丘を越えた後珍らしくも廣き草原に出て居る、其一隅には彼が草を食つた跡が見える。此草原は昔サカイ族

が米田を耕した處で今はララン草が一面に生え茂つて居る、ラランが充分に成長した時、炎天が數日續かば一本の燐寸能く草原を燒き盡す事が出來る、更に一日も經つと柔かなラランの新芽は燃ゆるが如く生えて來る、野牛は非常に之を好み朝夕何處よりともなしに集つて來て、恰も牧牛の如く三々五々草原を逍遙する、獵者が野牛の群を成して遊ぶのを見るは卽ち此米田跡のララン草原である。

足跡は草原の片側を森林に向つて進行し、ツイ川氾濫の餘波を受けて膝を沒する水溜を通過し、籐や蔓の纏絡せる密林の傾斜面をのぼり漸く小山に達した時、不幸此日も小山の中腹で横合より來た三四頭の群に投じた形跡がある、一同力を落しつゝも兎も角小山の上に登つて見ると何となく附近に野牛の寢所があるらしいのを覺つた、從來幾度かの失策に懲み極度の靜肅を保ちつゝ徐々として進んだ、幸此邊は一帶に落葉が寸餘積載して足音を偸むのに都合が好い、次の高地に進むと項上に一際目立ちてこんもり茂つた森がある、足跡も其處に通じて居る、必ず敵の寢所あらんと一同匂ふが如くになりて徐行した、やがて余は

唯ある小高き蟻の塔に身を隱し風下を利用して靜かに林中を窺つた。居た！居た！一枝葉の間に黑色の動物が見えた、然し幾頭居るか又孰れが目差す敵か見當がつかない、なほもと蟻の塔の他の一端から偵察にかゝる時、俄然敵は大音響を立てつゝ逃走を企てた。ハッと驚いて前方を見れば一頭の野牛は二間許り群を離れた森林中に立上つて遁走せんとする處である、瞬間に余は野牛の角の立派のものでない事を認めた、しかし此危機に臨んで角の良否を問ふべき時でない、恰度横向になつて居る心臟目蒐けてこゝぞと一彈を報いたのである、轟然たる砲聲の裡、彼は高き唸を發して跳ねるが如く數歩前進したが忽然として蹲踞した、同時に余の第二彈は正しく彼の頭部に命中した、土人は直ちに駈寄つて一振の山刀を以て止めを刺した。

牡牛ではあつたが年若くして肝腎の角が立派でなかつたのは余が射擊の瞬間に思つた如くで狩獵家として喜ぶべきものではないが、彼の場合良否を撰擇するの餘裕がなかつたのを思つて諦めた、余の不滿足なのに反し土人は美味を樂しんで喜色滿面なのも憎い感じがする、直ちに頸部より切斷して下部を彼等

に與へた、今も尙余が農園蓬舍の壁間を飾るものは卽ち此牛頭である。

一二　更に巨牛を斃す

纔に一頭を獲たのでは滿足し難く翌日更に出獵したが、彼は前日の銃聲に驚いたものか足跡が絕えて無いので已むを得ず轉じてラビス川畔を漁るべく余等は一先ヲック村に歸つた、久振りにこゝで一日休養し其翌朝八時ラビスに向けて出動した。

行く〳〵搜索したが一も得る處がない午頃今日は見込がないから引揚げようなど唱へる者もあつたが、熱心なるトラッカー、マサーは斷じて承知しない、目差すコバンも程近ければ是非とも其處まで行かうと主張した、一同已むなく重き足を引き〳〵コバンの方向に向つた。午後一時目的のコバンに着く、唯見れば果然一大野牛の足跡があつた、マサーは別に誇顏もせず、一心不亂に足跡を指にて押すかと思へば糞便中に足を入れて見たり嗅いで見たり種々牛跡の新舊を判斷して居たが稍ありて彼はその甚だ新らしい事を明言した、然れども時已

に午後二時、日沒迄に追及し得られるかどうかを心細く思ひつゝ行動を起し濕地を渡り小山を登り丘腹を廻り稍險阻なる一の斜面に至つたが遂に野牛の姿だに見えない。一同は日沒近いので暫らく追擊を中止しようとし、落膽首を垂れて斜面を下り余とマサーとが先頭に立て麓の森林に近づいた時、突然約二十間の前方に叢林動くよと見る間に一頭の大野牛は出現したのであるかれは余等數名の敵を眼前に控えて逃げようともせず、豪然突立ちて睥睨して居るのであるその彎曲して靑黑色を帶びた巨大の角は正しく獸王の冠かと思はれたその巨體、その巨肢、儼然佇立せるその雄姿！恐らく世界の動物の何物にも劣らないと見えた。余は敵の不意の出現に驚きつゝも先づ銃を構へた、狙擊！餘りの咄嗟に膝萎する餘裕すらなかつた、直ちに敵の心臟！をと思つたが、不幸其右胸部は半樹幹に隱れて見えない、余は已むなく左胸部を狙擊した、轟然たる銃聲が森林の靜寂を破りて響くや敵の巨體は一先前方に倒れて膝を折つた、占めッたと思ふ間もなく敵は再び起き上つて一躍するよと見るまに森林目蒐けて遁走しようとする、其機をあやまたず余の第二彈が再び命中した、彼の巨體は殆んど

逆立せる如くになつたしかも尙彼は逃走を繼續して遂に密林中に姿を沒し去つた、嗚呼殘念！

二彈を喰つて痛手に堪へざる巨牛が死物狂ひに躍動する壯觀、余の眼底に映じて今尙彷彿たるものがある、マサーと余は淋漓たる血痕を辿つて森林中に進入したが手負の猛獸を追ふの危險を思ひ取敢へず二三十分の休憩を試みた、斯は時間の經過と共に敵が出血の爲に衰弱するであらうと思考したから

五二　野牛の足跡

である、此追擊は非常に警戒を要した、恐らく狩獵家が野牛の爲めに生命を落すのは斯くの如き場合であらう、流石のマサーも此恐しき野牛の通路は進まぬ、四五間隔つた密林中を之と併行して切り開きながら搜索した、然れども總ての策戰は無效であつた、四五町を進まぬ內、日沒は我等を一先村落に引揚るの止むなきに至らしめた、如何に獰猛の野牛なればとて二ヶ所の深手には堪へないであらうと思ひ、村民は生肉を齎らす爲めに各々脊に大籠を負ひつゝ隨行して、翌日も翌々日も死屍の搜索に從つたが、敵屍は尙發見し得なかつた其足跡から判斷すると慥に重傷で近く斃死して居るのは疑を容れない所であるが遂に二日目に大雷雨に出會して足跡の見分けが困難になつた爲め、余は萬斛の恨をムーア河畔に呑んで歸路に着いた。後ち三週間余は件の大野牛が麓の叢林中で他の獸の爲めに半身を食はれて斃れて居るのをサカイ族の爲めに發見されたとの報に接した、余はその角を望むの餘り賞を懸けて送達方を村長に依賴したるが何故か未だ何等の通知がない。

第七　犀と獏の捜索

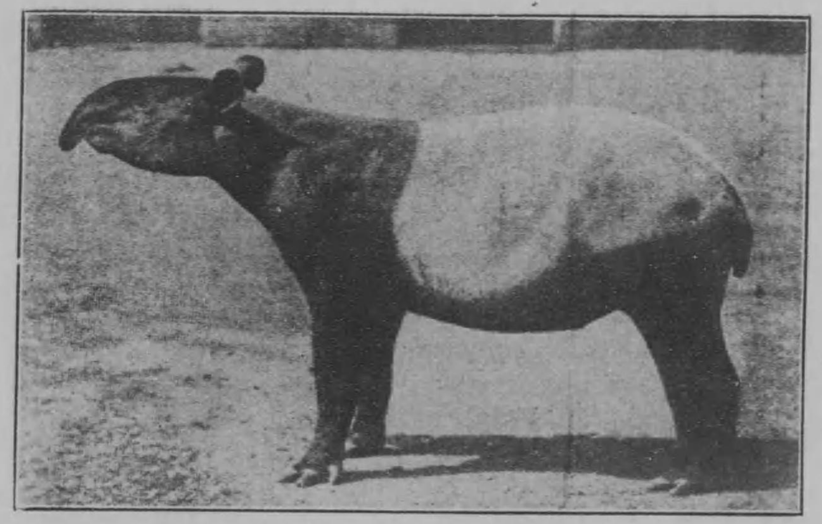
―蠻人サカイ族の部落に遊ぶ

一　馬來の犀

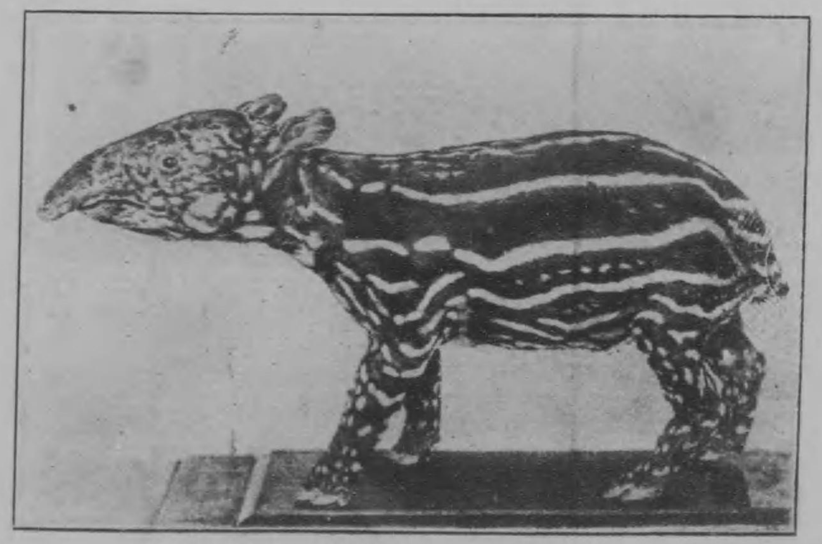
二三十年前迄は馬來半島には可なり多くの犀が棲息して居た、處が彼の角が犀角丸と稱し支那人間に靈藥視されて從つて高價なのと、搗てゝ加へて象や野牛に比すると狩獵者には危險の度が尠ないので、遂に土人の亂獲する處となつて、今や狩獵家が之を索めても容易に發見し得ない樣になつたのである。

馬來の犀には二種類ある、一はジヤバン犀と謂ひ、一はスマトラン犀と稱へて居る。前者は印度犀と畧同形で緬甸、馬來、スマトラ、爪哇等に棲息し體軀巨大、肩迄の高さ五尺乃至六尺、鼻端より尾根迄の長さは十尺に近いものがある、全身暗灰色で硬質の皮を纏ひ、褶襞が幾重にも深く刻まれ、鼻の上には一本の角がある、尤も牝の内には無角なものもないではない、この種の犀の角の長さは阿弗利加

(犀ソラトマス)犀の來馬　三五



五四　馬來の獏



五五　馬來獏の幼時

産の犀には遠く及ばないが五寸乃至一尺はある。後者はアッサム、緬甸、スマトラ、ボルネオ、馬來等に棲息して、爪哇には姿を見せない、前者に比すると形小さく、肩迄の高さ四尺を越ゆるのは稀である、褶襞も肩の後方にあるのみで、角は二個あるが何れも短く、殊に兩眼の間にあるのは僅に二三寸に過ぎない此種は比較的多毛で特に耳朶に毛が多いので一名毛耳犀の稱がある。

犀は主として陰鬱な密林を好み、よく泥濘の附近を徘徊する、時には又沼澤にも隱れるが象や野牛とは違つて晝間に活動し夜間は假眠する、是が此獸の特性である、又高い山には登らず多くはコバン附近の低地を漁つて木の新芽や果實を常食として居る、元來極めて痴鈍な動物であるが一たび之を激昂せしめると、忽ち金剛力を出して大亂暴を始める、彼の武器は主として角である、然し實際に襲撃を受けた土人の話に據ると彼は突進に角を揮はずして大口を開いて來たとの事である。犀は如何に突進して來ても象や猪と同じく頭部が短いので急に方向を轉換することが困難である、それでS字形に之を避けると能く危害を免る事が出來る、故に狩獵家に取つては割合に危險の尠ない猛獸である、

斯くして遂に亂獲する處とはなつた。

二　馬來の獏

古來夢を喰ふと奇しき註釋を附せられて居る獏は馬來半島にも棲息して居る、元來獏の種類は產地によりて異なり、亞米利加產のものには短き鬣があるが馬來產には無い、各種類中、馬來の獏は最も大形で中には驢馬以上の者もある、象に似た短い鼻を有し自在に活用して或は樹幹を裂き或は樹根を覆し或は食物を搔き集むる等の作用をする、色は前半身と四肢とは暗褐色であるが後半部卽ち脊と臀部と兩腹は灰白色である、又幼獏は全身に明瞭な白色の條紋と斑點があるが成長するに從つて消失するのは奇妙である。

犀と同じく群集生活を好ます、單獨又は雌雄伴れで徘徊する、常に密林中の濕地を好み晝間寢ね夜間出動する事は他の猛獸と同樣である。草木の葉や實を常食とし好んで水浴をする、水泳は象のごとく甚だ巧みであるが普通は河底を歩むのである。獏には何等の防備がない、從てかれは細心で頗る注意深い、又彼が

逃走する場合は密林中を飛鳥の如くに疾走し窮すると嚙み付きもする、そしてその切嚙力は非常に强烈である、肉は甚だ美味で皮は貴重と稱せられて居る、慽らくは象の如き牙と犀の如き角を有せざる爲めに狩獵家に疎んぜられるのは防禦物缺如に對する自然の配合であらう、幼より飼養すれば人にも馴るゝものである。

三　レンガ河畔の索敵

余が犀と獏を狩らんとしたのは第二次ムーア遠征後半部の日程であつた、ラピス川にて深手を與へた野牛を三日間追跡して遂に手中に獲ざりし最後の日、豫定の如く野牛狩をラピス河畔に中止して、犀と獏とを搜索すべくレンガ河畔に轉戰した、同地方は巨獸の數こそ尠なけれ老獸、殊に犀や獏が棲息して居ることを豫知したのである、此行余は如何に困難なる行動をも踏破する覺悟を以て殊に獵裝を輕快にし、人員も減じてマサーの外に屈强の土人二名を撰び、器具は携帶天幕四枚と寢具若干、外に食料品一週間分と余が考案に係る折疊式籐製の

釣籠を携帶するのみであつた。

ブキケボンより汽船にてムーア河を下航すること三時間程にしてレンガ村に着き早々好獵家の稱ある村長ラウを訪ふた、ラウは七十の老齡であるが矍鑠として壯者を凌ぐの慨がある、今こそ耳も目も不自由であるが昔は一角の狩獵家として聞え二十頭の野牛十二三頭の象と犀とを打ち取つた豪者で、火器の進歩しない時代に於てこれ丈けの獲物は確に好成績と謂はざるを得ない、

五六　サカイ族の毒槍と吹矢

彼は余の企劃を聞いて有益なる注意を與へて呉れた上、地理に精通せる土人ヨウマとて一人の頑丈な男を周旋して呉れた。

茲に一行五人、午前十時半將に出發せんとするや老村長の注意によつて支那人のガンビヤ畑に通ふ牛車に便乘することゝなつた、余は獵場に於ける精力を保存すべく徒歩を避けるのが利益であると思つたが、實際は凹凸の路面と頑丈の車輪とが極めて調和惡しく、烈しき震動の爲めに殆んど拋り出さるゝの危險がある、加之に燬くが如き日光は容赦なくテカ〳〵照り付ける、その暑いこと、その苦しいこと精力の節約處か濫費である、足場こそ惡けれ森林渡渉の涼しさをどれ程戀しく思つた事であらう、漸やくにして牛車の終點たるメンチエンウルに着くと俄然土砂降りの驟雨となつた、這々の體で唯ある一軒の朽ち果た小屋に駈け込んだが、宛で火責と水責の兩苦を嘗めるのであつた。

其日は尙數哩行進の豫定であつたが雨の爲めに携行品が濡れたのと、前日來の睡眠不足で睡魔頻りに襲つて到底歩行に堪へないのとで、一行は此處に露營する事に決し、早速四枚の天幕を張つた、マサーとヨウマの二人は日沒迄に時間

かあるとて野獸の足跡を索めに出で、人夫のドラとアゴンの二人は明日からの運搬用に籠を作るべく山に木皮を求めに行つた、余は夕飯の仕度を爲すため一二町下手の小川に米を磨ぎに行く、日の西に傾く頃、マサーは例に依り香を焚き森の神樣に祚禱を捧げ、一同寢に就けば間近く大鹿の鳴く聲が荐りに聞えた。

四　土人の待遇

余は此行に於て滲々土人操縦策の妙味を會得した、斗は露營第一日の夕、余が自ら米を磨ぎ飯を炊き菜を煮て居ると人夫アゴンは余を愛らしく思つたのか炊事の一切を注視して居た處が早くも彼はその方法を會得したと見え翌朝は余に代つて食事を調へて呉れた、其調味も嗜好に適する、其後も忠實なる從僕として少しも骨を惜まず何呉れとなく世話を燒いて呉れた、先頭には熱心なマサーがある後方には、忠實なアゴンがある、恰も勇敢なる戰鬪部隊と後方勤務を有する如く余は甚だ心强く感じた、白人が土人を奴隷視し常に鐵鞭を揮つて、叱咤するのは非の極である然し餘りに親しみて狎れしむるのも亦不可である、彼等

を操縦する唯一の道は恩威併び行はれて彼等を畏敬せしむるのである、天幕内にも俱に寢るべく、食卓にも共に就くべきである、苦樂を一にする森林生活に於ては上下を隔つべきでない、土人とても人の子である、一面恩愛に感じてこそ眞に其威を畏敬するのである、若し一たび彼等の言を聽けば如何に白人に對する憎惡の熾烈なるかを覺らう。余は從來より憂慮に堪へざる一事がある、斗は馬來半島のみならず、支那に於ても朝鮮に於ても新來の日本人中に兎角に土人等に對して自國の威光を笠に無意味に威張り散らし彼等を輕蔑叱咤し以て快事となす輩の尠なからぬことである、弱者を虐待する程見苦いことはない、是が爲に土人の惡感を惹起する樣な事になれば好んで自己の發展地を閉塞するのに異ならぬ、劣等人種操縦に就て吾人は識者の反省に價するもの多々あるを信ずるのである。

五　コバン(野獸の遊園地)の一夜

翌朝七時食事を終り、一同クミニャン＝祈禱＝を爲したる後出發す、最初一哩

程は小徑に沿ひ、後密林中を跋渉し、次で濕地に入り、膝迄も漬りながら困難なる行進をなし、正午頃一つのコバンに到着した此所は地域も稍廣く無數の野獸の足跡が散亂し、殊に野牛と獏の跡最も多く、犀に至りては僅に古き一つを發見したるのみで、稍物足らず思ふた、然し野牛の一個最も新らしきものありたれば二三時間追躡せしも望みなきを見て斷念した。余は此コバンには夜間野獸の多數が必ず來るだらうと豫想し、月明を幸ひ最近余の考案に係る釣籠を試驗すべく樹上に夜籠りして野獸を待擊する事に決した、それで一行は一先一哩程後戻りして山男が遺棄せる籐屑の堆積所を露營地と定め天幕を張つた、それから余は附近の溪流で水浴したが鮠に似た三四寸の小魚が群を成して遊泳して居り又錢龜に似た小龜が澤山居たので余は龜の五六匹を生捕て後ち新架坡に持歸つた。浴後二人の人夫に諸用の荷物を運ばせコバンに至り適當な巨樹を撰んで籐の梯子を掛け二間半許りの高所に例の釣籠を吊した、内には銃と毛布と懷中電燈と若干の食料とを持ち込み、籠の一部には防水布を纏へる蚊帳を張つた、薄暮土人を露營地に返し銃聲を聞くにあらざれば明朝來よと命令して余唯一

人釣籠の内に殘つたのである。

太陽は森林の彼方に落ちた、塒を急ぐ鳥も已に見えなくなつた蒼然たる暮色は露を載せて刻一刻と樹枝から樹枝を罩めて來る、茲に日は全く暮れた、欝蒼たる森林の空隙を通して漏れて來るやうであつた白色の空も今は全く見えない、月は未だ昇らぬ、蝙蝠や夜鷹の類であらう羽音强く林間を渡る、大蜥蜴はキツキッと奇聲を上げて樹幹を上下する、ホー〳〵と鳴くは野猿の叫びか、夜の森林の凄味は刻一刻に迫つて來る、开は云へ余は余の冒せし凄味を誇らんとするのでない、敢て誇らずとても深き〳〵無人の森林に樹上唯一人眠る物凄さは云はずと知れた事开は最初より余の覺悟である、机上に向つてこそ冒險の考案も浮んで來る、太陽の光りを拜する間こそ冒險實行の決心もつく、若し夫れ机上の冒險計畫をイザ實際に行ふに至りては何人か辟易しないものぞ、凄味は決して爽快なものではない‖若し樹下に猛獸の群れ來る時籠を吊してある籐蔓が切斷したならば！‖思へば竦然の種ならざるはない、‖何大丈夫！‖と思ふのは自己に對する慰安である、その慰安は極めて薄弱‖萬一にも！‖の不安は容赦なく

‖大丈夫‖の慰安を打消して了ふ‖何ッ蔓が切れて猛獸に喰はれたら百年目だ！‖の覺悟が萬事を解決して其處に一種の安心を與へて呉れるのに過ぎない、或は是れ日本男兒の本領であるかも知れない、事茲に至つては不安を感じたとて致方がない、土人は一哩も後方に居る、今更樹上を去つて平地を歩むの危險は籠内に居るに比し更に甚しい、折柄月は現はれた、あゝ長天萬里を照すの月は密林の枝葉を潜りて余の釣籠にも淋しき光りを投げて呉れる、‖ソロ〳〵獲物の出て來る頃？‖と籠蔓がギー〳〵と音のす

七五　サカイ族の婦女子

るのを氣にしつゝ俯瞰すれば明月は皎々としてコバンを照し宛ら白晝を欺くばかり、余は籠内に蹲踞り只管耳を聳てつゝ猛獸の來るのを待つ、夜は月光に送られて次第に更けてゆくのである。

十二時とも覺しき頃、俄然荒々しく雜草を踏拉ぐ音、樹木に觸るゝ響が聞えて來た、さてこそ怪敵ござんなれと、籠の緣に眼計り露はして耳を澄しつ窺へば巨獸が濕地を通過したと見え、泥濘を揑ね廻し跳ね飛す音がしきりである、象か野牛か、將た犀か獏か、恐らく四者その一を出でまい、早く近寄ればと心に念じつゝ樂みつ銃を構へて待つて居たが折惡くコバンには接近しようとはしない、樹下より二十間位の距離を彼方に過ぎ去つて行く、眼を皿大に見張つて、月影に透して凝視しても生憎月の位置がわるく姿を認むることが出來ない、余は齒痒さに堪へなかつたが遂に荒々しき足音は繁りの彼方に消えていつた、再び瞑目して待つて居ると、幾程もなく又雜草を踏拉ぐ音‖今度こそは見屆け呉れん‖と刮目して窺へば距離は先刻のそれと異ならざれど足音は遙に低く之亦姿の見ゆる迄に接近せずして通過した、餘りの忌々しさに切齒する時一團の叢雲月明を

蔽ふた、今頃敵に來られては何にもならぬ……と打案ずる突端、早くも雨の一粒又二粒が木の葉を打つよと見る間もなく大雨沛然として臻つたのである。今は猛獸の待擊ち處の騷ぎでない防水布を整へて命より二番目の貴重品たる鐵砲を勞はりつゝ猫脊になりて只管雨の怒りを恐れ、瞑目して霽を祈る程に睡魔が連りに襲つて來て籠が風に搖らるゝ心地よさ、余は何時とはなしに夢地に入つた、幾時間過ぎたか知らぬフト物音に驚きて眼覺むれば樹下に泥濘を踏拉ぐ音が手に取る如くに聞ゑる。＝占めたッ！＝起き直りて俯瞰せんとすると慽らくは月明を缺き目標物を見定める事が出來ない、この口惜しさに突と半身を現はせば彼は物音に驚いたのか、巨大なる二個の黑影が飛鳥の如く駈け去つたのである。あゝ月明なりせば！必ず射止められしものをと殘念がりつゝ再び睡魔に誘はれうつら〳〵する中天明を告ぐる山鷄の鳴く音に驚きて眠より覺むれば早や東天紅に夜は明けて居た、夜來の事を思ひ出せば宛然一夢の如く唯茫然として樹下を見守る時、マサーとアゴンは余の安否を氣遣ひつゝ、余の下に急ぐのである、先づ吊籠を降りて足跡を點檢すると最初のは五六頭の野牛で就

中一頭目立ちて巨大なる足跡があつた、次で來たのは大鹿で、拂曉近く來たのは大獏が獏兒を伴つて居るのであつた。

六　獏の追擊

余は新しき獏の足跡に望を囑しマサーに謀ると彼も同意なので朝食を終へて直ちに其追跡を開始した、最初獏は余の物音に驚いたものと見え一直線に進んで居るが數町で平常に復し濕地や山麓を歩いて高地には登つて居ない、從來幾度も象や野牛を追躡したが彼等の巨體と大蹠は草木を押し分け或は踏潰して自然の通路を爲して居るけれど獏は脊丈も短く殊に有棘植物の茂つて居る濕地を好んで通過する爲めに其追跡は非常に骨が折れた、時には地面に匍伏して、時には腹部に達する泥水を渉らねばならぬ、而も恐ろしい刺棘は被服を通して屢々身體を傷めその困難名狀し難い、又足跡とても象や野牛の樣に明瞭でない、余には全く分らぬ事すらあつたのである。

午後二時の頃漸やく濕地から脫して一の平坦な森林に出た、其處には我邦の

土堤等に生える俗にスカンポと云ふ草に似た草が繁茂して居る、獏はそれを大に喰つて居る、馬糞に似て稍小なる獏糞は此處彼處に蹲つて居る、マサーは足跡や糞便によつて愈々敵に近づいて居る事を警告し、それより一の密林に進入した程なく先頭に立てるマサーの態度は益々靜粛になる、稍あつてマサーは余を顧みて目配せした、指す方を注視すれば果然樹の間を透して巨大な灰色の二個が見える。獏！大獏！距離は約三十間、そして二個の灰色は少しも動かない、恐らく眠つて居る爲であらう、好機！余がマサーに代りて先頭に立たんとする時、あゝ殘念、天運何ぞ我に薄倖なるや、マサーが唯ある巨枝の下を潜らうとして端なくも山蜂の巣に觸れたので彼は忽ち蜂群の大襲撃を喰つた、流石のマサーも啞ッと驚く、余も驚いた、後方に續く土人も覺えず聲を發して後退する、蜂群は黑き迄に密集部隊を成して余等の顏面と云はず手甲と云はず處きらはず突撃して來る、背や腹の着物の上から迄も刺す、かくては何條堪るべき、茲に全く靜粛行進の破れたる時、前方に熟睡して銃丸の見舞を待設けて居た二頭の獏は俄然大音響を發して逃走した、此瞬間余はマサーの肩越に射撃しようとしたがそれすら遂に果し得なかつた、時に午後四時、余は直に其跡を檢すると小樹と高き草とにて四方を圍まれ乾燥した草地で、彼が自己を陰蔽するのに中々巧なのに感服したのである、此獏は驚きの餘り恐らく數哩を逃走したであらう、追撃を斷念し憾を呑んで幕營地に戻つたが返す〳〵も殘念であつた、此夜再びコバンに待打を試みんとしたるも天候の惡き爲めこれも斷念したのであつた。

七　自然の動物園

翌日はレンガ川に沿ふて犀を尋ぬべく午前七時天幕を出發し、一時間も經た頃野獸の爲に開かれた濕地の一小徑路に出た、其處には象の足跡がある、徑一尺五寸、其跡の中に大鹿の足跡がある、更に進むと新らしき虎の足跡がある、尙四五町進むと野牛の足跡もあつた、其總てが極めて僅少の時間を置て通過して居る、斯く象、鹿、虎及び野牛が狹き森林の一徑路を殆んど同時に徘徊する事を思へば宛然自然の動物園！其後數十分にして復々獏の足跡を迄發見するに至つて余は呆れるばかりの興味を覺えたのであつた。

八　サカイ蠻族の部落

自然の動物園に斯くも多種の足跡を得て一々これを檢したが追つて公算のあるのは一もないので余等は先づ之を棄てゝ深きバイヤー地に入り辛うじてレンガ河畔に出た時しも森の彼方から竹笛の音が聞えて來る、不思議に思ひつゝ音のする方に行くと偶然にも蠻族サカイの一小部落に出た、先頭に在つたレンガの土人ヨウマは既に承知して居る模樣であるが余は少しも豫期しなかつたのである、それも其筈此部落に通ずべき一の徑路さへもなく全く密林を切り開きつゝ進んだからである。

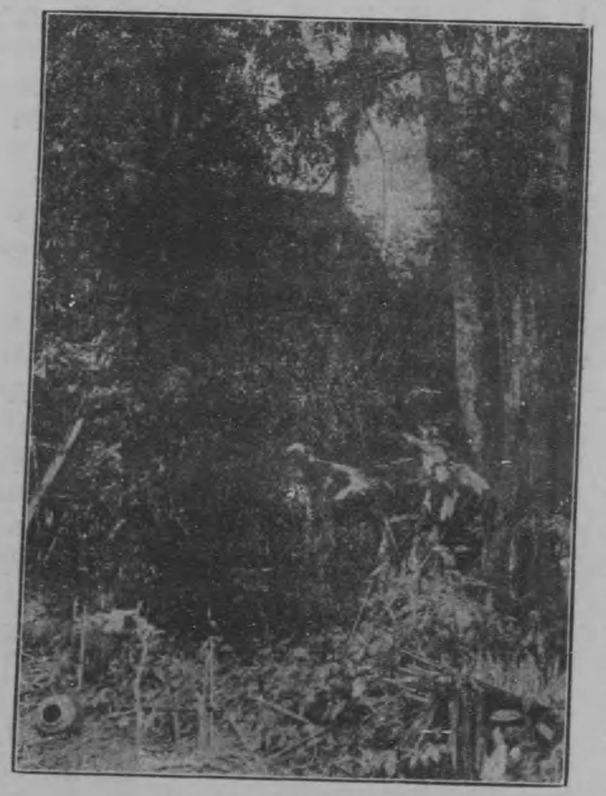
此處はレンガ川の上流、千古の密林、人跡を知らぬ濕地を以て煤煙臭き世界と隔絶せる蠻族サカイの部落、彼等の先祖は臆病なる文明人より喰人種の稱號を蒙つた程で、サカイ族は一般に慓悍で且つ野蠻である、余は彼等が人肉を好むや否やを知らない、しかし今尙太古の生活狀態から脫出して居ないのを目擊した、元來當半島の系圖を質せば馬來の山川草木否な一塊の土砂と雖も、もと馬來の

有でほない、況んやボキス人をや、然らば半島天賦の民は何ぞや、曰くサカイ族である、歷史資料が絕無に近い半島は古史を繹ぬる途はないが數百年前迄悠々として海に漁り山に獵り、汪洋たる河畔に一竿の吹矢を揮つて野獸を狩つだサカイ族はスマトラよりの馬來人とセレベスよりのブキス人とに逐はれ〳〵て今や山間邊陬の地に閉ぢ籠められたのである、徑路すら絕えてなき密林を以て遠く文明世界と隔つる狀、蓋し猛獸毒蛇は恰も彼等の哨兵なのである。

其處には四五反程の森林が不規則に切開かれてある、樹根と雜草とが點綴する廣場の一隅に二軒の小屋が風雨に晒されて居る、貧弱なる構造樹皮さへ剝ぎぬ柱と梁は籐の蔓で結びつけられ、床の高さは三尺許り、床には雜多な樹皮が敷かれてある、屋根も馬來人のそれと全く異なり種々大形な木の葉で葺かれ外壁は小枝や樹皮で縫はれて居る、その瀟洒！珍を愛し奇を好むの茶人に見せしめなば蓋し其珍奇に垂涎を禁じ得ないであらう。

正午頃なので男の大部分は籐や果物を漁りに出て行つて居る、部落には女と子供と小數の男子が居るのみらしい、彼等は小屋の中から半獸的の顏を突出し

怪異の眼を見張つて余等を眺めて居る、痩せた三疋の犬が床下からワン〳〵吠えて居る、小屋の傍には三抱もある一本の大樹が蟲々として天を摩して居り其樹上三間位の高さに掛小屋がある、二三疊敷もあらう、猛獸除に夜間、女と小供が寢るのであるとはヨウマの說明である、外緣として



八五　樹上の樓家

に近き女が裸體の小供を脊負つて籐蔓製の掛梯子を大股でズン〳〵もなきに能く子供が墜落せざる事よ、余は支那古代有巢氏の生活を坐ろに偲ぶのであつた。

折柄裸體樹上の掛

小屋へ登つて行く、余にはどうしても人間とは見えないのであつた。

部落には同勢二十八人居るが當日は十二三人のみ殘つて居た、男女共腰部にのみ布を纏つて居るが殆んど裸體に近く、鼻極めて扁平、血族結婚の弊にや不具者が多いのが目につく。彼等は水草を追ふて轉々所在に流浪する所謂遊牧の民である、決して一定地に永住しない、隨所山に狩り川に漁り、野に木の芽、草の葉を索めて食料となし、時に馬來部落に近いものは物々交換に來るといふ、又大部落になれば稍組織的で米田を耕し家畜を飼ひ時に一地に二三年も居住する事がある。

ヨウマは嘗て馬來部落に來りし一蠻人を見出し何やら話し合つて居るが、余には少しも解らぬ、馬來語とは大分の相異がある、余はヨウマの通譯で漸く其一人と話し合つた、彼等は支那人以外の外國人を見た事がない、然し日本人の名は以前から聞いて居たと云つて余に對し滿腔の敬意を表するのである、彼等をレンズに收めんとすると最初は耻しがつて出て來なかつたが漸くにして目的を達した。

部落に一時間も休憩した後更に前進しようとしたが是れから奥は流石に森林通のヨウマも通じ兼ねるとてサカイの一人に嚮導を依頼した、三十位の頑健な男、一行の中の最も重い荷物を擔はしても平氣で密林中をドシ〳〵進み行く、彼が森林の地理に精しい事は恰も野獸のそれの如く路なき處を路ある如くに進む濕地や森林や叢林の中を平地を行くが如くに歩む、實に山男の名に背かない、馬來土人等が森林の跋渉には到底蠻人に敵はないと漏して居るのも滑稽であつた。

山男は云ふ此界隈には野牛が多數棲んで居るが數日前に一頭を捕獲しようとして驚かした爲め遠く逃げ去つたと、行く〳〵幾多野獸の足跡を發見したが總て古くて追躡に價するものがない、大森林を通過し二三間の小川を幾度となく渡渉した。

九　自然の恩惠

途中巨大なる一本の油の樹があり、土語にてカユミニヤと謂ひ其多量に分泌

する油は燈火用となる、樹幹を傷つけて置けば傷口より松脂の如き油塊が滴る、此樹には多くの傷口があつて恰も鐘乳石の如く樹幹より樹根に幾條となく垂下し樹根の周圍は大なる塊を爲して居る、一見琥珀の樣である、山男は一塊を剝ぎ取りて傍に置きたるが何れ後日採取に來るのであらう、ボルネオ島にては今尙輸出品の一として居る、之を見るにつけても彼等原始的人種に對する自然恩惠の偉大なるに感せざるを得ない、氣候は彼等をして衣服を必要とせしめず、食物は山野に滿ち頑丈な籐蔓があつて住居を組立てるのに一本の釘をも必要としない、さらに油の樹があつて夜間の用を辨じて餘りがある、あゝ偉大なる哉、自然の恩惠！奇妙なる哉、自然の配合！俗界と隔絶した其處に虛禮と虛僞がなく、慾望薄き彼等には敢て生存競爭の要はない、唯生存を爭ふもの纔に猛獸と毒蛇とのみ、其處に職業難生活難は跡方さへないのである。

我等は更に進んで豫定の場所には到着したが豫期せる犀や野牛の足跡なく稍大なる二頭の象の足跡はあつたがこれも見込がないので追躡は止めにした、其内日沒に近づいたので唯ある巨樹の下に露營する事とし直ちに四枚の軍隊

式携帶天幕を張り周圍は樹枝や竹で圍ひ、下には草や樹の葉を多量に敷詰め、余は其上に寢具を延べた、深山露營には巨樹の下を撰ぶ事が最も必要である、萬一猛獸が襲來すると、其避難所は巨樹あるのみである、土人の一人は直ちに湯を沸し、飯を炊ぎ、他の土人は野菜を索めに行く、野菜と云つても籐の新芽や生姜に似た植物の花である、是等を煮て余が持參のサルデンと混合し晩餐を始めた、飯や菜を大なる木の葉に載せて甘さうに食ふ光景、内地邦人の到底想像し得べき所ではない、徹夜天幕附近に焚火して猛獸除とし、天幕内には小さいカンテラを圍んで一行の土人が車座となつて居る狀、恰も山賊の窟と云ふべきである、流石に山男は遠慮して食事も別にし寢所も異にした、彼はツト出で行つたと思ふと一本の竹を切つて歸り直ちに一管の横笛を作つた、黑金の如き頑丈な手に握られた竹笛の一端が彼の厚い口唇に觸れた時、餘音嫋々として森林の靜寂を破つて響く、訴ふるが如く咽ぶが如き竹管の音色には一種の悲哀が籠つて深山に友を呼ぶ鹿の聲にもまがふのである、現代世界と隔絶せるこの蠻人にも亦この音樂がある、風流がある俗臭紛々たる浮世を超越して余は恰も仙境に彷徨する心地

がする、又遠く太古の昔が偲ばれて床しい、余は何時とはなく夢路に入つたが晝間蛭に吸はれた痒さとサンドフライの襲撃とに一晩中苦められた。

翌日は早朝より更に奥へ〳〵と進入しバゴの深山に足跡を尋ねた、幾多の山を越え谷を渡る、處に依つては例の山男がバランを揮つて路を開いて呉れる、行く〳〵野牛や巨象の足跡を諸所に發見したものゝ生憎新しい者がない、其内濕地で一頭の犀の足跡に遭遇したがこれも仔細に點檢すると到底追及の見込のない事を知り復甚だ落膽した、尙もズン〳〵前進して一の鬱蒼たる密林に入らうとする時、計らずも、二三十間前方の樹蔭に一の怪物が動くのである、銅色の體を巨樹に隱して此方を窺つて居る、人か猿か、余は思はず佇立すると山男は‖人である‖と答へた、人？此深山に唯一人踏み入る者は誰ぞ、近寄れば一竿の吹矢を携へた一人の山男であつた、彼は余等が近づくと、愴惶遁走を企てたが例の山男に呼止められて立ち止つた、一二間の近くに余の姿を見た時彼は哀れにもブル〳〵顫へて居た、嚮導の山男に慰撫されてやつと態度を落着けたが其手には六尺もある吹矢を持ち背後には箙を負ふて居る、箙は堅き樹幹を刳拔いたもの

で矢の長さ三寸、其尖端には怖るべき毒藥が附けてある、彼の談るを聞けば今や妻と小供の夕食の爲に猿を獵するのであると、其毒矢の毒は最も激烈なもの、一たび之に中らんか虎豹の猛獸と雖も尚卽座に斃れるとの事である、尚彼は數日前此附近で野猪を射止めたといつた、ボルネオ島のダイヤ蠻族は今も尚此毒矢を以て外敵を防ぐのである白人の如きも屢々之が爲に殺害されたと聞いて居る、今し眼の當り蠻人の手にする毒箭を眺めた時、余も一種の恐怖を感ぜずには居られなかつた、余は毒の精分を聽かうとしたが要領を得ない、總に三種の材料から成立せる事が判明したのみである。曰く一は或る樹の汁液他の二は或草葉を絞りたる汁なりと、請ふて數本を讓り受けた。

余等は吹矢の山男に別れ更に進んだ、すると、又も一の稍大なるサカイ族の部落に出た、小さい清流の畔に一町歩程も森林を切開いた處、小屋も數軒ある樹上の掛小屋も二ケ所、前日の部落よりは總てが勝つて居る、各小屋内には多數の男女や小供が一心に余等を凝視して何等か非常に疑つて居るらしい、案内の山男をして來意を告げしめると初めて安心した樣子である。各戸に必ず吹矢と長

槍が備へてある、余は數名の小供に其等の武器を持たせて紀念の爲めに撮影したのであつた、こゝにも矢張り不具者が多く其一人に携帶の藥品を與へると平伏してお禮を述べた、彼は疾患後既に一年を經過し片足は恰も海綿の如くになつて居る、或一軒にジャコー猫の子を飼つて居る、毎晩主婦の乳房を咥へて眠るとのことであつた、余は食料の若干を與へてこれを讓受けた、折柄豪雨になつたので土人等は此處に露營しようと主張したが、余は蠻人に油斷の出來ない事と且つ惡臭が非常なのとに辟易し、他を促し豪雨を突いて密林中を急いだ、すると日沒頃計らずも支那人のガンビヤ畑に辿り着いたので其小屋に一夜の宿を乞ふ事にした、中には三名の支那人が居る、不潔ではあるが二三日來惡臭の蠻族部落を經たる事とてこの小屋が意外にも清潔に見えたのは滑稽であつた。

一〇　猛虎大豚を掠奪す

小屋の周圍には僅計の蔬菜畑が作られて居る、余が到着すると家長は余を其一隅に導いた、指す方を視れば生々しき巨虎の足跡がある、彼が午前其傍の水溜

に水汲まんとするや、突然怖しき此怪物が現はれ畑の一隅を横切つて密林中に進入したと謂ふ、余は之を狩らうと欲したが如何にせん人數乏しく且夜間は月はあるが天候惡しく遂に斷念したのである。

後刻余は一二の土人と此水溜に水浴をしたが眼前に怖しい足跡を見せられてはである。今日は早朝より二十哩以上も困苦なる行進をなした事とて心身痛く流石に心穩なる事は出來ない、急速小屋に戻つて夕食後一同内房に入り警戒を嚴にして寢に就いたの

五九　椰子の殼に水を汲む

疲勞し、余は覺えず深き眠りに落ちた、夜半一土人の靜に搖起すに眼覺むれば殘燈影暗き處今し彼の猛虎が小屋の傍を底力强く唸りながら徘徊ずるのである、吐く息の音も物凄く一つ〳〵手に取る如くに聞える、未知の馬來密林中に不完全極まる一小屋眞に身の毛の戰慄のを感ずる、土人は一團に蹲つて息を殺して居る、余は傍のライフルを握つたが暗夜に如何ともする事が出來ない、折しも一聲の咆哮に木柵を打ち破る音、次で家豚の悲鳴、荒々しく猛り狂ふ響を聞く、一つとして慄然の因ならざるはない、家畜の主たる家長の驚愕一方ならず家内を狂氣の如く飛び廻る、漸く一同篝火を燃し空鑵を敲きながら現場に行つて見ると、既に巨大な種豚一頭憐れにも獰惡なる猛虎の爲め掠奪せられ、檻内は鮮血淋漓血痕點々として長く地上に滴り燈火に照されては一層の凄愴を極め、悲鳴は遠く消えて夜は更に寂寞を感ずるのである、家長は虎の襲擊を受けた事既に二回に及ぶとて打萎れて居るのも氣の毒であつた。

翌朝我等は山男を先頭に目指すコバンに進發した、三時間程密林を切開きつゝ、やがて到着して點檢すると極めて新しい老野牛の足跡がある、拂曉間近のも

ので追及の公算が確實である、それで我等は一先づ其傍の大樹の下に幕營地を定めドラゞアゴンの二名をそこに止め余は、マサー、ヨウマ及山男の三人を伴れて此巨獸の跡を追ふたのである。山を越え小川を渉る事數度、濕地は泥濘深く山地は竹類繁く前進困難なるのみならず、竹林に觸るゝ毎に音響が發するので氣が氣でない、正午頃其足跡は益々新しく最早目的の野獸に愈々接近したのを知つて一同百倍の力を得た、折柄運惡くも一天かき曇ると見る中に篠突く大雷雨に際會したのである、この雷雨には一同が非常に失望した、野牛は降雨には必ず其位置を變換するを以てゞある、一時間後雨が晴れたので追擊を續行したが案に違はず巨獸は今迄の寢所を去つて深きララン地に進入して居る、高さ丈餘のララン草四方全く透視が出來ない、僅に數分前巨獸が草押分けて通過した跡を追ふばかり、露は衣服に滴り草は足に絡み、音の立つのを禁じ得ない、忽ち二十間程隔つた雜草が搖ぐよと見る間に騷然たる大音立てゝ一大怪物は逃走した、余は音響を目掛けて二發迄も發射したが跡にはララン草の蹂躙せらるゝと足跡の混亂せるのみで何等の手答もしない、齒噛みをしても及ばぬ、已むなく恨を

飲んで幕營地に引揚げた、ヨウマは更に附近のコバンを視察したがこれも得る所なく此日も密林中に山男と共生して一夜の夢を結んだのであつた。

翌朝七時頃朝食を終へ、いざ出發せんとする時、天幕附近に異樣の物音がする、驚き見れば一名の英人が數名の土人を引率し、獵銃五挺を携へて來るのであつた、直ちに天幕内に招じて談を聞けばバンダール市の警察署長ケルマンといふ、余等が數日前狩り廻り立てたのを聞いて彼は非常に不滿の面持である、今後は相互に狩獵の日時と其場所とを通知する事にしようと語り余もこれに同意した、それもその筈、彼は嘗て余がツイ川附近に野牛を獲つたのを聞き此度辛じて數日の休暇を得たので野牛を狩らんと試みたがツイ、レンガ附近は余が既に狩獵した後であつたから、彼は更に此バゴの深山に强行軍をつゞけ昨夜到着したとの事である、而も休暇は僅二日を餘すのみ、余は英人の後姿を見送つて氣の毒さに堪へなかつた。

バゴ河畔に歸る途中支那人の一小屋に憩ふと件の英人は既に晝食を喫して居た無人の大森林に野獸を狩る身が家屋の内に辨當を食はうとする、蓋し彼の

獲物亦想像に難からずである、此處で山男に若干の銀を與へて歸したが余等が三日を費した道程を彼は一日にして到着するとの事である、山男の前には密林なく、沼澤なく、山なく、川なく、唯一方の方向へ直線に進むこと野獸の歩むに異ならぬのである。

其夕バゴ村に到り汽船でレンガ川を渡り面識ある老村長の宅に一泊し翌朝長く苦樂を共にしたる土人等と惜しき別れを告げて余は新架坡に歸つた、此行何等の獲物としてはなかつたが馬來の大森林に於ける幾多の智識と不尠の經驗とを得た事を感謝する。

第八　豹を撃つ

一　豹の跋扈

今より數年前ジョホール河畔に於ける余の農園開墾當初、未だ五十町歩程の森林を伐採して其一隅に天幕生活を試みて居た時である、一日園員某が境界線巡視より倉皇歸來して曰く只今程遠からぬ園線の叢林中から突然二頭の黑豹が現はれ眼光炯々として睥睨するに膽を潰して逃げて來たと、當時余は南洋渡來早々なので馬來密林の情況を知悉しないから、爾く怖ろしい猛獸が人煙近く徘徊するとは信ぜられない、園員が連りに事實であると陳述するにも關らず余は何かの見違りであらう位に聞き流した、然るに其後余自身密林に進入し巨大な足跡や異樣の糞便を目のあたり見るに及んで近く我等の周圍に虎豹が徘徊することを承認し、更に野猪や鹿の類が往々喰ひ殘されてある慘狀を見ては寧ろ一驚を喫したのであつた。

或日余は食料の爲め豬鹿か山鷄を獲んと欲し、一頭の小犬を伴ひ獵銃を肩にして森林に分け入つた唯ある叢林に踏み込まうとする刹那數歩前方を走つて居た小犬が立止まるよと見る間に尾を股に挾み身をブル〳〵顫はせながら余の後方に駈け込んだのである、合點が行かぬ、先づ犬を叱咤しながら進まうとする突端僅に數間前方の草藪中を一怪物が電光の閃くが如くに横切つたのである、余が射撃せんとする間もなく彼は叢林中に姿を沒したが此瞬間余はそれが豹であつたことを確認した、體の長さ四五尺計り黄色の美麗な毛皮鮮明な斑點而して長き尾！余は皷動を押靜めつゝ銃を構へ其足跡を若干追躡したが、早や再び其姿を認めることは出來なかつた。

其後數月、余の住宅を開墾地の中央に建設して以來夜間屢々階下の鷄舍を襲ふ怪物がある、農夫等が手に〳〵獲物提げて駈付ける時はいつも、もう遁走した後であるが、翌朝其足跡を點檢するとそれは多くは豹であつた、余が一度朦朧たる月影に認め得たのは確かに大なる黑豹であつた、豹の足跡は虎に比しては稍々小さい。

其頃余の農園の對岸バンチョールから南洋護謨園に通ずる道路上で一日本人は巨大な豹に出會ふたことがあつた折しも夕刻で雨さへ降つて居たので薄暗い森林の道路を急ぐと突然傍の密林中から黄色の野獸が現れ眼光鋭く彼を睨んだ、虎であらうと腰を拔かす計り驚いたが尙熟視すれば开は大なる豹であつて悠々と森林の奥深く姿を隱したりとの事である。此外附近の森林で豹に遭遇したもの家禽家畜の害を蒙つたものは決して一、二人ではない＝怖ろしかつた、＝殘念だつた＝と云ふ實驗談は屢々友人から聞いたのである、爾く豹は當半島に跳梁跋扈して居るのである。

二　馬來の豹

世界に於ける豹の分布は非常に廣く、阿弗利加、亞米利加にまでも亙つて居る、亞細亞では北は滿洲の寒帶から印度の熱帶に亙つて居るが虎と同樣ボルネオに產しないのは不思議である、其種類、大さも種々雜多であるが、當半島では豹、黑豹、雲形豹、其他これに屬する豹猫、金猫、麝香猫等を數へる。此中にも黑豹は當半

島の特産と稱すべきもの、阿弗利加及印度の南部で稀に認める事はあるが馬來半島の如く多くは無い、現に余の農園附近で捕獲したのも黑豹であつた、たが余が射殺したのも黑豹であつた、古川護謨園の家畜を襲擊して捕獲されたのも亦黑豹であつたが此豹は現に上野動物園に寄贈飼育せられて居る、彼が捕獲さるゝ數日前、附近の密林中に殺した大鹿は半ば其臀部を喰ひ荒され見るも無慘の有樣であつた。

半島の豹は充分發育したものでも鼻端から尾端迄の長さ八尺を越えるのは尠く其攻擊力も亦虎に比しては

六〇 ムサン（麝香猫）

遠く及ばない、從て人間は之に害せられることはあつても生命を失ふ事は殆んど無い、しかし豹は樹木斷崖に攀登して居て獲物が其下を通過すると突然攻擊する其陰險邪惡な點に至つては寧ろ虎以上で黑豹に於ては殊に甚しい、豹の常食は野猪、鹿族、山鷄の類であるが又屢々家禽家畜を襲擊し犬は特に彼の好む所である唯巨大の猛犬は能き彼の敵手である。

或日一園員は二頭の犬を引連れ、園の一隅から隣村に到る小徑を通る時、突然一頭の黑豹が現れ先頭にあつた白犬を嚙み伏せた、稍々後方にあつた巨犬「赤」は友犬の急を救はうと猛然驀進して之に挑戰したが、此時「白」は既に急所の深手に堪へないで住宅に駈せ歸り其まゝ其處に斃れた。「赤」は激鬪の後遂に猛豹を組み伏せたが敵も流石に森林の飛將、勝敗容易に決しない、時に此活擊を眼下に目擊して居た園員は折惡くも空手又如何ともする事が出來ない、銃を持ち來らうと急ぎ歸宅した間に「赤」も遂に敵を逸して住宅に戻つたが目前「白」の死骸を見るに及んで復仇の念にかられたのか狂氣の如く猛り、再び踵を廻らして森林に駈せ戻るので、續て園員も銃を提げて之を追擊したが遂に遁走せしめたのは殘念

であつた、「赤」は此激戰に一方の耳を嚙み切られ數ヶ所の負傷をしたのであつた。

三　月下の豹退治

余は或日新架坡で隣園のO氏に出會つた、氏の謂ふに毎夜猛獸の爲に鷄舍を襲擊され種々苦心するが捕獲し得ない、何とかして退治して呉れぬかと、余は大に同情して承諾したが同園はスンガイ、テラムの河口に在る、余の護謨園の一隅からは僅々數町の距離に過ぎないが、此間密林殊に深く通過は全く不可能で該園に趣く爲には河水を利用して遠く迂廻せねばならぬ狀況である、之が爲に心ならずも旬日を經過し再び氏と新架坡に邂逅した時、氏は其後更に數羽の家禽と最近には遂に愛犬一頭を掠奪せられたと如何にも殘念そうに語つた、そして一夕其姿を認めたが虎ではなくて大なる黑豹であつたと附言した。余は茲に愈々退治の臍を固めた、間もなく隣園の被害が薄らいだと思ふ頃から余の農園に從事する土人の村落に黑豹が出沒し家畜を掠奪すると云ふ、偖は隣園に飽きて此方に移動して來たのであらうと察し所々に罠を仕掛けて敵を待つたが効

を奏しない、斯くする內、虎が出る豹が出ると云ふ評判は土人部落に擴がり人心動搖して平然農園の勞働に從事するものが尠くなつた。そこで余は大に之を憂へ一刻も速に退治して呉れようと思つたが、何分にも豹は晝間雜草の中か樹上に潛伏して體の陰匿は特に巧妙であるから、晝間之を森林中に獲る事は難事中の難事、從つて危險も之に隨伴するのである、故に余は夜間敵が家屋附近に現出するのを待ち、折柄の月光を利用して之を狙擊せんと企てた、時しも陰曆十三夜の事又もや勞働者の頭梁スマイルは其鷄舍を襲はれ一夜に二羽迄奪取せられたと訴へて來た、O氏農園の損害其他を綜合すると家禽丈でも早や三十羽に達して居るではないか、余は最早猶豫ならぬと決心した。

其日の夕、余は農園から數町の距離にある土人頭梁スマイルの家に行つた、此處はリダン川の沿岸で椰子樹繁り附近には二三軒の土人小屋もある、鷄舍は家の直ぐ後方にあつて周圍には珈琲アモタン、ナンカ其他の果樹が繁茂して居る、射擊には稍々不便であるが兎も角鷄舍に面せる一室を占めその窓を細目に開けて射擊の準備をした、余は夜間の射擊には銃の尖端照星に接して幅約五分の

白布を卷きつける、汗は夜間は照星が見えなくて照準が頗る困難であるから斯くして晝間又は燈下の下に屢々演習して置いて照準正確の場合に白布が如何に己の眼に映ずるかを充分覺え置く爲めである、遠距離には勿論効果がないが十數間以内の近距離には能く照準の正確を期する事が出來る、殊に熱帶の月夜は水蒸氣の關係に依るのか我内地の月明に比べては餘程明かである、或外人は熱帶に於ては假令月光なきに於ても星明を以て近距離に能く照準し得ると云ふ程であるが余には同意出來ない、余は此外夜間の射撃にはアセチリン若くは石油の探照燈を準備する、汗は夜間猛獸射撃を行つた後叢林中を捜索するのに必要な計りでなく、夜間野獸と遭遇した時、突然之を照射すると爛々たる猛獸の眼光は燈火を浴びて益々光る、のみならず野獸は不意の火光に驚いて暫時立ち止る其瞬間に射撃の機會を得るものであるからである、若し敵が獰猛なる野獸であつて射撃すら危險な場合は暫時照射して居ると、火を恐るゝは野獸の特性、大抵彼より逃避するものである。

斯くて余はスマイルとマモ諸共監視怠りなく待てど暮せど一向敵影が見え

ない、處が夜半とも覺しき頃三四十間を隔つる隣家に當つて家鷄の突如しき鳴聲が聞えた、偖は今夜は彼方を漁りに行つたのかと思ひつゝ遂に徹宵待呆けに逢ふた、朝になつて早速隣家を調査すると果して豹が襲來して、小屋を破り鷄を掠奪し恐ろしき足跡は彼方此方にあり〳〵とつに建てられ其背後は護謨林で包圍せられて居るが土人所有林の常として、除草

豹を撃つ

六一　豹　猫

いて居る、余は齒嚙みして殘念がつたが及ばない。此家はスマイルの親戚カジスの家で椰子林の一端

手入極めて不完全、人丈を沒する雜草が密生し軒下三四間迄も蔽ふて居る、故に野獸が接近するには最も都合のよいのみならず、晝間潛伏して居るのにも亦極めて良い場所である、そこで余は今夜も必ず此家に襲來するに相違ないと判斷し夕刻から一土人を伴ひ護謨林に面せる一室に萬般の準備をして今や遲しと待つたものゝ、余は前夜の睡眠不足の爲め睡魔が連りに襲ひ心ならずもウト〳〵とした突然余の袖を引きてトワン〳〵(旦那々)と呼ぶにハッと氣付いて目をさまし窓の細目から覗き見ようとする突端余は不注意にも膝の上に戴せてあつた銃を激しく床に當てた、同時に黑色の怪物は逸早くも床下より叢林に飛込んだのである、土人は舌打して殘念がつた、若しも之が晝間でお互に顏の見える時ならば恐らく穴にも這入りたい心地がしたらうが、幸に燈火暗く互の顏の見えないのこそ仕合せであつた、余は敵が必ず再び來る可きを期待した、何となれば彼の目的たる鷄は未だ紛失して居ない、更に待つこと半時間、數間前方の月に照された草叢の露が風なきにユル〳〵と動くと見る間に黑き怪物の一端は草叢の緣に現はれたのである。

煌々たる明月は銀の如き光りを地上に投てゐる、今しも草叢より靜々と匂ひ出た一個の怪物は、怖ろしい銃口が狙つて居るとは知らず階下の鷄舍差して忍んで來る、窓下に猛獸を狙つて居る余は筋肉の甚しく緊張するのを覺える、月下の活劇は將に演ぜられんとする、壯絶又快絶、愈々怪物は鷄舍に接近した、柵を破らんとして前肢を小屋の扉に掛けんとする時、豹の前額が余の方向に露れた突端、余の一指は遂に引金に觸れた、轟然一發飛彈は正しく命中したのである。黑色の大怪物は一聲高き咆哮を發して一躍すると見る間もなく撞つと其場に打ち倒れた、直ちに探照燈を照して窺へばその腦よりは多量の血潮が噴水の如く流出して附近を黑く染めるのである、間もなく絶息を確認し階下に行つて之に接近したが、其家の土人は勿論隣家よりも銃聲に續く歡聲を聞いて集り、何れも喜色滿面日頃の仇敵を打ち止めたのを祝した。

四　豹猫を獲る

問題の黑豹を斃して後數旬何者か余の住宅附近の鷄舍に忍び來て掠奪を恣

にするものがある、足跡から判斷して巨獸でない事を知つたが打捨て置く可きでないから何とかしようと思つて居る其夜突如しき鷄鳴を聞いた直ちに銃を執つて出て行かうとした、時しも十數間前方の護謨林中に双眼の爛々たる一個の怪物が居る、怪物は余が射撃しようとする中に、早くも何れへか逃走したが鷄舍の前には今し殺された計りの鷄が一羽落ちて居る、余は怪物が必ず此獲物に未練を殘して再び來るであらうと豫想し件の鷄を食堂の卓上に置き一同室内に隱れ息を殺して待構へた、食堂は主家の一側より三間計離れた別棟の平家で恰度主家から眼下に見える所にある、稍あつて案に違はず怪物は軒下の暗中に爛々たる双眼を現はすよと見る間に圖々しくもノソ〳〵室内に進入し遂に卓上に飛上り今や獲物に手を掛けんとする、斯くあるべしと待ち構へたる余は直ちに之を狙撃した、彼が忽ち卓上より轉落し二三回躍動したる所を更に第二彈で止めを刺した、怪物は美麗な豹貓の牡であつた。

て於に園護護田秋——熊の來馬　二六

大鹿狩　三六

第九　化物屋敷の大鹿狩

一、コンコンの化物屋敷

ジョホール河口より上流三哩程の右岸、コンコン川の合流點にコンコンと呼ぶ村がある、一寒村であるが附近には支那人經營の護謨園や、パインアップルの畑があり又新架坡からコタテンギに通ふ汽船が一艘、此處に寄港して燃料を積込むので比較的其名を知られて居る、此コンコン川を遡ること約三哩、化物屋敷と稱する處がある、茲に化物屋敷といふ如き非現代的の不穩當な文字を用ふるのも、別に妖怪變化が出沒して人間を誑すといふのではない、數年前迄某支那人が農園を經營して居た處で、その住宅の跡から考へても當時は如何に規模が盛大であつたかゞ解る、何故か突然經營が中止された、利殖に汲々たる支那人が此立派な栽培園を惜氣もなく抛棄したについては何か仔細の理由がなくてはならぬ、爾來數年間何人もその理由を解釋した者がない、可惜栽培樹は蓬々たる雜

化物屋敷の大鹿狩

草に痛められ見るも哀れなる慘狀を呈して居る、宏壯な家屋は風雨五年住む人もなく荒れ果てゝ居る、その荒寥の光景は人をして坐ろに悲哀を感せしめるのである、纔に名殘を留めて居る栽培樹の果物や新芽やを慕つて寄り來る野獸があれば、廢れた家屋は時に山賊の巢窟ともなる、それに熱帶の常、埋れた獸骨が多いのか夜陰には青火の彷徨ふ事もある、斯くしてこの農園はコンコンの化物屋敷としてその名を知らるゝに至つたのであつた。

余は今日迄に象も射止めた、虎も射止めた、野牛も射止めた黑豹も射止めた、更に鰐も毒蛇も射殺した、犀も獏も其狩獵は經驗した、馬來半島には棲ないライオンは是非なしとするも其他は有ゆる猛獸狩を試みたのである、唯殘つて居るのは大熊の狩獵あるのみとなつた。そこで余は密に熊狩の機會を窺つて居る折しも化物屋敷に大熊が出ると云ふ風說が余の耳に這入つた、機會到來と喜び勇み、某年二月二十二日、陰曆十七夜の月を利用してその大熊を狩うと露營の準備を整へてコンコンさして出立した、一行は某護謨園の友人二名と土人二人卽ちマモとスマイッと余の五人である。小舟に帆を揚げてジョホール河を下つた

が午後五時にはコンコン河口に着いたので直ちに同川の遡航を始めたのである、コンコン村を北に距ること間もなく人煙は全く絕える、川幅四五十間、川と云へど潮加減の都合でか流れようとはしない、水の動かないこと死んだ如く、兩岸には紅樹が憎々しき迄に茂り、水搔く櫂の音に驚いて樹上に立ち燥ぐ野猿の群もあれば、人の氣に夢を破られた鰐が飛沫を上げて水中に飛込むのもある、曛て夕陽が森の彼方に落ちると靄々たる暮色は秒一秒濃くなつて來る、かくて夜の無人境に舟を進むる時、水面に落つる木の葉の音に明らかに靜寂を覺ゆるのである。折柄雨滴の二つ三つ帽子を彈く音＝おや＝と空を仰げば、一天暝濛四邊暗澹、素破雨なるぞといふ間もなく猛雨沛然殆んど瀧の如くで、降るといふよりも流すといふに近い、電光が閃くと見れば天柱も打ち壞けんばかりの雷鳴が一しきり、今迄無人境の靜寂は忽ち破られて、活天潑地の大光景となつた、余等は熱帶の驟雨には馴れて居るので差して驚きもしないが、舟中の猛雨とて雨水の排除に忙しい、豪雨三十分にして歇めば今迄黑幕を蔽ふた樣であつた天空は忽然として晴れ渡り、星羅昭々、宛然キネオラマを觀て居る感じがする、晝間の暑熱全く

去つて心神一洗甚だ爽快を覺える、野獣は豪雨の後を喜んで巣窟から出て來ると聞いて居る、一同喜び勇んで今夜の好獵を期待した、水流次第に狹まり更に一小支流に入るに及んでラッサオ草が川を飛物顔に蔓つて居る、片々たる小舟尙進むるに難く、土人はバランを揮つて之を薙ぎ倒すのである漸く目的地に到達すれば時既に七時を過ぎて居た。

其處には多數の椰子樹がある、蟲々として天を摩して居る、其處には人丈よりも高い雜草が地を蔽ふのである、土人をして路を開かしめつゝ、椰子樹下に到れば、熊の爪痕なほ歷々として殘つてゐるのが見える、月は未だ昇らないので四邊闇々、目差す化物屋敷を索めるが一向見當らない、バランを揮つて草を薙ぎ更に進む事數十間行手に薄ボンヤリ一軒の家が見えるらしい、‖あれが化物屋敷だせ……‖といふ聲がお互の間に交へられる小山の如き黑き大塊が見ゆるのみで未だ輪廓が明かにならぬ、世に妖怪變化は無いものと確信しながら化物屋敷の稱號に心を引かれ何となく薄氣味惡く覺えるのも可笑しい、‖若しや不思議の現象が……‖と思ふと好奇心がムラ〳〵と湧いて來る、一同は期せずして忍

足となるのである、ことに迷信深き土人等は息を殺して余等の後へに竦みながら附て來る、猛獸追跡の時にも此位の靜肅行進が出來れば上乘である、家屋に近づけば其附近一面にマンゴスチンや柑橘又はドリアンの樹木が二三エーカーに亙つて繁茂し、下には雜草が蔓つて居る數間の月、今や全く荒廢に歸し、垣根は破れ、門は朽ち、更に二階の屋根墜ちて十數本の柱

化物屋敷の大鹿狩

四六　鼠　鹿

近距離に迫つて窺へば家屋は噂に違はず宏壯である、惜しい哉主を喪ふて數年風雨に痛められて幾十

のみ赤裸々の淋しさを語つて居る、欄干朽ちたれども堂々たるベランダ(椽)の構造には過ぎし昔の榮華を見せて居る、人の氣合は更にない、家の背後には小高い丘があつて巨樹が欝蒼と茂つて居る、化物屋敷の名に背かず流石に鬼氣人に迫るの感がある、全く古井戸と廢れし家ほど薄氣味の惡きものは世に又とあるまい。

一行は博覽會の不思議館でも見物する如く唯茫然として佇むのみであつたが、斯くては成らじと一同を激勵し更に數歩を近づき携帶の探照燈を照射すると俄然屋内に怪しの物音が聞える、人の住む筈がないのに斯は抑も何事？野獸か、非ず、山賊？余は斯く思ひつゝ一行を顧るといづれも同じ顏色で、早や銃に裝彈してゐる物音が次第に此方に近づくと思ふ間もなく窓の戸を開く音、余は右手に銃を握り左手に探照燈を照して音のする窓に向け片唾を呑んで待つて居ると戸はスーッと細目に開いた、然し更に開かうとはしない、内部から此方を窺つて居るのであらう、物音と云ひ戸の開く樣子と云ひ野獸の仕事ではないから今は山賊と思ふの外はない。尙も余は照射を繼續して居ると暫くして細目の

戸は颯と開かれたと同時に窓から現はれた人の顏、山賊か、否、頭には霜を欺く白髮を戴き、顏は肉落ち色蒼ざめ、物凄い程に痩せ衰へたる老爺である、此方を眺むる態は流石に山賊の如き惡漢とは見えない、吾々は更に數歩進んで馬來語で何人かと問ふた、老人も亦何事か余等に問はうとする、彼は馬來語を知らないらしい、その言ふ處は支那語である、若干南支の言葉を解する土人の一人を通譯として會話を試みたが、老人の談に據ると數十日前主人の命に依つて唯一人留守番に來て居る、月に一度食料補給の爲めに人が來るのみで連夜野獸の立燥ぐのがせめてもの伴侶である、主人より阿片を給與されるのを唯一の樂しみとして餘生を送つて居るが、而も數日前其阿片も食料品も山賊に襲はれて强奪されたので次回の給與を受くる迄は何を樂みに暮さう術もない、唯總に芭蕉の果實や泥貝を漁つて飢を凌ぐのみであると涙ながらに語るのである、余が白米若干を與へると彼は九拜して感泣した。

二　大鹿を擊つ

老人に就て野獸の消息を聞くと、數日前迄熊は毎夜の如く現はれ僅々數間の距離にある椰子樹の周圍を徘徊し、之を逐はうとしても少しも人を恐れないので却つて此方が辟易して戸を堅く閉して蟄居するの已むなき次第であつた、處が數日前二人の獵師が來て最も大なる牡熊を一頭射止めた、爾來熊は少しも姿を現はさないと、偖は時機を失つたかと失望落膽したが、その外に大猪や大鹿が來ると聞きせめてもの心遣とし野猪は兎も角大鹿を狙つて天幕を構へた。

天幕附近で飯を炊き罐詰を開いて腹を拵へ、只管月の出るのを待て居る、程なく彼方の山の端から十七夜の明月は煌々として昇り、恰も余等の幕營を慰むるが如く照すので闇夜は一變して白晝の樣である、かくて余は往時遠東半島に於ける露營の夢を追懷し萬感交々胸に迫るを覺えた。月を友として射擊地點を相すべく余は土人を伴つて芭蕉畑を通過し稍展開せる耕地に入らうとすると、僅々數間の前方を巨大なる野獸が横斷した、疑ひもなく大鹿である直ちに大鹿の飛込んだ森の附近に用意の卷蒲團(裏に防水布を張れるもの)を敷き蚊帳を張つて土人諸共蹲踞り敵の來るのを待つた、同伴のI氏は約四十間を隔てたマン

ゴスチン樹下に陣を構へて居る、遠く野猿の叫びを聞きつゝ敵今や遲しと待つ程に、土人はトワン〳〵(旦那)と呼ぶ、指す方に眼を注げば果して大鹿！珊瑚の如く立派なる角を振りつゝ悠々と此方に歩いて來る、余は直ちに伏姿となると一土人は靜かに蚊帳を揚げて銃口を露出する。スマイルも余の替銃を以て構へて居る、大鹿が十四五間に接近した時敵は蚊帳の異樣に氣付いたのか、突と立止まつた、偖は看破されたか最早猶豫はならぬと狙を定め一發を放つ續いてスマイルも發砲する、敵は忽ち倒れた、占めたと喜んで急ぎ蚊帳から出でようとすると意外！倒れた大鹿がガバ●と起上つてI氏の方へ逃走する　氏の陣所に當りて轟然たる銃聲が起る、大鹿は再び倒れたが又も起き上つて逃走する。余等は月光を頼りに急追擊に移り屢々接近して射擊したが命中しない、鹿を逐ふ獵師山を見ずとは此事、知らず識ず小山の幾つかを越え今一息に追擊しようとする時、僅々二三間の前方から又も一頭の大鹿が現はれた、餘りの咄嗟に狼狽しつゝ一發射擊したが急所に命中せず、一たび轉びたる後之亦逃走した、直ちに其跡を檢べて見ると血糊は草木に附着して居るが重傷を與へ得なかつたと見え遂に逃

走を全うした、一度ならず二度の失敗に落膽すると同時に甚しき疲勞を覺えたので一先づ蚊帳に引返した、何時とはなしに眠る中、土人に搖られて眼覺むれば牝なれども二頭の大鹿が蚊帳の間近に來て居る、今度こそはと人念の狙撃を行へば敵は一たび高く飛上り倒れようとして尙も逃走を企てたが深手に堪へず悲鳴を揚げてゐる、軈て第二彈を放つて遂に彼を斃したのであつた、一土人は直に馳せて行き其咽喉を深く切り裂いた、是れ宗教上から來る慣例で馬來人は息ある內に咽喉を切らざる鳥獸は決して食はないのである、此鹿は牝でこそあれ其大さ小馬に似て重量殆んど六十貫に近い。

一頭を獲て元氣づいた一行は今は早眠氣も醒めた、更に獲物を待つと或時は一疋の山猫が二三尺の近くに迫つて來て、余が蚊帳を揚げようとする時敏くも逃走したり、或時は野猪が三たびも接近して來てしかも射撃の機會を捉へ得なかつたりした、斯く野獸と伍しつゝ遂に天明に至つた、朝餐を喫すると睡魔が連りに襲ふが、それでも昨夜の手負鹿に未練が殘つて忘れられない、そこでまた銃を構へて搜索と出掛けた、昨夜の追擊の最終點から血潮と足跡を辿つて一町も

化物屋敷の大鹿狩

六四―其二　羚羊（カモシカ）

進んだ頃、傍の叢林中にガサ・と音する間もあらず目差す手負の大鹿は飛出したのである、ソレとばかりに一同は躍進した、餘程の深手と見えて彼の速力は甚しく鈍つては居るが、尙人間よりは迅い、丈の高い雜草中を疾走するので角ばかり高く露はれて姿は見えないから射撃する術がない、遂に追ひに追ひて唯ある一小流に出た、汀に立つて敵は何處と眺めると、今し吾々が佇立せる十數間の上流を渡渉しようとする處であつた、今ぞと余は直ちに之を狙撃し銃丸は背後を貫いた、續いて射撃したI氏の彈丸も命中したの

で流石の大鹿も力盡きて下流に押流され恰度吾々の前面で岸に匐ひ上らうとする、其機を逸せず生け捕つた時は既に絶命に近かつた、見れば巨大の牡鹿である、角の長さは三尺を算した、吾々は化物屋敷に大熊を索め熊を得すして大鹿を擊つたので、不滿足ながらも引揚げた。

三　馬來半島の鹿族と其狩獵法

馬來半島に於ける鹿族の種類は尠くないが、村落附近に出沒するのは普通大鹿、羚羊及鼠鹿の三種である、大鹿の大なるものは肩迄の高さが五尺に達するが多くは四尺三四寸である、角の長さは三尺に及ぶが其質は寒帶のそれに比して優良でない、馬鹿と云ふ言葉が若しも馬と鹿との誤謬より來たのならば余は大牝鹿を目擊する毎にさもあらうと首肯するのである、羚羊は稍々小形で美麗な斑點がある、牡は稍曲つた五六寸の角を備へ白色の毛を有する短尾を絶えず打ち振りつゝ敏捷に活動する、土人は之を森林の山羊と稱するが其鳴聲は甚だ恐ろしく、余は當初虎豹の咆哮と誤つた程である、鼠鹿は高さ一尺に過ぎない鹿族

の一種で鼠の如き鋭い齒を有し頗る敏活に行動する、密林中を殆んど吾人の眼に止まらないように疾走する、凡そ之等の鹿族は森林中では若葉、樹皮、果實等を常食とし虎豹の襲擊に對して絶えず戰々競々として居るのである。

ゴム栽培業者に取つて鹿族は最も嫌惡すべき野獸である、若し外柵の設備が手遲れでもすると、折角移植した後發芽した若芽は無慘にも喰ひ盡され、翌朝吾人をして啞然たらしむることがある＝三四年以上の護謨樹は外皮を剝ぎ取り喰つて仕舞ふ＝之が爲めに六尺以上の木柵を設けて防ぐと、大鹿等の除害は出來るが鼠鹿に至つては如何なる隙間からでも潛入して來るので誠に始末に惡い。

鹿族は晝間決して開墾地へ出る事はない、密林深く潛伏して居るから容易に之を狩ることは出來ぬ、假令獵犬を使用しても野猪の如く犬に抵抗しないで忽ち逃走する、それで擴莫な大森林に於ては如何共する事が出來ないのである、故に無數に跳梁跋扈する鹿族も、虎豹の餌食となるの外、吾人が之を狩獵するのは爾く容易の業ではない、良好な地形を撰み多數の勢子を使用して逐ひ出すか或

は夜間待ち擊ちをする外ないのである。土人仲間に於て古來より施行する狩獵方法は‖逐出罠‖である、大抵の土人は銘々籐製の罠を所持し、イザ鹿狩を行はうとすると、酋長の命で各自之を携行し數十若くは數百と連接し森林中の適當なる場所にこれを張り、監視人を附して置く、一方多數の勢子は他の方面から逐ひ出すのである、罠は徑二三尺の輪形に造られてあるから疾走して來る鹿は其中に頭を突込み逃れようとして益々引締められる、そこで監視人は直ちに撲殺して咽喉を切り裂くのである、其夜酋長は盛なる宴會を催す習慣である。

第一〇　野猪狩

一　馬來の野猪と其被害

我邦では野猪の勇と謂ひ、猪突と謂ひ、又手負の猪と云へば、何れも勇猛の形容詞に用ひられる、熊や狼と共に猪は我國では猛獸の一に算へられて居る、しかし巨大なる象や犀、獰猛なる虎や豹の横行する南洋に來てはかく迄勇猛を以て稱せらるゝ野猪も到底幕の内に入る事が出來ない、漸く鹿と席を同うして二段目に落されてゐる、ジョホール國の狩獵規則が象、犀、獏、野牛、虎、豹等を第一位とし猪、鹿を第二位に配列して居るのを見ても野猪の勇が尙南洋に覇を唱ふるに足らないのを知る事が出來る、閑話休題、余嘗て内地に在る頃、相州足柄山麓の有名なる一老獵師から彼が壯年時代に一彈能く野猪二頭を屠つたといふ手柄話を聞いて羨望に堪へなかつた事は今尙歴々として余の腦裡に印されて居る、猪狩！何時か試みようと思つた猪狩の冒險も、國を距りて遠く南國に來ると全く一つ

六五　余の苗床を荒したる巨猪

の茶飯事である、聊か意外の感がないではない、近時我邦では狩獵家が著しく增加して野猪の類は甚しく減少した、御獵場を除いては深山幽谷に索むる外はない情況となつて居る、斯くて多數の勢子と獵犬とを使用し莫大の出費を敢てし更に數日に亙つて大に狩立て漸やく一二頭を獲て滿足するのが常である、處が馬來半島では全く我内地と事情が異つて娯樂或は職業として野猪を狩る者は殆んど無く、總て自家の耕作物を保護する必要上から狩るのである。

今試みに野獸に對する作物の被害

に就て述べよう、鹿は護謨樹の新芽を食ふ、黑猿は徒に之を摘むに過ぎないが野猪は全耕作物を荒して廻る、余の地續きに住む馬來人ハジマノは一千本の椰子苗を植付けたが二三ヶ月後に之を檢すると、驚くべし完全なもの僅に百五十に過ぎなかつた、野獸の被害は如斯激甚である、栽培業者は是等野獸の害を除かうとして農園の周圍に木柵を結び、數條の有棘鐵線で連繫する、これで鹿の侵入は防ぎ得るしかし野猪に對しては殆んど効果がない、その鋭き牙と石の樣な鼻頭は苦もなく杭を倒し鐵線を破る、かつて十一頭から成る猪群が余の農園に侵入して來て作物を荒し廻はつた事がある、園員の一人は之を驅逐しようとして威嚇の爲めに射擊した、群の大部分は猪兒であつたので鐵線の中間を容易に潛り拔けたが、一頭の巨猪は銃聲に驚いて遮二無二鐵線を突破して逝れた園員が現場に駈け着けて檢べて見ると、驚いた、數條の鐵線は美事に切斷せられて其有棘部には毛皮は勿論鮮血淋漓たる肉塊迄も附いて居る、斯の樣な有樣であるので護謨栽培業者が苗床及移植後一二年迄の幼樹時代に於て最も恐るゝのは猪害である、木柵とても完全なものを設けると或は防止が出來るかも知れないが余

の農園の樣な小規模なものでも尙二百町歩ある、大園になると數千町歩以上になるから、到底此廣き範圍に完全なる防禦線を設ける事は不可能なのである。

馬來地方の野猪には眞黑色と灰黑色の二種があつて重量四十貫を超える巨猪も珍らしくはない、其牙の强烈なこと亦驚く計りである、例へば余等が鉈を揮つて碎かうとしても尙且困難を感ずる椰子の實を猪牙は何の苦もなく嚙み碎くのである、猪は晝間は村落に近い叢林の中に眠り、日沒後餌を索めて耕作地を徘徊するのを常とするが、深山又は島嶼に棲息して幼樹の根、木の實、天然の芋等を喰つて居るのもある、好んで寢所を變更するのは虎や豹の襲擊を避ける爲であらう、野猪は大低群を成して徘徊する其數尠なきも數頭、多きは十五、六頭一所である、固より人間を襲はうとする樣な猛惡なものではない、唯手負になると所謂野猪の勇、手負の猪の稱の如く、往々人間に向て突進して來る、余は或月明の夜、十二三間の近距離で大野猪二頭を發見した、照準の困難を思ひつゝも四肢の孰れかを傷け倒さうと思つてバックショット(最も大る霰彈)を以て射擊した其一頭は倒れ一頭は遁走すると思ひきや、俄然二頭は牙を並べ地響を立てゝ突進し

て來た、危やといふ間もなく早や數間に迫つた、急場の策として比較的余の正面に向つて來る、左方の一頭に實彈を浴びせて體を左側に交したのである、すると幸にも二頭共轟然たる銃聲に驚いたのか殆んど余の足元で其身を捻り斜に逃走した、翌朝余は其血跟を求めて獸屍を森林の中に發見した事がある。

二　捕猪法

從來土人の捕猪法は仕掛弓又は陷穽である、仕掛弓は籐の蔓を以て弦とした强度の弓に堅材を以て作つた矢を番へて猪の通過點と思はるゝ場所に置く、野猪が來て其一端に接觸すると忽ち鋭き矢は弦を離れて彼の胸部を刺し貫くのである、此方法は最も簡便で且つ效果が多い、蠻人サカイ族は矢尻に激毒を附着するが馬來人はしない、野猪の出沒が甚だしい地方には此仕掛弓が多いから迂闊に土人の新開地に進入するのは非常に危險である、陷穽は木柵に接して其內側に設ける、柵の二三尺上部の横木を取り除いて置く、野猪が來て横木に前肢を掛けて飛び込むと其重量で墜落するのである、之が汀附近の場合には往々鰐が

過つて墜落する事がある。

近時射擊を以て野猪を狩る方法は土人迄も見習ふ樣になつたが、彼の出沒が主として夜間であるのと、假令日沒前に之を發見しても多くは深き叢林中であるから單獨での射擊は非常に困難である、しかし敏活な獵犬を使用すると差して難事ではない、余は一日愛犬メリーを連れて叢林中に野猪を索めた、倏ちメリーは數間の前方で運りに吠えるので急ぎ接近して視ると、さあ大變大猪三頭は小さなメリーを圍んで恰も嘲弄する樣にして居る、余は直ちに最大の一頭を射殺した、すると他の二頭は叢林中に姿を沒して仕舞つた、その後數日護謨の苗床で一頭の巨猪を獲た、早朝不圖眼を覺すと余の室からわずか三十間を隔つた苗床に當りてカッ〳〵と護謨の種子を牙で嚙み碎く音が聞える、憎き敵の振舞哉とは思つたが未だ暗黑で如何とも爲すことが出來ない、待つこと須臾、東方幽に明るさを感じたので、余は直に階下に飛下て拔足差足苗床に接近した、凹地を經て匍匐しながら漸く柵の一端に達すると、十間を隔てゝ小牛の樣な巨猪が朦朧として眼に映た、余は彼が立ち止まつて此方を凝視した一瞬間其心臟目掛けて

發砲した、靜肅な朝の空氣は轟然たる銃聲に破られた、彼は一聲悲鳴を揚ると共に其場に斃れたが彈丸は其肩胸部を貫通して居た、此野猪は從來余の打取つた中最大なもので優に四十貫を超えて居た、見ると約三反餘りの苗床は彼の爲め終夜荒されて全く廢物になつて居た、此外余が自園に於て獲たる野猪は今日迄に既に二十頭を超して居る。

三　パンチョールの野猪狩

余は余の日記中よりパンチョール野猪狩の一節を揭げる、パンチョールはジョホール河の上流十哩程の處にある戶數二三十軒の一寒村に過ぎないが、其位置が新日本村の中心點であるのと、新架坡とコタテンゲとを通ふ汽船の寄港地であるのとで能く其名を知られて居る。

時は大正某年師走上浣、パンチョール附近の邦人護謨園主が聯合病院建設の事を協議すべく同地に集會した時、附近の土人から一の請願に接したのである、開は當時野猪の被害が殊に甚しいので、吾々日本人の力で以て退治して戴きた

いとの事であつた、余等は對土人の威信上且つお互の娯樂上會議一決其翌々日愈々野猪の大狩獵を行ふ事にした。

猪野猪狩の當日、余は自園から數名の日本人と十數名の土人とを引具してバンチョールに行つて見ると、早や同志の面々は諸般の準備を調へて居た、二十名の土人と十六名の支那人、石油の空罐を持つ者がある、バランを帶びて居る者もあり、長槍を擔つて居る者がある、中にも土人村長の息子は今日を晴と着飾つて眞紅の鉢卷、紫色の帶、そして手には一節の長槍を携へて居る姿、恰も赤穗浪士夜討の裝束かと思はれたのも一興であつた、のみならず彼の叔父＝老人＝は頭髮に霜を戴いては居るが甞て一振のバランを揮つて猛獸と格鬪したといふ豪の者、昔鍛へた筋骨は隆々として壯者を凌いで居る、長きサーベルを拔き放つて勢子の總指揮者になつて居るのは洵に適り役である、長槍の飛將、バランの勇士、棍棒の猛者、而して空罐を打ち鳴らすに至つては宛然百姓一揆以上の形である。

午前八時、勢子約五十名と射手五六名は第一回の狩立を行ふべく同村の東端雜木林の溪谷に向けて出動した、余等射擊部隊は野猪の通過地點と思はれる一

揃勢の狩猪野ルーヨチンバ　六六

六七　パンチヨール野猪狩の別隊

斜面の雜草中に陣取つて勢子隊の追ひ出しを今や遲しと待ち受けた、此時勢子隊は既に遠く迂廻して溪谷の他の一端に到り、二三十歩の間隔に散開して、石油罐を敲き、聲を限りに叫びつゝ前進して來る、しかし勢子隊の進路は密林中しかもバランで草木を薙ぎ立てつゝ前進するので從て各員の聯繫が意の如くならぬ、行進は甚だ遲々たるものであつた、折しも溪谷の密林に當りて異樣の音響が起る、忽ち一頭の大鹿が叢を破つて現れた＝ソレ獲物よ＝大鹿よ擊ち獲れと＝連呼する間も俟たず、馬にも似たる大鹿は斜面の叢林中を駄せ登る數名の射手は＝ソレ遁すな……＝と鹿を追ふ獵師山を見ずの譬に漏れず、密林の木の間を縫うて轉びつ起きつ追跡する、一發又一發の銃聲は樹々の梢を震はせて彼方の森に響き渡る、大鹿は珊瑚の樣な角を振り立て護謨林の間を走つて行く、げに一幅の好畫題！鹿を擊ち損じたので失望の色が各員の面上に棚引頃俄然聲あり＝バビー（野猪）＝今度こそは免さじと腕を扼して待てど暮せど野猪の姿は一向に見えない、勢子の叫びと空罐の音ばかり騷々しく聞え渡る＝確にバビーが居た＝二頭の巨猪を目擊した＝と各自に主張はするが眞物が現れなければ詮方

がない、蓋し密林に於ける勢子隊の聯繫線を無視して脱出したものか、更に第二次の狩立を決行したが遂に徒勞に歸した、時恰も正午に近いたので一同宿舍に引揚げた、午後、第三次の狩立はパンチョール村を包含する一帶の密林で行はれた、勢子は村の南端に散開し、射手は北方數町の地點に伏して敵を待つて居る、間の聲と空罐の響は刻一刻に近づいて來る、倏ち罐の音は一層の激烈を加へ、人の叫びは一段の强度を增した、素破何物かの出現ぞと氣色食む時しも、二三十間前方の叢林中に音高く、一頭の巨猪が牙を鳴らして驀進して來た、一番鐵砲は鳴つた、續いて二番鐵砲も響いた、併し巨猪は四肢の音勇ましく雜草の中に姿を晦ました、殘念！と一同が切齒する時又しも一頭の巨猪は吾々の射擊距離内に現はれたのである、ソレ遁すな、擊ち損じるなと叫びの聲が起る、一番鐵砲は見事外れた、更に二番鐵砲も外れた、硝煙に咽びつゝ猛りたつ巨猪はいよ〳〵余の前面に躍進して來た、射擊！幸に余の彈丸が獵友の一彈と共に急處に命中したので流石の敵も控つと斃れた。

此時彼方の叢中から疾風の如く小鹿が逸走するを目擊した、折柄勢子の叫び

あり曰く一頭の野猪が彼方の小川を渡つて居ると、直ちに小丘に駈け登つて小手を翳して眺めたが、なる程水流を横斷しようとする一怪物があるが纔に水の搖ぐのを見るばかりで照準する事が出來ない、次で第四次の狩立を行ふたが獲物もなく日沒近く狩立を中止して宿舍に引揚げ食膳の猪肉に舌鼓を打つたのである。

第二一　鰐狩

一　馬來の鰐

南洋と云へば直ちに鰐を聯想するであらう、慥に鰐は南洋名産の一つである、事實山には虎狼の窟、野には毒蛇の巣、而して河には鮫鰐の淵がある、しかし半解通が口を極めて誇張する樣に鰐は人に對してしかく兇暴を逞しふするものではない、衞生思想に乏しい土人共は身邊を圍繞する瘴癘よりも今尙鰐尾の一揮を恐れて居るが、斯は鰐に對する人間の威信が薄弱であつた時代の遺物で、以來幾度か被つた慘害の遺傳的恐怖に過ぎない。人智の進歩は鰐を狩るのに强烈な火器を以てする樣になつた、それで流石水中の猛者も今では人間に遇へば忽ち尾を垂れて逃避するのである、今や吾々文明人は假令如何程な蠻地に踏入つても相當に注意をさへ拂つて居れば危害を蒙る事は斷じてない、殊に狩獵家に對しては他の猛獸に比し鰐の危險を感ずる事は殆んどないのである、然し鰐と

舟木獨の狩鰐　八六

鰐　口絵　九六

ても獰惡の特性は他の野獸と同樣であるから日沒になると急に猛り出し人間を見ても恐れない計りか時には襲擊を試る事さへある、野獸の常として夜間に餌を漁る慣習があるので爾く大膽になるのであらう。夜間土人の娘が厠に行く途中尾力の一擊に叩き込まれる事もあれば＝馬來地方の土人の厠は總て水濱に設あり＝小舟で夜間航行の時に肘を舷の上に出した爲め手を嚙み取られた者もある、しかし之等は皆自己の不注意から招いた災難と云ふ可きであるが、バトバハ地方の余の友人は三五年間に二三名の土人の婦女が夜間に行衞不明となつたことを語つた、又或日同地三五公司の炊事場に鰐が侵入したと云つて大騷ぎを爲した事があつた、これは出水に紛れて飛び込んだ氣紛れ者で炊事場を殊更に襲はうとして侵入したものではなからう、然し河邊に居住するものは夜間は相當に警戒を要する、殊に河川中には如何に暑熱に苦しめばとて夜間は決して入る事は出來ない、二三年前ムーア河に於て或月夜四五名の新參支那勞働者が土人の止めるのも聽かずに水浴した事がある、すると忽ち一頭の巨鰐が現れて其一人を嚙へた、彼は悲鳴を揚げ救ひを求めたが如何とも爲す事が出來

ない、見る〳〵水中に引き込まれて行つた、然し彼は餘程の豪氣者であつたかして苦し紛れに無茶苦茶に鰐の眼の當りを攫み樣力一杯眼球を搔きむしつた、流石猛惡の鰐も其痛さには辟易したと見え、遂に彼を放棄したので夢中に河岸に這ひ上つた、今は早、氣力も盡き其場へドット倒れて仕舞つた、一同が駈け付けて見ると鰐の恐ろしい齒齦は彼の太肢を突き通して戰慄するばかりの慘狀であつた、軈て介抱の結果辛くも一命を取り止め得たが是等は寧ろ奇蹟とも云ふ可きである、鰐は一度口に嚙へたが最後決して放

七〇 鰐の歯

すものではない。

鰐は把蟲類に屬し水陸兩棲の卵性動物である、普通河岸の砂上に產卵するが少きも二十、多きは六十を算する、卵は白色で、楕圓形、長さは約二寸五分もある、馬來地方の鰐の中で口が特に細長いものがある、概ね河川に棲息して魚類を常食とするが時には人間を襲ふ事もある、余は未だ此種の鰐の生きて居るのを見た事はない。鰐は晝間は水流の深淵に潛んで居るが人煙稀なる地方では干潮時に雄大なる長軀を淺瀨の上に横へて眠り又屢々其亂杭の如き鼻面のみを水面に現し浮遊し居る事もある、馬來の河川は大概濁流で一見如何にも物凄い色を呈して居る、其渦卷く處などは如何なる怪物が潛んで居るかわからない、ジョホール國ではバトバハ、及ムーア兩河の如き茶褐色の濁流が渦卷く處は鰐の棲息に適して居る、潮時に依りては船中より彼方此方に其長軀を目擊する事が出來る、鰐は概して急流を好まない、水流が屈曲して渦を爲す處に最も多いのである、余の農園を流るゝリダン川がジョホール河と合流する地點の附近などは水勢が甚だ緩漫であるから拂曉又は薄暮に屢々鰐の浮游するを見るのである。

余が今迄目擊した鰐の中で最大なるものは恐らくパトパハ河口に汽船中より望見したものであらう、初めは河岸の洲上に巨木が倒れて居ると思つて居たのに汽船の進むに從ひ件の巨木が動き出したので初めて巨鰐であつたのを知つた、身長慥に三間半はあつた、嘗てジョホールの首府ジョホールバルの海峽で目擊したものは頭部のみを水面に露出して居たが頭部丈で判斷すると優に三間以上もあつたと思ふ、普通に最も多く見受ける鰐は先づ十尺から二間位迄の處である、人或は馬來の鰐が割合に小であると感ずるかも知れない、しかし既に三間と云へば其胴廻りの巨大な事、實に驚く計りである、鰐の如く長軀の動物は年を經るに從ひ其長さを增すよりも其太さを增すからである。

或日余は鰐の面白い狀態を目擊した、それは余の園の對岸、バンチョールに於て不圖ジョホール河の水面を凝視して居ると、今し二間計りの一頭の鰐が頭を水面上に擡げ例の大なる鰐口を開き尾端を三尺餘も水面高く逆立てゝ、潮に添ふて浮流して居た、烈日に照されたる狀、黑色ながらも燦爛として金の鱗の感があつた、眞に珍らしい狀態で土人は鰐が水面で晝寢して居るのであると云ふが

余には判斷がつかない。其後一日余はリダン河の入口に於て小舟に乘り込まうとする折柄突然背後に恐ろしき咆哮を聞た、何物かと振返ると、こはそも如何に二間に餘る大鰐が四尺も高く頭を擡げ大口開いて猛獸の如く咆哮し、波を蹴立てゝ突進する、時に其前方を見れば之亦略ぼ同大の鰐が頭、背及尾の一部を水面に現し靜かに水上に浮游して居るのであつた、余が銃を執つて靜かに之に接近しようと企てた瞬間彼等は早くも其姿を沒した、余は此時初めて鰐の咆哮を聞いた、その聲音殆んど虎豹の類と同樣吾人を戰慄せしむの概がある、恐らく彼等は交尾期の狀態であつたのであらう。

二　鰐は猿と犬を好む

鰐の常食は概ね魚類であるが、小動物特に猿と犬を好むのである、尤も家禽を狙ふ事もある、余は或時バンチョールから獨木舟で本流を横斷し更に支流リダン河を溯つて歸園しようとする途上、合流點附近に開墾の爲めに伐木したる處が三十英反ある、其河岸には風致保存の爲めに一連の紅樹が殘され常に尾長猿

の遊び場となつて居る、當日も數疋が樹上に戯れて居たが中に一二疋の小猿があつて可愛らしいので之を生捕らうと、船頭に命じ擢音を忍ばせつゝ樹下に進んだ、すでに數間に接近せし頃汀に古木やうの一物がある、二三間に近寄るとその古木と思つたのは鰐であつた、擢音に驚き一躍水煙を立てゝ水中に潜り込んだのである、この鰐は今や樹上の猿を狙ひ尾端に力を籠めて猿が樹下に降りて來るのを今や遲しと待ち構へて居たのであつた、實際彼が鼻端と眼ばかりを水面に露はして居るのは或は倒木の浮流とも或は岩石の尖角とも見えるのである。余の農園に飼養せるアカと呼ぶ犬、昔ては黑豹をも組伏せた猛犬であつたが、一日余が小舟でテラム河口を横切らうとする時、アカは强て追縋り十數間の水上を泳ぐのであつた、この河口は猛惡なる鰐の棲家なので急ぎ引き上げようと思ふ途端、水面が俄に動搖するよと見る間に、哀れ犬の姿は水中深く沒し去ると同時に紅血は水面に泡を爲して居た、流石の猛犬も巨大なる鰐口に會しては唯の一嚙りであつた。

夜間鰐が餌を漁りに陸上深く這上る證跡は歴然たるもので、邦人護謨園に於ても既に數頭を捕獲して居る、K園に於ては野猪の害を防がん爲めに設けた陷穽に鰐が墜落し今尙飼養して時々鷄を振舞つて居るがその大さ悠に一丈餘はある、F園に於ては或朝一事務員が井戸端を通過した時、井戸底に恐ろしい唸聲を聞いた、駈せ寄て覗き見ると巨大なる鰐が墜落し今や忿怒にかられて居る、早速園員擧つて出動引き上げて見ると二間に近い大鰐であつた、此鰐は普通のものと異なり無齒であつたが、こは老齡のために脱落したのではなくて會々斯の樣な種類があるのである。

鰐の皮は用途廣く我邦でも錢入や鞄用として貴重視せられ隨分高價な者であるが馬來地方では鰐の狩獵を本業として居る者のあるのを聞かない、是れ當地方の鰐皮が品質の點に於て阿弗利加或は亞米利加產よりも劣つて居り又土人が完全なる鞣方を知らないのが其原因であろうも、更に之に據りて生活し得るだけの多數を捕獲し得ないからでもあらう、されば土人が捕鰐せんとするのは人畜の被害を防止する消極的の目的で營業とする積極的の目的を有つて居るものはない。

三　捕鰐法

從來土人の捕鰐法は陷穽又は釣であつた、前者は夜間鷄小屋附近か彼が必ず通過すべき地點に深さ一丈位の穴を穿ち其上を薄き何物かで蔽ふて置く、彼が不恰好の巨體をノソ〳〵運んで來て若し其前肢が一たび穴の一角に觸れると、忽ち眞逆樣となつて穴中に墜落する仕懸である、而して穴の底は極めて狹隘な爲め身體は狹窄されて流石の强力な鰐も今は如何とも爲す能はざる場合に立ち至る、土人は直ちに强き綱を垂下し口も手も足も

一七　古川護謨園に於ける無筒の鰐

尾も隙間なく縛り絡めて引出すのである、若し此絡方が不完全であると、尾力一揮忽ち綱は寸斷されて了ふ、鰐の强力な事は三四尺の小鰐さへ之を縛つて頭を抑へると彼は怒つて頭を擡げようとする、かうなれば一人や二人の力では到底及ぶ處でない。

釣の方法は一丈位の太き竹に頑丈な籐蔓を垂下し其端に鉤を結び鷄や豚の臓腑の如き臭氣强き餌を附けて地上一二尺の處に吊して置く、鰐は臭氣に誘はれて來て早速飛びつきて一呑みにする、斯くて虚空に吊られて悶えて居る處を土人が長槍で刺し殺すのである、余は一度六尺程の鰐が引懸つたのを目擊したが猛烈に狂ひ廻るので土人はとても近寄れなかつた、以上の方法は小鰐を釣る時で、巨大な鰐に對しては大きなる鉤に鷄又は猿を結び附け、之を板上に乘せて水上に流し、頑丈なる籐蔓の一端には四斗樽位な浮木を附け鰐の嚙へ行くに放任し、翌朝浮木を便つて引上げるのである、或土人は大鰐を釣るのには鉤は不要棒切で充分であると云ふ、其方法は鷄や猿を丈夫な綱で一尺程の棒切と共に縛り河邊に置く、鰐は餌を棒切諸共に呑み込みイザ遁れようとすれば棒切は腹内

に入つて丁字形となり遂に進退の自由を失はしめるのであると。

近年火器の進歩と共に土人中にも射撃を以て捕鰐する者が出來た、從て鰐は臆病となり人間を見て遁げ足が迅くなつた爲め、今や銃獵すら甚だ難事である銃獵の難事なのは啻に彼の逃避が迅速なる計りでなく、一發の下に彼に致命傷を與へる事が六ヶ敷いのである、若し一彈で卽死せしめ得なかつたら鰐は水底深く沈下し假令死に到るも臟腑腐敗する迄は浮揚しないのである。偖急所はと云へば無論腦と心臟であるのは疑ないが水中に浮べる者には心臟を狙ふ事は全く不可能、是非共頭部の急所を狙はねばならない、處が鰐は口元と背部が接近して居る爲めに腦の位置が判明なし難いので、當初余は屢々失敗を重ねたしかし其後實驗に徵するのに、口元の少し後方を以て最も急所と認めて可なりである、世人往々鰐の甲は非常に堅硬で普通の鉛彈では到底貫通しないと云ふ者があるが、そは全くの誤傳で最も堅い背部でも容易に貫通し得るのは實驗の結果疑を容れないのである。

四　ジョホール河畔の鰐狩

余は一日早朝ジョホール河畔に鰐狩を試むべく獨木舟を艤し二名の土人を隨へウキンチエスター螺旋銃と猛獸用二連銃の二者を携へてリダン川を游戈した、土人の一名は舟の舳に脆坐し、他の一名は艫に坐り共に四尺許りの櫂を以て水流を搔き行く態蠻風ながらも悠々として長閑な氣分が漲る、リダン川を遡る事數十間急に舳の土人は頭を低くして余を顧みボワヤ〳〵‖鰐々‖と囁く指す方を眺めると成程一町許り前方の水面に一塊の黑點が靜かに波を切つて動いて居る、鼻面の一端と眼計りを水上に二三寸露はして浮游して居るのは、初見參の者には何うしても鰐とは見えない、唯塵芥の一片か又は朽ちたる木切の浮流して居る樣である、直ちに舟を除行させて余は舷に伏し總に銃口のみを舷上に露はしつ最も靜かに接近を企てた、稍進む頃鰐は余等に氣付いたと見え急に反對の方面に遁れようとする、約二十間に迫る時艫の土人は連りに早く擊てと叫ぶ未だ射撃の理想距離ではないが水中に沒しては萬事休するので思ひ切

つて發砲した、照準は前進しつゝある鰐の頭部卽ち黑點の水際である、忽ち彼は水煙を立てゝ高く跳ね上ると見る間に渦を卷いて水中に沒し去つた、急ぎ舟を進めて現場に到ると水は盛んに渦を卷いて居るが鰐の姿は更に見えない、纔に紅血の泡が漂つて居るのみ、急所は外れたかも知れないが確かに命中して居る、土人は今にも浮揚すると云ふ、彼方此方に舟を操つて死體を搜索したが、遂に徒勞に終つたのは遺憾であつた。

更に舟を上流に進めて、紅樹繁れる汀に徐行し行く〳〵鰐を索めたが見當らない樹間に嬉々として戲るゝ猿群を見る計り、こゝに已むなくリダン川を斷念して對岸テモン川に赴かんと下航を始めると一土人は云ふ、リダンの一小支流に巨鰐の棲息するのを屢々目擊したと若しや今しも浮游しあらんかと、望を懸けて屈曲繁き小流を遡つた、行く事一二町と覺しき頃突然舳の土人がボワヤと叫ぶ途端、數間前方の紅樹の根本より一躍ザブンと水中に飛び込んだのはまがひもなき一巨鰐であつた、餘りの咄嗟に射擊の餘裕さへなかつたが彼が水中に入る瞬間に見た印象によれば餘程巨大のものであつた、と斷言し得る、茲に愈々

リダン川を斷念してテモン川に針路を轉じた、舟が將に本流に出でんとする時、河岸の樹枝に一疋の大蛇が居る、黑と黃の斑點を有して甚だ綺麗である、直ちに霰彈を以て射殺したが距離が餘りに近かつた爲め多數の彈痕を與へ之を帶革にせんとする希望は空しく水泡に歸したのである、長さ約一丈。

折柄の風濤を冒して本流を橫斷し、愈々對岸の支流テモン川の川口に進んだ、同所には常に巨鰐が棲息し時々水面に雄姿を現はして行く人を驚かす、界隈の日本人や土人はテモンの川口と云へば鰐の巢窟として知らぬ者がない、中には テモン川の主神と云つて恐怖する者もある、しかるに當日は何たる不幸ぞ全く其雄姿を認むる事が出來なかつた、餘りの不漁に業を煮しつゝ更にテモン川を遡る稍ありてフト川岸を眺めると十數間前方の紅樹の下に長大な黑色の塊が動いて居る、言ふ迄もなく鰐！今や紅樹を出でゝ水面に向つて進むのである、余は舟を靜かにして彼が汀に出るのを待つた、彼は余等の狙つて居るを知つてか知らずでか最も悠々として汀に近づく、その刹那！口元の後方を照準して一彈を見舞へば狙ひは過またず、鰐は一度跳ね上つて二三尺突進したが何故にか水

中に飛込まうとはしない、巨體を右に動かし左に轉じ七轉八倒して苦悶する態物凄くもまた壯觀であつた、舟を急行せしめた、僅に二三間の近距離に迫る、彼は眼光怖ろしく余等を睨むで居る、余は彼が何故に一躍水中に入らないかと不審に思ひ凝視すると彈丸は肩を貫通して前肢の運動の自由を失はしめて居る、歩行は全く出來ない、今し余等を二三間の近距離に控へながら又如何とも

二七　馬來の牛車＝スンゲランへ行く處

遁るゝ術がないのであつた、余は靜かにモーゼル拳銃を以て頭部を射撃し遂に彼を絶息せしめた此行纔に一尾を獲て切てもの心遣とし、再び風濤と戰ひつゝ引揚げた。

五　バトバハ河畔の遠征

余が屢々遠征を試みて象や野牛や犀や獏を索めたムーア河と、新架坡との中間にバトバハといふがある、ジョホール國の西海岸、馬拉加海峽に注ぐバトバハ河の河畔は今日こそ護謨栽培の好適地として人氣を呼べ古來鰐の棲息地として有名なのである、殊に其南方十五哩程のスンゲラン川は殆んど鰐の巣窟地とさへ稱せられて居る。

今春余は一閑を得てスンゲラン川に鰐を狩るべく新架坡に軍容を整へ、一名の寫眞師を伴ひて海路バトバハに渡つた、翌早朝其地に着き直ちに牛車に賃して南下四哩程なる南亞公司第二植林地を訪ふた、支配人M氏は余等の到るを待ち詫びたものゝ如く非常の歡待を以て迎へられたのである、晝飯後同支配人外一名の日本人を嚮導として相變らず牛車に搖られながら、更に南下六哩のタン

ジョンラボンに向つて出發した、當日は炎熱殊に甚だしく眞に爍くが如く日光が直射する、タンジョンラボンに牛車を棄てゝ徒歩五哩の徑路を辿り、スンゲランに到着したのは早黄昏に近かつた、此町は戸數僅に六七十、最近の新開地なので宿泊すべき何の設備もない、已むなく同地の警察署長を訪ひ一夜の宿を乞ひ、空腹を癒すべく附近の印度人商店から辛きカレーを購ふて來て口唇の燃ゆるのを忘れ胃腑を滿したのである。

余等がスンゲランに來て先づ第一に當惑したのは清水の缺乏である、缺乏と云ふよりは皆無である、河水は濁流滔々として恰も汁粉を攪亂した如く、飲料水處か恐らく洗面にも堪へない、同地方唯一の飲料水は天水であるが當時一週間の炎天續き天水は一滴すらない、水流も一層の濁味を加へて居る、余等は纔にソーダー水に依つて渇を癒し、警察署の板敷上にアンペラを敷き南京蟲に痛められつゝ假寢の枕に夢を結んだ、拂曉眼覺むれば署長の斡旋に依り既に一の大獨木舟に土人船頭三名は纜を按じて待つて居る、急ぎ腹を拵へ鰐の寢込みを襲ふべく出動した、川岸に立てば朝霧靄々として水面を蔽ひ、曉風冷やかに征衣を拂

ふのである、余は銃を携へて舳先に位置すれば舟は枚を銜んで河上を射る、時は甚だ早い、未だ一隻の舟も通過しない、鰐の眠さぞや深からう、余等は此間に敵を索めるのである、潮は八分方引き尚引きつゝある、舟は流れに沿て靜に下る。

沿岸はニッパ散在し鉛色の泥土は物凄く光つて居る、風全く汀ぎて木の葉の一片すら動かぬ、唯水流の汪洋として圓滑なる畝りを立てゝ流るゝばかり、余は眼を皿大に張つて敵は何處と眺むる中、忽ち前方二十間、ニッパの蔭に物動くよと見る間に長大の一怪物は辷るが如く水中に沒した、殆んど照準の餘地がない、斯くては成らじと身構へつゝ最とも嚴重に兩岸の汀を注視すれば又も一頭を發見した、早速一彈を放つて後頭部を貫通せしめたが、未だ卽死せしむるに至らずして盛に泥中に跳ね廻つて居る、直ちに第二彈又第三彈を發射して止めを刺し綱で以て河岸に繫いて置いたが、身長一丈、一同幸先好しと喜び勇んで下航を繼續する、行く事數町、居るは〳〵、兩岸の汀、十間に一頭、二十間に二頭、土色に紛れて幾多の鰐は眠つて居る、櫂の音に夢破られて水中に飛込むものもあれば、二三間の近距離に迫るまで我を忘れて眠るのもある、唯色合が甚だ土色に紛はしく

七三　スンゲランの鰐狩

注視宜敷を得なかつたら發見に困難である、ゾロ〳〵匂ひ出すのを發見しては最早射撃の時機は失して居る。

兎に角鰐の棲息の夥しいのには一驚を喫する外はない、余は未だ半島の何處に於ても斯く多數の鰐が棲息して居るのを知らぬ、スンゲランが鰐の巣窟といふのは強ち一片の噂ではない、余はその最も巨大なのを狙へる爲め射撃の機會は多くなかつたが若し鰐兒をも尙獲んとならばそは實に易々たるものである、次で余は一頭の巨鰐を射撃したが彼は殆んど斃れんとして辛くも水中に免れた、恐らく數時間

を經ずして絶息するであらうが其浮揚迄には なほ多少の時日を要する、後ちに又ニッパの間から斜に首を出して居る一頭を發見し幸に一發の下に卽死せしめたが死體を檢すれば彈丸は眼と耳との中間を貫通して居た、余は種々な動物を狙撃したるが一發の下に射止めるには鰐ほど困難な者はない、蓋し鰐には頸部と稱する部分がない計りか少し遠望すれば其頭部さへも明瞭に照準する事が出來ぬ。

斯くてスンゲラン川を下りつゝ其後二哩の間に於て四頭を斃しその十數頭を負傷せしめた、河口に至つて休憩中彼方の梢に三羽の鶴が舞ひ下るのを發見して射撃し其一羽を獲つた、滿潮に送られて再びスンゲラン川を遡りたるが、時既に漁船の出動後なので遂に其一尾をも發見する事が出來なかつた。

鰐狙撃の時刻に就ては狩獵家の間に種々な說がある、其多數は炎熱酷烈なる白晝好んで泥土上に甲羅を干すといふ、しかし余がスンゲランに於て實際に目撃したのは冷氣未だ去らざる早朝であつた、要するに彼が陸岸に匂ひ上つて眠るのは最も靜寂の時を撰ぶらしい、それで先づ潮の干滿を察し、次で船舶航行の

有無を考へねばならぬと思つた。

正午上陸し道を轉じて陸路バトバハ河の上流スリーガーデンの三五公司植林地に行きこゝに厚き待遇を受け、翌朝余はM氏と袂を別つて更に上流なるセンブロンに赴き午後小舟を浮べて鰐を漁つたが僅に二頭を發見したのみで射撃するに至らなかつた、其翌日汽船でまたバトバハ河を下り途上甲板から水面に浮游せる鰐數頭を射撃したのであつた。

六　ムーア河に大鰐を獲る

其後護謨栽培地を視察すべく甞て野獸を追ふたムーア地方に赴きての歸るさ、夕方河口のバンダルマハラニに到着したが、新架坡行汽船は翌夕との事に其夜はレストハウスに一泊し翌日午前土人に勸められて上流數哩に鰐狩を催した、一小獨木舟を艤し二名の土人を舳と艫に配置して漕ぐこと前の通である、ムーア河の兩岸は汽船の横着が出來る位で例の紅樹は少なく椰子や檳榔樹等の栽培樹が茂つて居る、俄然一土人はボソヤ〳〵と連呼した、見れば如何にも一頭の

巨鰐が頭部を水面に露はして浮游して居る、其位置は丁度水流の中央であるから余は左岸に沿ふて接近を企てたが、舟が次第に接近すると彼も余等の來るのを知つてか、漸次右岸に向つて移動を始めた、河の幅員凡そ五十間、已むなく再び中流に引返したるが彼は依然移動を繼續しつゝ汀に垂下せる緣樹の蔭に隱れたのである‖失策ッ！‖と思ひながら緣樹近く舟を進めると果然樹枝の間に彼の怖ろしい眼光が輝いて居るのが見えた、好機！最早猶豫すべきでない、早速その後頭部を照準して射撃し能く一彈の下に致命傷を與へたのである、直に籐蔓に縛り舷に繫ぎ曳行して歸る、身長實に一丈四尺、余の狩つた鰐の中で最大なものであつた。

第一二　エンダウ洲の狩獵

一　狩獵旅行の日記

エンダウ洲はジョホール國の東北に位し、北はエンダウ河を隔てゝ馬來聯邦のパハン州に接し、同國中最も未開野蠻の一州である、最近東海岸の一小港メルシン附近に錫礦が發掘せられてから、稍々事業家の注意を惹きし此未開野蠻の地にも、多少文明の氣が浸潤して來たものゝ、海岸の一部を除いては內部交通の不便言語に絕し、僅に州の中央を流るゝセンブロン河、北境に近きエンダウ河の水域に據るの外は、鬱蒼たる密林は今尙古來斧鉞の入らざる原狀を呈し、徒に蠻族サカイの棲家と、猛獸毒蛇の跋扈に委しつゝあるのである、最近半島縱貫鐵道のクルアン停車場を起點とし州の中央を東海岸のメルシィに橫斷する道路が企劃せられ、旣に其一部は着手されて居るが、之が完成には尙多少の時日を要する、從て我邦人で此地方を旅行したものは未だ一人もない、栽培業者が今此地方に着眼して開墾に從事したならば、其肥沃なる土壤は將來交通の便と相俟つて

大に稗する所があらう、しかし余の今回の旅行はこの樣な見地からではなく、世人より忘れられた此不毛の地には、またそれ丈け野獸が豐富であらうとの見込をつけたからである、茲に閑を得て友人K氏同行愈〻狩獵旅行を企てた。

大正五年九月二十四日、新架坡日本ホテルの一室に狩獵の準備!!獵銃三挺、寢具、一行二週間分の食料等!!を整へた余は、早朝馬來土人ムヅウを隨へ市の中央なるタンクロード停車場に駈付けた、友人K氏は已に余等を待ち受けて居る、午前七時九分、一行を乘せた汽車はウードランドに向つて發車した、ふと車中を見ると舊知セナイ護謨園主I氏、南洋護謨會社マネヂャーG氏が居る、數十分の汽車の旅をかく知友と談笑の裡に過ぎ行く樂しさよ、一同此行の前途に幸あれかしと語るのも娛しい。

余が車窓に腕を支へ、ふと窓外を見やる時、余はしばし驚きと敬服とを禁じ得なかつたのである。思ふ、數年の昔、余が初めてこの汽車中の人となつた頃は軌條の沿側は晝尙暗き大森林であつて開墾せられた山野と云ふ可きは僅に點在するに過ぎなかつたではないか、然るに今や如何、嗚呼祝福すべき哉、數歲の努力

よ、汝は冷や鬱蒼たる密林を遠き彼方に逐ひやりて、手入せる護謨林、美しきパイシアップル畠に化したではないか、斯く驚き、斯く敬服する時、余等は早や汽車を捨てゝオールド海峽連絡汽船の上に立たねばならなかつた、此日天氣晴朗、水波起らず鏡の如き海面を原始的なる土人の帆船がたゝはジョホール國の首府である、連絡の汽車は已に一行を待ち受けて居る、遠く近く徂來する樣一つとして津々たる情味をそゝらないのはない、船は早やジョホールバルに着い

七四　射落したる犀鳥

かくて車は駛せ境は轉ずるが沿線の左右は滿目唯綠、タピオカの畑、護謨林の彼方には蓊然たる大森林が襲ふが如く迫るが如く茂つて居る、思を走する今回の行、果して幸多きや否や、ふと我に返へると同車の白人等は已に朝食にかゝつて居る、多分新架坡出發の砌電話で命した者であらう、我等は珈琲と水菓子とを命じ暫し雜談に時の移るを忘るゝ內、汽車は早やセナイに着いた、こゝに一行はI氏と袖を分つた、蓋し氏は二三年前この地に一植林地を購ひ、既に採液、頗る好成績を納めつゝある、更に北には臺灣拓殖會社が最近に購つたライアンライアン植林地がある、此地方の開墾進歩亦驚く可く、余が往年の旅行を追憶する時、實に隔世の感なき能はずである。

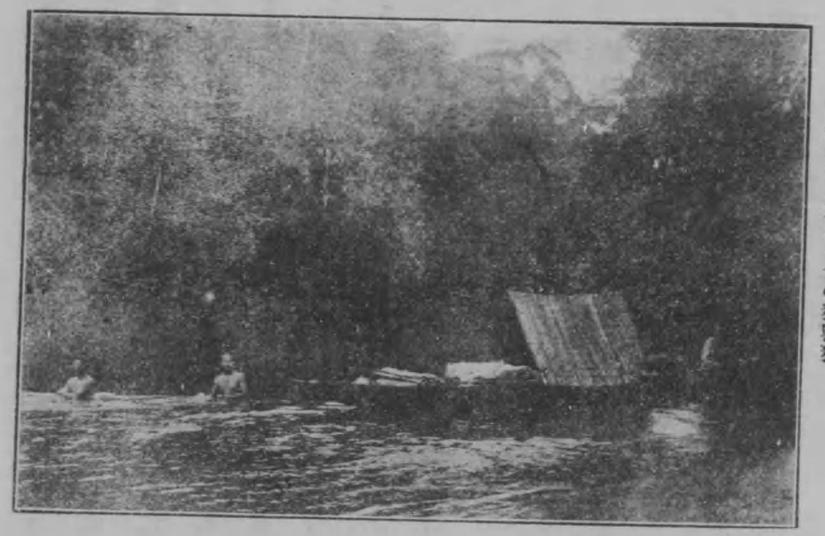
午前十一時我等はG氏と袖を分ち目的地たるクルアン停車場に下車した、此邊は元一寒村に過ぎなかつたが、今や企劃中の鐵路からメルシンに到る道路の起點となり、又バトバハ地方に通ずる分岐點に當つて居る、出入の人々頗る多く殊に近來支那人の植林者が尠くないから、人家次第に稠密、日本人の藥房經營者もあれば又我娘子軍の一隊も居る、然し大體に於て勞働者若くは小商人の類で

云はゞ純然たる一新開地である。吾等は一先づ印度人の喫茶店に喉をうるほし、此間にムヅウを北方約三哩、舊クルアン村に派遣した蓋しセンブロン河下航の準備、携帶品の運搬等に付き村長に協議せしめたのである、ムヅウが歸つて報ずる處によると、川を下る小舟は得たが停車場から舊クルアンに到る支流は屈曲甚しく殊に當今水が少いから到底小舟を操つる事が出來ないと、これ位の支障は當然である、止むなく印度人夫七八名を雇つて荷物を持たせ我等亦各一梱宛を擔ひ、酷烈な直射の日光を浴びつゝ、鐵路に沿うて北上した、由來、印度人夫は總て荷物を頭上に乘せる習慣で背負たり肩に擔ふたりはしない、些少な物品にも一人の頭上を要する腑甲斐なさ到底支那苦力の能率の半にだも及ばない、然し今日咄嗟の場合之を得たのはまだしもの仕合と云はねばならぬ。

午後四時漸く舊クルアン村、村長の宅に着いた、彼の厚意に依つて小川に面せる一假小屋に陣取り先づ携行の寢具を敷いた、家とは云ふものゝ四方全く開放の四阿に過ぎぬ。時しも村長來つて曰くニョール附近に野象が出現すると、素破好敵御座なれ」と勇みつゝ先づムヅウを偵察に派遣し（大倉護謨園のある處で

ある）我等は靜かに水流にて沐浴する事にした、すると巨大なる一羽の怪鳥が飛んで來て頭上高き樹枝に止つた、K氏が急ぎ銃を執て一發を放つとあやまたず落ち來つたのは一羽の犀鳥であつた、此鳥は頭上に骨質の槌のやうな隆起物を有し、常に深山幽谷に餌を漁るのである、見ると羽毛には無數の小蟲が附着して居るこれには一同尠らず辟易した、間もなく其河邊に大きな河獺が徘徊するのを發見したが遂に射擊の機會を失つた、既にして日は暮れ四邊闇々として寂莫さ身を襲ふの感がある、我等は未開の僻地に只二人、萬一を慮つて銃を引寄せ秋の夜に似た蟲の聲を聽きつゝ寢に就いたのも一興であつた。

二十五日＝此日あはよくばニョール附近に巨象の一頭を斃さんものと待つた甲斐もなく、八時頃ムヅウは瓢然と歸つて來た、曰く前夕現場附近に野象の行衛を偵察せんとしたが處々に水流横はり渡渉が出來ないので遂に目的地に達し得なかつた、しかし此處から小流を利用し小舟で迂回せば到達し得るだらうと。間もなく我等はセンブロン河を下航すべき一獨木舟を得た、そこで二人の船頭を雇ひ總ての携帶品を積み込みはしたが中々舟は出さうな氣合がない、如



七五　エンダウ河の水浴

何したのかと問へば今からクルアン停車場迄米を購ひに行くのであると、時既に午前十時之から六哩の路を往復せねばならぬ、由來馬來人の呑氣さ加減は之を以ても知り得るであらう、馬來土人を使用し規律あり豫定ある行動は殆んど不可能である。午後四時頃漸く米の準備が調ふたので、愈々小川を下航する事になつた此邊は河とは云へその幅甚だ狹くそれに流れが急である、兩岸からは樹木蓊鬱樹幹樹根の隆起突出夥しく舟の操縦に非常に困難を極めたが薄暮漸くバロ川の合流點に著いた、余は野象に未練が

殘つて居る、先づ之を搜索せんとバロ河を遡るべく舟をやるとバサオ草は水中に繁茂し、水は深くして水流殊に急である、二人の頭船は長き棹を巧に操り流を突て進むのである、幾何もなく太陽は全く沒し四邊闇くして黑白を辨じない中に螢の如き燈火を賴りとする一行の危險亦思ふべしである、彼方に衝り此方に搜りつゝ前進したが川幅益々狹く屈曲愈々甚しく、行手を見定むる事さへ出來ない、止むなく一小支流アヨの邊りに船を停め夕食を炊ぎ猛獸の來襲を恐れて舟を中流に繫ぎ寢に就いたが、奇鳥怪獸の聲遠近に囂しく木の葉の戰ぐ音さへ四方から襲ふ樣に聞える、川面を見詰めるとバサオ草が一面に蔓り、葉の黑き影の動くのも何んとなく一種の凄味を添へるのであつた。

二十六日―午前六時名も知れぬ樹木の蔽ひかぶさつた間を縫ひつゝ、急流を遡れば間もなく一の部落に出た、サカイ族バロの棲家で、河邊に二三の小屋がある、數人のサカイ人が駈けて來て我等異人種を見て奇異の眼を見張つて居る、余はバッテン―部落長―に野象はどうかと尋ねると、二日前の夜には數頭來襲していたく耕作物を荒したが其後少しも姿を現さないとの事、余は時機の遲かつ

たのを悔いた、行手を急ぐ身、此處に朝食を喫し、九時頃流れに沿ふて下る。前夕の合流點を過ぎ正午頃カンポンロンダに着いた、是又サカイ族の一部落である、一軒の大なる掘立小屋があつて、周圍にはタピオカが耕作せられ高さ人丈を沒する、余は屋内に進み家の内を見ると、樹皮樹葉を以て多數に區劃せられた中に十四五の家族が雜居して居る、殆んど裸體で其醜惡さ不潔さ實に言語に絶するのである、併し余が嘗て見たムーア地方のサカイ族に較べ幾分進歩の狀の見えるのは、此地方は水流の便がある爲めに自然馬來土人等と交通の機會が多いからであらう。折しも食事時であつた此處彼處に車座となつて木の葉に食を盛り椰子の殼に水を飲みながら、手握みに口の邊を汚しつゝ貧り食ふ有樣は宛然猿猴と異ならぬ、彼等の常食はタピオカである、其根を擂り我菓子ちまきの樣に造つて芭蕉の葉で卷いたもの、余は試みに其一を食べて見たが風味殊の外によく、若し砂糖を附けたならば更に美味であらうと思つた、余は彼等にも野象の事を尋ねた、しかし近來トント出現しないとの事に落膽せざるを得なかつた。嬰て此家を辭し餘りの暑さに木蔭涼しき河邊に水浴した、こゝは微風颯々と草は

青く、森は綠に實にも世俗を離れた仙境である、浴後再び河を下る、沿岸に嬉々として戯れて居る黑猿の群が水搔く櫂の音に驚いて樹間を飛廻る樣も面白い、フト岸上を見れば六尺にも近い大蜥蜴がニッパの間から怖ろしい首を擡げて居る、よき獲物よと小舟を逆航せしめK氏は四號の霰彈を以て射擊した、彼は其まゝ息が絶えた、此邊より兩岸にはパサオ及ロタン＝籐＝生ひ繁り川は畝り畝つて居る、時に河幅狹隘にして急流渦を卷くかと思へば、時に又廣濶沼の如く水流殆んど死せる處もある、我等は一サカイ族の情報によつてこの邊近く巨象が河を横斷したと聞いた、絶えず注意して居ると果せる哉、泥土中に巨大な足跡があつて岸上に進入した形跡がある、直に船を止め此度こそ幸あれかしと上陸して點檢したが新しと云つても既に二十時間以上を經過して居る、到底追及し得ないと思ひ引揚げようとする折から密林中間近に一つの野獸を發見した、射擊の準備を爲しつゝ之を追擊すると、开は二頭の羚羊であつた、余は「好き獲物御座んなれ」と匍匐し之に接近した、彼等は愛らしき短き白色の尾を打振りつゝ漸次森林深く遁走したが、遂に其一頭が一つの水溜の邊りに佇む處をつきとめ一彈を

見舞つて射殺した獲物を小舟に運んで河を下り、軈て程良い森空の一岸に上陸した、こゝで飯を炊ぎ今し打ち取つた鹿肉を炙り一同舌鼓をうつたのである。

再び出發すれば日は漸く沒し燦爛たる星光は河邊の螢火と相俟つて暗黑なる水面に映じ、舟首は幽かに金波を弄んで居る、兩岸の鬱蒼たる樹木は魔王の手を擴げた如く、夜の森の凄みを添へて居る、一同舟底に横臥して遠征の情坐ろに切なる折、一船頭は語る、此邊水最も深く六十尺に及ぶ、嘗て一土人が禮拜の

六七　圖らざる御馳走

爲め河邊に沐浴して居ると突然一つの大鰐が現れ土人を一口に呑み込み齒さへ立てなかつた、鰐の長さ實に六十尺と、話半分にしても巨大な事は疑を容れない、ムヅウ又曰ふ、十數年前彼の父は此附近で一大白蛇を目擊した、其頭は彼岸に其尾端は此岸に達して居た‖川幅は少くとも三十間餘まりある、その大さは想像し得られるであらう‖これは河の主で之をまのあたり見た者は幸運であると、余は前夜二頭の白蛇に出會ひ其一頭を斃した夢を見たが今此等の話を聞き一種不思議の感に打たれずには居られなかつた、斯く何となく薄氣味の惡き中に暗夜を冒して我等は數哩を下つた、先づこゝに碇泊して一夜を明す事にしたが四隣凄陰幽寂、首を上ぐれば小燈影暗く耳朶に徹する野猿の叫、妻戀ふる鹿の聲に和し余は云ひ知れぬ悲哀を感ずるのであつた。

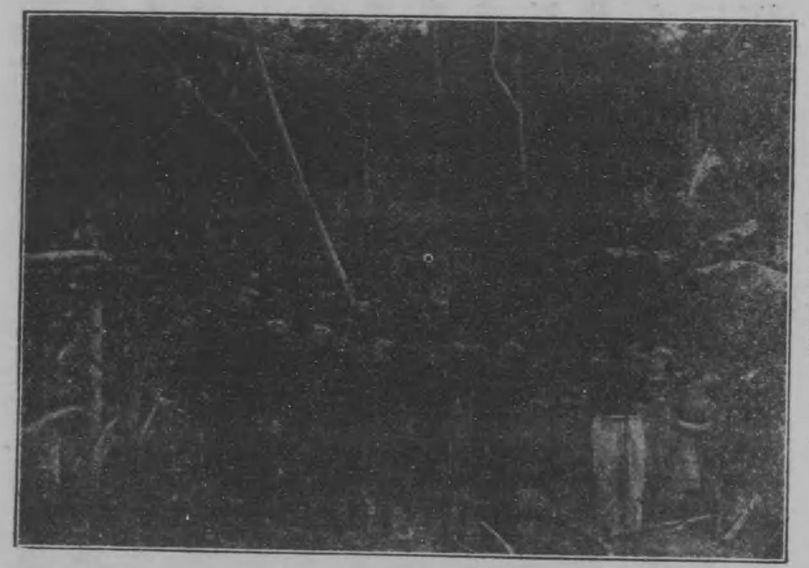
二十七日‖五時半目覺む、水流に顏を洗はんとフト彼岸を眺めると六尺に餘る黑色の怪魚が淺瀨を靜かに泳いで居る、余はライフルを執り、朝霧を破つて射擊したが距離の稍々遠きと水中であつた爲め遂に遺憾にも逸し去つた、土人は鰐であらうと云ふ、余は慥に魚の一種で鰻の甲羅經たものであらうと思つた、間

もなく小舟は流れを下る、靄々たる朝霧深く立ち罩め涼風面を打ち身は熱帶に
あるのを知らぬ、ブロンガムや、ブナイ＝鳩の類＝が群をなして飛で來た、狙撃し
てその數羽を獲た、更に下航する事數哩、スライ河の合流點に著た、岸上に登つて
朝食を喫したが此邊は野獸の足跡殊に夥しく、虎の臭氣さへあつて氣味の惡い
事一入である、スライ川の上流にもサカイの一部落があつて附近には象、野牛な
ども豐富であると聞いた、しかし川幅狹く水淺く而も屈曲甚しく倒木多く夕刻
でなくては到底到着し得ないとの事で遂に斷念した、余はカハン川上流に犀を
渴望せる矢先きである、そこで食を急いで更に河を下つた、流れ急にして水淺く
小舟の操縱實に困難を極めた、河は途中より三方に分れ我等は最も水の多い右
手を撰んで進んだが屈曲甚しく兩岸は鬱々たる密林に蔽はれ倒木重り時に山
刀を振つて之を切り進む事さへあつた、數哩にして河は再び合し汪洋たる大河
となつて居る、五時頃カハン河口に達した、こゝに一先づ舟を停め水浴夕食を終
へ日暮れて後更にカハン河を遡航する事にした、水流は急であるが極めて清く
暗を辿つて數哩を進み午後十一時舟を停めて泊る。

二十八日＝午前六時流れを突いて進んだ、山茫々として繪の如く川は朝霧が
立て罩めて居る、八時頃カハンのサカイ部落に出た、時しも彼岸の叢林中に山鷄
時を告ぐる事頻りである、K氏は直に土人一名を伴れ、折からの小雨を衝いて聲
を索め須臾にして其二羽を獵た、此山鷄は一部學者の說では家鷄の祖先と見な
されて居る、形態全く我古來の家鷄である、余等は早朝から計らざる御馳走に預
つた。と見ると一方の斷崖上に一軒の堀立小屋がある、馬來の家族が棲んで居
るらしい、我等は先づ其處へ上陸した、數町を經てサカイの部落が見える、余は犀
狩の嚮導を得んと一馬來人を案内に濕地を踏み小さき丸木橋を辿りつ行けば
森林中に三四軒の汚き小屋がある、附近にはタピオカ其他少しばかりの野菜を
耕し見るから醜惡なる男子は何れも戸外に槍、吹矢を持つて集つて居る、婦女小
兒は屋内より一行を見て驚異の眼を見開いて居る、初め余は其意味がわからな
かつた、心私かに疑惑を生じたのであつた、然るに何ぞ計らん、彼等は連日此邊に
出現し家畜家禽を掠奪する巨豹退治に出掛ようとする處であつたとは、そこで
余が來意を告げると彼等は喜んで我等の加勢を願つた、元より欲する處、直に彼

等を嚮導として進發した、巨豹は晝間多くはタピオカの畑中に睡むるとて、其二三は先頭に立ち丈なすタピオカの畑に入る、皆鋒先き鋭き槍に一種の毒を塗抹したのを提げ恐ろしい眼を光らしながら進む、その樣、壯絶又快絶、やがて一二丁潛りつゝ進んで行くと果して行手に恐ろしい唸聲が聞える、タピオカの根本から透して見ると一頭の黄豹齒をむき牙を鳴らして一同を睥睨して居る、余は直に銃執り直し先づ一擊を試みたが漸く其一足を負傷せしめたのみ、彼は忿怒にかられ、怖ろしく怒號しつゝ跛足引きつゝ間近き一土人目掛けて攻擊しようとする、土人は直に毒槍を投げつけたが手練誤たず、彼の横腹を刺し通した、流石の猛豹も今や起き得られない、しかし彼は尙も人に向はうとの氣勢を示した、其獰猛さ又一段、余は近寄り更に一彈を報いて遂にその頭部を粉碎した。此豹はあまり大ならざる牝豹であつたが尙他にも巨大なものが居るとの事、彼方此方を搜索したが、遂に發見する事が出來なかつたので先づ一豹を獲て凱歌を奏したのであつた。余は今迄に幾多の猛獸巨獸を斃したが此豹の如く小にして且猛惡に反抗したのを目擊したのは初めてゃあつた。

サカイの語る處によると此邊は野象は少いが豹の類は夥しく居る、更に少しく上流に進めは犀、獏にも屢々遭遇すると、余は犀を渴望して止ない、此語を聞て大に喜びバッテン＝部落長＝外一名を案内として正午頃カハン河を遡行した、一時間程遡ると目下工事中なるクルアン停車場からメルシンに到る道路に達した、森林は伐採され兩側から積上げられた堤道は幅廣く、これが完成の曉には自動車をも疾走するに足る立派な道路である、之に從事する勞働者は多く皆支那人である、蓋し斯くの如き僻地に勞働する彼等の精力奮鬪を見て余は一驚を喫せずには居られなかつた、余は兎に角、今日中に此附近を偵察しようとK氏と共にサカイ二人を伴つて上陸し工事中なる濕地に横はる丸木の上を進むこと哩餘、其端より森に入れば蟲々たる巨樹巨幹は天に聳え晝尙暗き大森林である、進む間もなく巨大な虎の新らしい足跡を發見する、又二三日を經た巨象の足跡もある、我等は銃に裝塡し四方に眼を配りつゝわけ行けば一人のサカイは先頭に毒槍を携へ他のサカイは後尾を警戒して居る、序に言ふ彼等が槍を持つのは柄の根元を握り刄を前方に向けて肩に擔ふのである、是れは萬一猛獸に遭遇し



七七　サカイ族と豹狩の途出

た時、直に投げつけ得る姿勢なので古來我國の武者行列の如く鋒先を高く上に擔ふのとは全く違つて居る、軈て濕地に到ればブンバム、モンコンバ＝我萬年青に似たる葉＝等繁茂し尙且ガンガム＝刺の多き木＝、ロタン＝籐＝等の有刺植物蔓り右に曲り左に折れ通過の困難言語に絶する、しかし此邊は野獸の足跡四通八達、軈て平地に到れば犀の新らしき足跡さへある恐らく前夜のものであろう、犀はボアンシブウの果實を好む、どうやらこゝに夥しく落下して居るのを漁つたらしい、余

の喜び一方ならず、直に追躡したかつたが、時既に三時を過ぎて居る、到底不可能遺憾ながら明日を期して歸路に就いた、途中ロットン＝黑猿の類＝の一群が啼き叫つゝ嵐の樣な音を立てゝ轉々樹梢を飛び廻つて居るのに、會つた、時しも突然其内の一匹が墜落した、取り上げて見ると愛らしい美麗な小猿で、宵て生捕つた木の葉猿に酷似して居る、余は舟に持ち歸つて折しも通りかゝつたサカイ族の一婦女に飼養を依賴すると、彼は我兒の如く愛み己の乳を含ませて居た。余等は水浴の後、翌日の戰捷を期して寢に就いた、水は滔々として流れ、夜は刻々に更け怪鳥は屢々耳朶を掠めて去るのであつた。

二十九日＝七時半小舟を出て發す、K氏ムズウ、サカイ二、及余の五人、二三日分の食料及天幕寢具を携へて、朝霧を拂ひつゝ先づ前日の犀の足跡をたどつて追躡する、密林を分けて新古の足跡此處彼處に點々するを便りに、軈て一小流へトミゴーイ川に達した、水清く且つ急であるが淺い、河邊の砂地には拂曉河を渡つて徘徊した二頭の犀の足跡がある、一行の勇氣百倍、直に追擊に移らうとした、然るに何んぞや急に天空暗瞻洋墨の如き雲勃然として頭上を掩ひ、何處ともなく

襲ひ來る颯風面を掃ふと見る間に豪雨沛然として盆を覆し、到底追擊どころの騷ぎではない、大急ぎでニポンや、椰子等の葉で掩笠をこしらへ臨時の雨除を作つた、此時一頭の野猪雨を衝て間近迄來たが、遂に射擊の時機を逸する、待つ事三十分豪雨は止み蔽ふたる黑雲はいつしか消えて樹々の枝葉は露を含んで輝いて居る、早速また犀の足跡に跟隨したが惜哉、猛雨の爲めに足跡が判明しない、非常な苦心に右往左往滴たる露にそぼぬれつゝ靜かに繁れる密林を開きながら三四哩も進んだ頃更に一つの小流に出會ふた、此時小流の彼岸密林の中に異樣の物音が聞える、サカイは「犀」と云ふ、一同平頭低身拔足差足漸やく近づき得た頃は早や犀の影だになく、只、犀が今迄遊んだらしい形跡のみ殘つて居る、サカイの云ふには從來の經驗に依ると、犀は一度人と遭遇しても、若し人が之を追はないならば必ず半時間か一時間で、再び元の場所に戻つて來るものである、今之を刺多き密林中に追擊するよりは寧ろ此處に待つ方がよいと、我等は之を信じ息を殺して待こと時餘、しかも何等の徵候がない、今は業を煮やし追躡しやうとは云つたものゝ、時は既に夕刻に迫り天候も亦穩かでない、それに此邊から先きは殆

んど水を得ることが困難であるとのことに止むなく追擊を中止し、小流の邊りに天幕を張つた。

此時同行のムヅウが急に手の甲に痛みを感じ、サカイも亦足に痛みを覺えた。如何したのかと問ふと、毒木ゼラタンの葉に觸れたのであると云ふ、余嘗てムーア地方野牛狩の途につきし時、同行の友人の手甲がこの毒木に觸れ一ケ月を經るも尙痛傷を感じたことを記憶して居る、ゼラタンの毒の激甚なる事

七八　毒木ゼラタン

エンダウ洲の狩獵

驚くばかり、手の一部が之に觸れると忽ち腋の下にゴリ〳〵が出來る、足が觸れば股に、顏が觸るれば頸に而かも痛みが甚しい、若しそれ腹部に毒が觸れる時、その人は死ぬとさへ云はれて居る、嘗て妊娠した一土人の腹部に觸れ間もなく死んだことさへあると云ふ、怖るべき毒木なる哉、現にサカイの持つ槍の穗先に塗沫せる激毒の主要部は此ゼラタンの葉から採つた液である、之にワーゲンの脂とイッポーアカオの根とを混じて製したもの、其猛烈な激毒の爲めには虎豹と雖も立どころに斃れるとの事である、ボルネオ島ダイヤック族が吹矢に塗り白人を苦めるのも之である、余は所持の藥を與へたが痛さは容易に去らない、此附近には尙ほトバブルーと云ふ蔓科の植物がある、水中に投ずると魚類が死ぬからサカイ族は之に依つて小流に魚を漁るのである、然し人類には害はない。

我等は小川に米を研ぎ鑵詰を開いて夕食を共にし、天幕の中に木の葉を敷きサカイ諸共假寢の夢を結んだのである、猛獸の害を避けんが爲め、天幕の外に終夜焚火をした事は勿論である。夜半幕營附近にベサンと云ふ蛇の一種があつて我笙の音に似た聲を發する、清く高く、森の憐に一入の情趣を添ふるのも面白

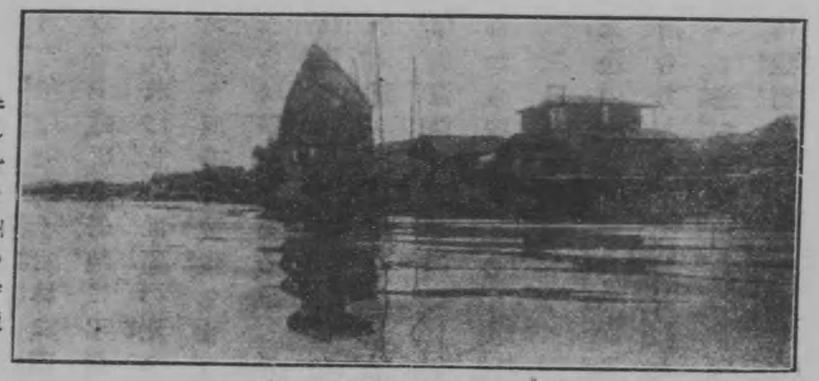
かつた。

三十日―早朝目覺むれば朝霧深く森林に垂れ罩め、四邊森閑として木の葉を點々する露の音の間に孔雀鳳凰の高き鋭き聲が時々遠く寂寞をやぶるのである、七時過ぎ食を濟まし早々未練ある昨夕の犀の足跡を傳ふて奥山深く分け入つた、濕地を越え密林を過ぎり、進み進んで搜索したが何處へ行つたか影さへない、或は恐怖にかられて遠く遁走したのであらう。其他にも犀獏などの足跡は夥多あるが皆一兩日を經過して居るので追躡に値するものがない、茲に遺憾ながら余は此附近を斷念し、更に上流を搜索せんと決心して歸途に就いたのであつた。

知らず〳〵深入りした事とて一寸方向が分らない、處が、流石山男のサカイ野獸の小徑を辿つてズン〳〵進むのに感心する、折しも先頭にあつたサカイの一人不意に驚いて立止る、と見れば小徑の邊、朽ちた大樹の幹から一丈三四尺の大蛇現れ、我行手を遮り鎌首を上げて襲撃せんとして居る鱗は黃金色で非常な毒蛇とのことである、余はサカイに殺さしめようとしたが彼等は恐れて近寄らな

い、止むなく一彈を浴せると彈丸は彼の頸部を貫通し忽ち横様に倒れたものゝ直に起き直り雜草中に侵入した、余は更に腹部を射擊したしかし何の効もなく彼は早くも我等に近づき草叢中より執念深き鎌首を現はし恐ろしき口より炎を吹き今し飛びかゝらうとする氣勢である、僅々五六尺、余はその猛烈さに一驚を喫したが頭部目がけて更に一彈を發射すると誤たず、長大の巨體を七轉八倒藻掻きもがきて遂に息は絶えた、馬來土人の言に依れば此蛇は非常な毒蛇でジョホール政廳に於てもその撲滅を奬勵し政廳は一呎に付き二十五仙の賞金を與ふる規定であると、余は天幕に持ち歸り其皮を剝いだ、正午過ぎ天幕を疊み、小舟に歸る、途中一尺餘の山龜を生捕る。水流にて例の沐浴をなし、夜は舟に疲れを憩ふて寢に就いた。

十月一日＝黎明食を濟まし、更に上流に向つた、曙色清うして心神自ら澄み兩岸の森はゆかしくも朝霧が立罩めて居る、川幅は割合に廣いが水淺くして舟底往々砂を嚙む、おまけに兩岸よりの倒木は容赦なく川に横たわり舟行非常に困難である、我等は或は倒木を切り或は其下を潛りつゝ進んだ、進行の程度遲き事



ヒンダウ洲の狩獵

七九　馬來の河川＝其一

驚くばかり、此邊より上流へはサカイ族と雖も殆んど行つた事がないとの事である、僅か二三哩を進むにも七八時間を要し二時頃辛くも豫定の場所に着いた、河の中央に一砂州があつたので、我等は先づ其上に天幕を張つて居所を定め、直にサカイ二名を連れて右岸に欝々たる密林中を搜索したが更に犀の足跡がないせめて猪鹿の類でもと思つたが其足跡さへも見當らない、此人跡未踏の大森林中に猪鹿にさへ出會はないのは不思議であると思ひつゝ夕刻天幕に歸つて寢に就けば、夜半數回恐ろしき虎の咆哮を聞くのであつた、人心惴々篝火を照して只管防備を嚴にする、さても猪鹿の類の居ないのは猛虎の跋扈した爲であつたか。

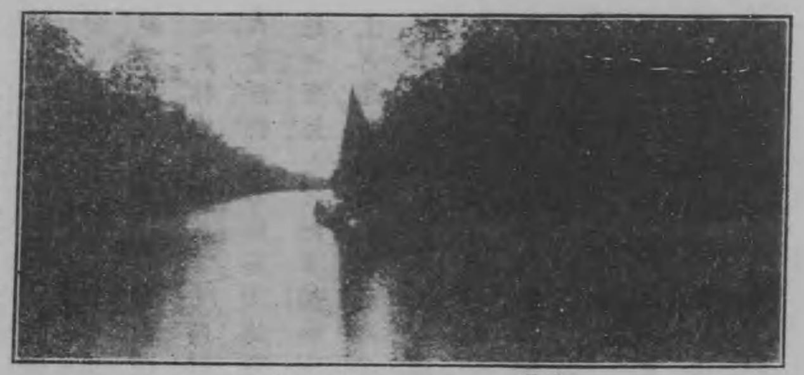
二日＝早朝より余はムヅウ及サカイ二人を從へ

川の左岸を深く密林に踏入つたが數日を經た野象の足跡の外何等見當らないので十時頃幕營地に引揚げた。犀を捜索して既に三日困難を冒して此處迄來て尙未だし、余は運の惡さを歎せずには居られない、やむ無く此附近を斷念し、エンダウ河畔を捜索しようと決した、其處には假令犀は居ずとも野牛の棲息せることは確かである、直に準備して江を下り先づサカイの部落に到つて彼等と分れ豫て飼養を賴んで置いた小猿を受け取り、尙も河を下つたのである、舟矢の如く夕刻カラン河の合流點に達した、余は數日前一サカイがカラン川の上流で巨犀に遭遇したと聞いたが、犀も亦野象の如く常に密林中を徘徊移動する者であるから捜索を止め中流に碇泊して寢る事にした。

三日‖黎明河を下る二三哩、河幅漸く廣く四五十間にも及び、水流亦急でない、此邊の河畔には良木が產出するので支那勞働者の伐木に從事するものが數ケ所もある、やがて積材のため一隻の小蒸汽船が支那トンカン‖大船‖數艘を曳いて遡るのに出會つた、支那人の奮鬪何時もながら感服の外はない、午后は頻りに猛雨が降つた、夕刻になつて空晴れブロンガム、ブナイ‖鳩の類‖が夥しく飛

來する、我等は其數羽を射落す、嚮てセンブロン河とエンダウ河の合流點に着いた、先づ警察署を訪ひ語るに我等の目的を以てしたすると署長は意外の報を告げるのであつた、曰く數日內にジョホール國王が野牛狩の爲めエンダウ河畔に來る筈で、既に河畔は偵察監視せられて居る、とても入ることが出來ないと、余は當惑した、しかし詮方がない、蓋しジョホール國王は大の狩獵好き常に擴く出動し、其行かんと欲する處卽ち御獵地となりこの臨時の御獵地は直に他人の狩獵を禁ずる、一般狩獵家の迷惑一方でない、聞く國王が出獵せんとすると、豫め偵察を命じ野獸の存在を慥める、萬一にも出獵後野獸が存在しない樣であれば、逆鱗甚しく當事者の恐縮限りなしとの事である、それで偵察報告の上は野獸を保護する事一方ならず、監視者は唯々戰々競々命これ奉ずるので、野象、犀の如く常に移動するものは假令偵察の時、現在して居ても決して報告しない、野牛、虎、鹿の樣に比較的遠く徘徊しないものゝみを上申する、エンダウ隨一の好場所と豫定した處も遂に狩るを得ず、空しく河を下つて碇泊するの止むなきに至たのは返へすゝも遺憾であつた。

四日＝拂曉と共に江を下ると兩岸の森林は未だ眠から覺めない、朝霧靄々として棚引き山鷄の聲仄かに江を渡るのである、此邊は河幅殊に廣く百間乃至百五十間、洋々として流れて居る、河岸には馬來の部落處々に點在し土人の獨木舟が亦此處彼處に見られる、午後カンポンブルアンに到着した、此地は同行の馬來人ムヅウの故郷、我等は先づ上陸して老村長を訪ふた、彼は七十に近き好老爺である、我等の訪問を非常に喜び何呉れとなく世話をやいて呉れた、彼の話に依ると前夜上流二哩の馬來部落に數頭の野象が耕作物を害し其咆哮は遠く此邊迄も聞えたとの事、そこで余は折から其附近に戻る一土人があつたのを幸ひ今夜再び現れたら明朝一刻も早く報告して呉れる樣にと賴んだ、村長又曰ふ＝此邊には孔雀が多い、常に耕作物を荒し折角播種した穀物は掘つて喰はれ其被害一通でない、毎日夕刻には屹度來るから今暫く＝と、余は此會話中フト家裏の水牛牧場を眺めやると、今し數羽の巨大なる鳥は中間に設けたる耕作地の外柵に飛上り、飛下り、光澤ある青色の長き尾を夕日に輝かしつゝ敏捷に活動する樣の見事さよ謂はずもこれ孔雀である。從來檻中に飼はれて穩和に悠々たる此鳥を



八〇　馬來の河川＝其二

エンダウ洲の狩獵

見慣れた我等の眼には何んとしても孔雀とは信せられない位である、彼等は連りに播種をついばみつゝある、老村長は又かと舌打をして居る、我等は到底坐視する事が出來ない直に銃を提げ地面を匍匐しながら接近して射撃せんと企てたが、彼の警戒彼の視力は驚くばかりに鋭敏である、忽ち雜草中に飛込み恰も德利の樣な青き長き首を打ち振りつゝ疾走する敏捷さ、容易に接近する事すら出來ない、しかし孔雀は薄暮必ず一定の樹に寢るとのこと、その時之を打取らうと思ひ一先づ引き揚げる事にした、歸途土人の一小兒が間近の草叢中を指示するのを見れば僅か十二、三間かなたに彼の長き青首のみを突き出て居る、直に四號の霰彈を正面から浴せかけたが無效、忽ち舞ひ上り見事なる長尾を夕日に輝しつゝ

飛立つた機を誤たず左銃身のB號を以て狙撃すれば確かに手應があつた、數十間ならずして彼は急轉直下する、駈けつけて見たが羽毛のみ散亂して巨鳥は發見することが出來ない、蓋し孔雀は大なりと雖も、雉、山鳥と同樣卽死しない限りは叢林中に潛入する、時は夕刻である、一頭の獵犬があるでない、僅にムヅウの一人を同伴するのみであるから搜索には非常に困難をしたが、辛くも彼の美麗な尾を發見して漸く捕へ得た時には既に絶息に近かつたのであつた、喜び戻れば土人達の云ふのに孔雀の雄は森林の神である、これを殺す時は禍が其身に來ると、土人は雌は捕へるが雄は決して殺さない、是れ確かに一種の迷信である、併し又其美を保護する自然の言ひ傳へであらう。此夜我等はムヅウの斡旋に依つて久しぶりに馬來の御馳走に預り家屋と云ふものゝ内に、安らかな夢を貪つたのであつた。

茲に不思議な事は此部落には五六軒の家があり、大勢の土人が棲んで居るのに老村長を除きては全く皆婦女、男子の影さへ見えない事である、現に我等が宿泊した家屋にしても十數名は婦女のみで男子は絶えてなく、全く女護の島へでも來た樣な心地がした、聞けば此邊の婦女は獨立獨歩の精神、强く男子に優る勞働をして自活し、男子の世話になるものは殆んどない、畑を耕し川に漁り木を伐す皆婦人の手である、老若、勞働に耐へないものさへ屋内にニッパの葉を以て疊表を編んで居る、他の地方に於ける馬來の婦女に比し勤勉な事驚く計りであると思つた。

五日＝早朝K氏亦一羽の孔雀を獲た、此朝我等は前日の約束に依り野象の出現を期待したが遂に何等の報がない、しかし此附近には猪鹿の類が多いので今日は之を狩らうと思ひ立ち食後銃を提げて牧場の一端に立つた、眺むれば廣野に放飼されたる數十頭の水牛此處彼處に群をなして食を漁り、その壯觀言ふ計りない、その間に混じて小牛の如く而も敏捷に行動する數頭がある、初めは小牛とのみ思つて居たが、凝視すれば巨大なる野猪である、水牛と共に食を漁りつゝある、そこで我等は地形を利用し地物に隱れつゝ匍ひ寄り、遂に其二頭を斃したが如何にせん運搬に人なく僅に肉の一部を切つて携へ歸るのであつた、しかも其肉は家の内に置く事さへ許されない、料理を依頼する事も叶はない、蓋し此邊

一八　密林中の幕營

の土人は殊に宗教上の信仰強く、豚類には全く手を觸れる事がないからである、止むなく我等自身で之を料理し孔雀は家人をしてカレー煮になさしめた、余は初めて孔雀の肉を食べた、柔かで何等の臭氣もなく味雉か鷄に髣髴殊の外良好である、土人共は孔雀をさへ食べない、恐らく森林の神の祟りを恐れてゃあらう、しかし、鹿は土人共の好物なので午後余等は更に鹿を獲ようと一哩程距れる米田に赴いた、途中で二、三回大鹿に出會ひながらいつも射撃の機を逸し、更に孔雀や山鷄が間近から飛出したが殘念ながら之を

も打ち損じた此附近は米田とは云へ單に森林を伐採して米を播種したのに過ぎない稻は今や數尺に生繁つて居るが倒木が多く歩行誠に困難である、僅に鳩數羽を獲て歸途に就く時又もや豪雨に苦しめられ尠からず困却した。

此夜再び余等は家屋内に厚遇を受けた、日暮れて余とK氏とは共に程遠からぬ水溜に水浴した、するとなんとなしに足に這ひ上つて嚙みつくものがある、其痛さ骨身に徹する、驚いて燈火に照し檢すれば黑色の小さな蟻であつた、余が嘗て虎狩の際に苦しめられたのは赤蟻であつたが、赤蟻よりも黑蟻は一層猛烈嚙みつくと同時に注射する蟻酸に何んとも云へぬ痛さを覺える、水浴も何もあつたものでなく這々の體で逃げ歸へた。

六日‖此日も亦野象の報がない、一土人は昨夜半前岸に野象の咆哮を聞いたと云ふが、前岸バハン州は余の狩獵許可區域以外である、九時頃愈々この女護島を辭して河を下つた。途中一馬來人に遭つた、彼の曰ふ數日前、彼岸なる彼の住宅附近に猛虎が現れた、取敢えず射撃すると虎は重傷を負ひながらも逃走して今尙近所の叢林中に潜伏して居る、何卒衆人の爲めに退治して呉れぬかと、然し